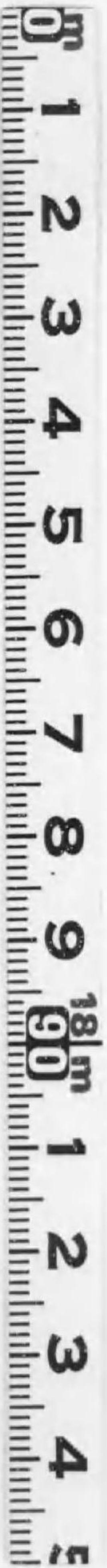


2907  
332



始



特116  
637



重政春峰著

大  
祓  
正  
解

皇道宣布會藏版

大正  
15. 3. 17  
內交



此書係由... 捐出... 存於... 閱者... 勿得... 損壞... 遺失... 照例... 辦理... 如有... 違礙... 之處... 隨時... 報告... 庶幾... 有益... 於世... 謹此... 聲明...

大祓詞

集侍。親王、諸王、諸臣、百官、人等、諸、聞食止宣。

天皇朝廷。爾仕奉留。比禮挂伴男。手襁挂伴男。靴負伴男。劍

挂伴男。伴男乃八十伴男乎。始氏。官。官爾。仕奉留人等乃。過

犯家牟。雜雜罪乎。今年六月晦之大祓爾。祓給比清給事乎。

諸聞食止宣。

高天原爾神留坐。皇親神漏岐神漏美乃命。以氏。八百萬神

等乎。神集集。賜比神議議。賜氏。我皇孫之命波。豐葦原乃

水穗之國乎。安國止。平久知所食止事依志奉伎。如此依志奉

志國中爾。荒振神等乎波。神問爾問志賜。神掃比爾掃賜比氏。語

問志磐根樹立。草乃垣葉乎。語止氏。天之磐座放。天之八重雲

乎。伊頭乃千別爾千別氏。天降依志奉支。如此久依志奉志。四方

之國中登。大倭日高見之國乎。安國止定奉氏。下津磐根爾宮

柱太敷立。高天原爾。千木高知氏。皇御孫之命乃瑞御之舍

仕奉氏。天之御蔭日之御蔭止隱氏。安國止平氣久所知食武。

國中爾成出武。天之益人等我。過犯家牟。雜雜罪事波。天津

罪止八。畔放。溝埋。樋放。頻蒔。串刺。生剝。逆剝。屎戶。許許太

久乃罪乎。天津罪止法別氣氏。國津罪止八。生膚斷。死膚斷。白人。

胡久美。己母犯罪。己子犯罪。母與子犯罪。子與母

犯罪。畜犯罪。昆蟲乃災。高津神乃災。高津鳥乃災。

畜仆志。蠱物爲罪。許許太久乃罪出武。如此出波。天津宮事以

氏。大。中。臣。天津金木乎。本打切末打斷氏。千座置座爾置足波志

氏。天津菅曾乎。本刈斷末刈切氏。八針爾取辟氏。天津祝詞乃太

祝詞事乎宣禮。

葦原千五百秋之瑞穗國是。吾子孫可王之之地也。宜爾

皇孫。就而治焉。行矣。寶祚之隆。當與天壤無

窮者矣。

カクノラバアマツカミハアミノイハトラオシヒラキテアミノヤヘガモタイヅ

久罪。天津罪。注別。國津罪。人生。國。死。國。口人。  
胡久美。己母犯罪。己子犯罪。母與子犯罪。子與母  
犯罪。畜犯罪。昆蟲乃災。高津神乃災。高津鳥乃災。  
畜仆志。蠱物爲罪。許許太久乃罪出武。如此出波。天津宮事以  
氏。大中臣。天津金木乎。本打切末打斷氏。千座置座爾置足波志  
氏。天津管曾乎。本刈斷末刈切氏。八針爾取辟氏。天津祝詞乃太  
祝詞事乎宣禮。

葦原千五百秋之瑞穗國是。吾子孫可王之也。宜爾  
皇孫。就而治焉。行矣。寶祚之隆。當與天壤無  
窮者矣。

如此久乃良波。天津神波。天磐門乎押披氏。天之八重雲乎伊豆  
乃千別爾千別氏所聞食武。國津神波。高山之末短山之末爾上  
坐氏。高山之伊穗理短山之伊穗理乎撥別氏所聞食武。如此所  
聞食氏波。皇御孫之命乃朝廷乎始氏。天下四方國爾波。罪止云布  
罪波不在止。科戶之風乃。天之八重雲乎吹放事之如久。朝之御  
霧夕之御霧乎。朝風夕風乃吹掃事之如久。大津邊爾居大船乎。  
舳解放。艦解。放氏。大海原爾押放事之如久。彼方之繁木本  
乎。燒鎌乃敏鎌以氏打掃事之如久。遺罪波不在止。祓給比。清  
給事乎。高山之末短山之末與利。佐久那太理爾。落多支都速  
川能瀬坐。瀬織津比咩止云神。大海原爾持出奈武。如此持出波。  
荒鹽之鹽乃八百道乃。八鹽道乃鹽乃八百會爾座須。速開都比  
咩止云神。持可可吞氏武。如此久可可吞氏波。氣吹戶坐須氣吹戶  
主止云神。根國底之國爾。氣吹放氏武。如此久氣吹放氏波。根國  
底之國爾坐。速佐須良比咩登云神。持佐須良比失。氏牟。如此  
久失。氏波。天皇我朝廷爾仕奉留。官官人等乎始氏。天下四方  
爾波。自今日始氏。罪止云布罪波不在止。高天原爾耳振立聞物止。  
馬牽立氏。今年六月(十二月)晦日夕日之降乃大祓爾。祓給比  
清給事乎。諸聞食止宣。四毛國卜部等大川道爾持退。出  
祓却止宣。

## 自序

現代は殊に思想界の大混亂時である。學者も、政治家も、宗教家も、教育家も、何等の定見があるのでなく、浮いた橋の上で瀬踏みをしてゐる有様で、浮世の語は浮きくゝの今日の世の状態を眞に言ひ現はしてゐるやうであります。五條の御誓文に

「知識を世界に求め大いに皇基を振起すべし」

とありますが、廣く知識を世界に求む上句丈は聖旨に叶つてゐますけれども、翻つて下句に思ひ到りますと、何んと社會主義の勃興、悪思想の蔓延、不逞の徒の横行皇基を危うする學者があるではありませんか。教育の力は、果して我大日本帝國を眞に發揚するに役立つてゐるのでありませうか。又宗教家は數多くあるが、平和と安穩とに導いて居るであらうか。聖日蓮はその立教に臨んで、

「念佛無間。禪天魔。眞言亡國。律國賊」

の大旗を振り翳して大獅子吼を致しました。而し、今日は、宗教家のみを對照とする場合ではない。日蓮の語をかりて現代を見よ。實に

「教育無間。政治天魔。宗教亡國。實業國賊」

の世態は誰か之を否むことが出来ませう。幾多の日蓮現はれずんば、救済するに途なき状態に立ち到らしめてゐるのである。

噫!! 金甌無缺なる我國體の前途こそ、誠に我等の深く憂ふるべきである。皇祖皇宗に對し奉りて、御皇室の爛榮は、我等國民の大責務たるのであります。これ百度維新に當りて、明治天皇深く御軫念遊ばして、五條の御誓文を垂れさせ玉ふて國民の向ふ處を示し玉ひ、續いて明治二十三年十月教育勅語を下し給ふた次第であります。然も日夜御叡慮を惱まし玉ふた御事は、數知れぬ御製にも拜せられて誠に恐れ多き極みであります。

然るに世の學者たるもの、深く思ひを茲に致さず、學は西洋にありとして、剩へ日本には道なしと誣ひるものさへ生ずるに至つては、聖旨に悖ること甚だ遠く、皇

基の振起は愚か、現状は何んたる有様といひたいのである。是れ教育家に警鐘を亂打し以て、一大覺醒を促す次第である。

「大いに皇基を振起すべし」とは實に皇祖皇宗の踏み玉ひし惟神の道あるを教へ玉ふたのであります。明治天皇の御製に

敷島の大和島根の教へ草

神代のたねの残るなりけり

と教へ玉ひしを拜察しても、彼等の淺慮凡識より日本國に道なしとは何たる文盲の言ぞ。「知識を廣く世界に求めよ」と仰せ玉ひしは、實に、惟神道を宇内に發揚せんが爲め先づ準備教育に大御心を垂れさせ玉ふたのであります。それを何ぞや、教育の究竟目的に未だ達せずして、皇基を危うする言動を發するが如き何んたる不敬漢ぞ何んたる増上慢ぞ。かゝる學者の中毒を受けて、我が醇風美俗たる敬神崇祖の念も日一日と薄らぎつゝあるを見ては、予は教育無間と歎かざるを得ないのである。陸海軍より大砲を除いて何をか生命とせん。神國を誇る萬世一系の國より敬神崇祖を

失ふて何の立國ぞ。教育既に然り。况んや宗教に於ておや、神事を離れての政治に何の理想かあらん。誤れる思想と黄金毒とに世は渦巻けるのみである。

聽て天武天皇の御詔勅を拜するに

「斯乃邦家之經緯王化之鴻基焉」

と。皇典古事記を後葉に流へ玉ふてゐるのであります。この古事記こそ、實に日本最古の書であつて、大日本國の大使命を物語つてゐる一大神書たるのである。幸にこの神書の傳はりますこそ、大日本國は不斷に蘇り、永遠に光輝を發揚するに充分であつて、神國の神國たる所以を失はざるは、誠に有難き極みなれであります。

明治天皇が「大いに皇基を振起すべし」と誓はせ玉ふたのも、亦教育勅語を下し玉ひし御聖慮の程も、尙ほ數多き御製を拜し奉りても、悉く、皇典古事記に傳へます。「邦家之經緯、王化之鴻基焉」を廣く學者に教へ玉はぬものはありません。然るに皇典を專攻する學者に至つては、實に雨夜の星なり。而も古事記の攻究たるや淺薄にして其の眞義は現時にいたるも未だ徹底的解説を見ざる有様にて、寔に世

の靜謐を期すべからざる次第であります。

尤も古事記の眞價は或る程度迄、在來の國學者、神道家等によりても、認められ就中本居、平田の諸先覺の之に關する註釋書類に至りては何人も感嘆せずには居れぬ。久しき歲月に亘りて土中に埋没して居た寶物が是等の人々のお蔭で兎も角も發掘されて、附着せる泥や塵を洗ひ落されたやうなものである。其功勞は誠に偉大である。是等の諸先覺なかりせば表面の辭義の解釋すら附かずに、現在吾々は多大の困難に遭遇したことであらうと思ふ。然し乍ら古事記三卷の神話的外衣の下に盛られたる神聖無比の天地神人の秘奥に至りては、本居、平田の諸先覺と雖も尙ほ一指だに染むるに至らなかつたのである。

皇典古事記を解すべき鍵は、日本言靈學と天津金木學との二大神學である。言靈を活用して之を討究すると、深遠博大なる新意義が一語の裡から湧き、一句の間から溢れて滾々として盡くる所がない。金木を運轉して之を拜察すると、幽玄靈妙な宇宙開闢そのまゝの神業神作がよく伺はれる。量から云へばたつた三卷に過ぎぬ



が、其の内容から云へば優に萬卷十萬卷の書を成すに足りる。若し夫れこの二大神學に據らんか、其の奥は何處までも深く、其の範圍は何處までも廣い。天地の創造神人靈界の關係等、宇宙の大哲理も説かれて居れば、天理人道の基本、世界人類實行の指針も示され、祭祀と政事との要訣も教へられて居れば、人類道徳の基本も示されて居る。其他ありとあらゆる人生の諸問題につきて一々根本的解決を與へられて居る。されど表面の辭義の解釋から觀たる古事記は、最も善意に見て、世界有数の神話たるに過ぎぬ。神代及び上古の状況を窺ひ、日本の國民性を探ぐるに、重要な古書であるといふに止まる。希臘、印度等の神話に比して立派に對立は出来るとしても、其上に一步も二歩も抜くといふ事は公平の見地から觀て先づ困難である所ろが一旦、日本言靈學と天津金木學との鍵を以て之を開いて見ると、前述の如く天地間至貴至重の神典たることが初めて判明するのである。古來世界中に現はれたる神話も、經典も、哲學も、科學も何も彼も其の前に立つと全然光を奪はれて了つて、太陽の光の下で蠟燭も、ランプも、電燈も、瓦斯燈も薩張り壓倒されて了ふの

と髣髴たるものがある。されば神武天皇の御詔勅も、明治天皇の教育勅語を下し給ひし御聖旨の程も、皇典古事記によつて初めて徹底を期し得るのである。さりながら、皇典古事記を茲に紹介せんは、彼の本居、平田の大哲人を以てしても、尙ほ不可能事たりし所にして、到底予の凡智凡能のなすべきものにあらざるのである。然れども、幸に予の研究たるや、大祓の詞は皇典古事記三卷に流るゝ深淵幽邃なる一大思潮の縮圖たるに歸一したのである、茲に於て先づ「大祓正解」を發刊して、予の目的とする古事記の眞價を多少にても發揮することを得、且又思想善導に資するところあらば、望外の幸ひなりと信じ、茲に淺學菲才を顧みず敢て梓に上す次第である。

大正十五年二月十一日

著 者 識

## 凡 例

- 一、本書は皇典古事記を講述して後、發刊するが順である。それ故、未だ古事記を解せざる人には、不徹底の箇所尠からざるは、甚だ著者の遺憾とするところであるが、大體大祓の真意のみは紹介し得たつもりである。
- 二、本書の骨子は「タカアマハラ」の六字である。充分精讀あらんことを望む。但しこは沈滞せる斯道に一大波紋であると著者は信じて疑はぬ。
- 三、天津金木學、日本言靈學は皇典古事記を初め、世界の經典を解する鍵であるから、是非とも特志家の研究を促す所以である。
- 四、本書を梓に上ぼすの機會に當り、謹みて、從來直接間接に種々の指導を蒙りたる諸先生の鴻恩を感謝したてまつる。特に恩師水谷清先生の鴻恩を感謝したてまつる。

五、本書發刊に對しては前枚岡神社宮司從四位武津八千穗氏大阪府神道聯合會理事  
長松尾幾太郎氏を初め講師諸氏の多大の後援を感謝す。

大正十五年二月十一日

著 者 又 識

## 大祓正解目次

### 第一章 大 祓

- 第一節 大祓の次第……………(一)
- 第二節 大祓の沿革……………(四)
- 第三節 大祓の儀に就て……………(七)

### 第二章 大 祓 講 義

- 第一節 自六月晦大祓至諸聞食止宣……………(一六)
- 第二節 高天原……………(一八)
- 第三節 自皇親神漏岐神漏美乃命至所知食止事依志奉伎……………(二六)

目 次

第四節 自如此依志奉志國中爾至天降依志奉支……………(四〇)

第五節 自如此久依左志奉志至安國止平介久所知食武……………(四六)

第六節 安國……………(五一)

第七節 天津罪……………(六一)

第八節 國津罪……………(六五)

第九節 三大神事……………(一一)

第十節 自如此久乃良波至遺罪波不在止祓給比清給事乎……………(三七)

第十一節 自高山之末短山之末奧利至末句……………(四〇)

### 第三章 大祓と現代

第一節 現人神及び大日本國……………(五〇)

第二節 かみながら道宣布は勅命……………(一五二)

第三節 かみながらの道と大祓……………(一六二)

第四節 惟神之政施設の完備……………(一七)

第五節 主師親三徳の擴充……………(一八〇)

第六節 惟神道宣布と國民の覺悟……………(一八三)

# 大祓正解

重政春峰 著

## 第一章 大祓

### 第一節 大祓の次第

大祓は、六月十二月の晦日に、百官以下、臣民一般の罪穢を祓除する式である。宮中に於ては、賢所の前庭なる、神樂舎に於て行はる。各地方に於ても、各適宜に祓所を設け、地方官員、及び管内人民一般の爲めに、祓の式を行ふのである。即ち、天下一般の祓であるから、これを「大祓」と申すのである。

宮中に於て、行はせらるゝ大祓の次第は、此の日、先づ午後一時に、節折の御儀あり（此の儀式は後に掲ぐ）一時三十分より、祓所の鋪設をなし、祓物等を具備せらる。同二時、掌典長以下著床す。同時に、式部官の案内によりて、各廳の

勅、奏、判任官の總代數十名、入りて西の幄舎に著床す。かくて、式場の整ふや  
 掌典補二人、案上の御麻に祓の稻を挿む儀あり。是に於いて、掌典長、掌典を  
 召して、祓の事を仰すれば、掌典、進みて、高案の前に至りて、大祓詞を奉讀す。  
 讀み畢れば、掌典進みて、案上の大麻を執りて退き、著床の諸員に向ふて、之を  
 祓ひ、畢りて、大麻を掌典補に授く。大祓詞を奉讀してより、こゝに至るまで著  
 床の諸員起立するものとす。次いで掌典補、祓物を執りて、大河に參向す。かくて  
 式畢りて各、退出するものとす。

節折はこれを「よをり」といつて、公事根源には「竹にて御丈の寸法をとりて、そ  
 の程に折あてがへば也」と見えてゐる。「よ」は和名抄に「兩節間俗云レ與」とあり  
 竹の節と節との間をいふ名である。その御式は、正午十二時より、宮中鳳凰の間に  
 御場所をしつらひ、皇后陛下、及び、東宮殿下、同妃殿下の御贖物も、御場所に供  
 へ置き奉る。かくて午後一時に出御あらせられますと、侍従、荒世の御服を差し上  
 げる、御服をお返しになると、次に、御麻を差上げる。御麻をお返しになると、次

に、竹にて、御體を量り奉る事五度、御體の量法は、江家次第に、量御躰五度先  
 量三身長、次量下自二兩肩一至御足上、次左右手自二胸中一至三指末、次量三左右腰至二  
 御足、次自三左右膝一至御足とある。次いで、荒世の壺を差し上げる、お返しにな  
 る、荒世の儀了りて、和世の儀に移る。其の御式、荒世の儀の如きである。荒世和  
 世に就ては、大祓執中抄に曰く「荒世、和世の御服とは、宸儀の罪穢をつけて、祓  
 却り給ふ服の事にて、荒世は惡穢の具、和世は善祓の具なり」と。略ぼ其の意を知  
 ることが出来るのである。即ち主上の御贖物の御衣の名である。

なほいはゞ荒は、荒魂の荒にて、其のあらびによりて、禍ち犯した罪穢を祓除す  
 る爲めの料に用ゐるが、荒世の御服である。又、和は和魂の和にて、其の徳用によ  
 りて、福善を求むるための料に用ゐるが、和世の御服であります。今、荒世の御服  
 には、白絹、和世の御服には紅絹を用ゐさせ玉ふ御制であると申します。  
 さて和世の儀畢ると、主上には入御あらせらる。掌典、御贖物を執りて、大河に  
 參向し、掌典補、御麻を執つて、祓所に向ひ、やがて大祓の儀となる。これ以下

は前述した次第を取り行はせらるのである。

### 第二節 大祓の沿革

大祓の式は、いつ頃から起つたか尋ねますと、太古、伊邪那岐の大神が、黄泉國から還らせ玉ふて、筑紫の日向の橘の小門の楹原に於て、御禊を遊ばした神事更に素盞鳴男神の天上に於ける御暴逆を解除する爲めに、取行はせられた、天の岩屋戸前の神事を、天孫瓊々杵尊の降臨當時より、天下に傳へられたものであることは、大祓の詞によつて察せられます。而して、古語拾遺には、神武天皇中州を平定遊ばして都を大和國橿原の地に奠め玉ふた時に、天種子命に天津罪國津罪を祓はしめ玉ふた事が載せてあります。其れから以降、世々絶ゆることなく行はれたのでありまして、現今の如く六月十二日の晦日と定められたのは、神祇令に、

凡六月十二日晦日大祓（謂祓者解除不祥也）東西文部（謂東漢文直西漢文首也）上祓刀讀祓詞（讀文部漢音所讀者也）訖百官男女聚集祓所中臣宜祓詞

#### ト部爲二解除

とあり。太政官式に

凡六月十二日晦日於三宮城南路大祓。大臣以下五位就朱雀門。辨史各一人率中務式部兵部等省中見參人數百官男女悉合。祓之、臨時大祓亦同。とあり、元明天皇紀に

養老五年七月始令文武百官率妻女姉妹會於六月十二日晦日大祓之處。と見えてゐて、大寶令以後の事であり、その以前は臨時に行はれたものであつたのです。

其の後、清和天皇の貞觀の制にては、百官の大祓は、朱雀門に於て行はれた。其の式は、貞觀儀式に、「上神祇官願一切麻訖、中臣趁就座、讀祝詞稱聞食、刀稱皆稱唯○祓畢、行大祓。次撤五位已上切麻、既而散去」と見えてゐる。又延喜の四時祭式には、「六月晦日（十二月准此）大祓、云々右晦日申時以前、親王以下百官、會集朱雀門ト部讀祝詞」とあります。

爾來、百數十年間、多少の沿革はあつたが、なほよく行はれて來てゐたのであるが、後漸く神事を重んぜざるに至つて、祓の所に、參集するもの、甚だ少になつた事は、小右記に次の如く見えてゐる。

天元五年六月廿九日、今日大祓所公卿一人不參。仍以三右小辨惟成一爲上代二被レ行レ之。内侍等稱 障不向三祓所。仍以二女史一爲二内侍代一。

斯様な譯で、朱雀門の大祓は、後世、遂に斷絶するに至つたのである。かくて、東山天皇の元祿四年六月二十九日清祓といふ名目で、吉田社にて大祓を御再興あつた事、基量郷記、季連紀等に見えてゐる。但し禁中の祓のみで、全國には及ばなかつたのであるが、明治維新後、四年六月に至りて、節折大祓の舊儀、御再興仰せ出され、同月廿五日に

大祓之儀從前六月祓、或ハ夏越神事ト稱シ執行來候處、全ク後世一社ノ神事ト相心得本儀ヲ失ヒ候ニ付、今般舊儀御再興被レ爲レ在候間追々天下一般修行可レ致様被ニ仰出ニ候事

と布告せられたのである。此の時は、賢所の便殿を以つて、節折の御式場と定め又、賢所の御前庭を、大祓の所と定められ、同廿九日を以つて、其の儀を行はせられた。翌五年六月に至りて、地方官の大祓式を定めさせられたのである。これより天下一般、此の式を行はれる事となりました。其の後、更に多少の改正を経て、明治二十二年一月、今の宮城に御還幸の後、前に述べたやうな、御次第にて、賢所の前庭なる、神樂舎の内に於いて、行はせらるゝことゝなつたのであります。

### 第三節 大祓の儀に就て

大祓の儀は、前節に述べたやうな、次第、沿革によつて、太古から行はれてゐる。大祓の大意については第二章大祓講義に悉しく述べて置いたから、尙一層、嚴格なる神事であることが、御判りになるであらう。而して、大祓の詞は、大日本國の使命を顯示した皇國唯一の大經典でありまして、簡單ではあるが、全文、悉く金玉



の大文字を羅列してあつて、一字一句たりとも輕卒に取扱はれない大秘事を藏してゐる神事であるのであります。夫れ故に、從來執行され來たつた大祓に、果して此の大文字が徹底してゐるかドウかといふ事に思ひ到りましたなら、幾多の研究餘地があらうと思ひます。此の点は、大祓の威力を發揮するか否かの重大なる分岐点であります。今後學者、識者の熱烈なる研究に俟つて、その字義なり、神事の方法等を明瞭にする必要があるのであります。これは、國民全體の大責務と謂はねばなりません。著者は僅に金玉を發掘した程の未成品のまゝ、世間に發表致しますことは一度は双葉の中に枯渴させる嫌ひを恐れたのであるが、主義を奉ずるもの、國體を云爲するもの、黙してゐる問題ではありません。國民と共に研究して一日も速に金甌無缺の國體を中外に發揚するは、生を大日本に得たものゝ等しく責務であること深く信じます。故に、拙文をも顧みず、思想の洗練をも待たず、發表致しますからドウか、我が國體の現狀を憂ふる盡忠の士の御賛助を仰いで、大祓の研究を完成致したい次第であります。

而し、大祓の儀式について、取り敢へず、私の意見だけを申し上げますと、大祓の詞から特に

「時」「處」「位」

の三つが完全に定められて後に執行されねばならぬことが察せられるのである。「時」とは神事を行ふ時であつて、六月(十二月)晦としたのは古來の慣習であるが、これは大いに研究すべき重大事だらうと思ひます。時機といふ事は、何事にも最も必要な事であつて、事の成否は一にかゝつて時機にあらざるものはないのである。次に「處」とは神事を行ふ場所であつて、大祓の祝詞には「大倭日高見の國を安國と定め奉りて」とあります。地球上、何國を大祓の執行國とするか、これが重大事であるのであります。次に「位」とは大祓の齋主以下執行官の系統や位階や員數並に參列する諸員の系譜や位階や員數等をいふのである。大祓詞冒頭に「集侍の親王、諸王、諸臣、百官人等、諸」とあるのは「位」を申してゐるのである。何事にも、時機と場所とは必要ではあるが、それと共に權威が伴はねばなり

ません。大祓の大儀は「開食宣」とありますが如く陛下の御權威を以て奉行せねばならぬ御親祭であります。随つて大祓の執行官や参列官人の厳格なる資格審査はこの祭事には、最も必要事たるのであります。

比禮挂伴男。手櫛挂伴男。朝負伴男。劔佩伴男。

とあるのを見ても、何れも悉く敬虔的、武裝的の服装である事に、大なる留意を要する所であり、執行官の服装の一事から見ても、大祓の神事が如何に、

◎敬虔的な至嚴の神事であるか。

◎潔齊的な神聖清淨の神事であるか。

◎武裝的な凜乎勇壯なる神事であるか。

◎神秘的な且つ宏遠深宇の神事であるか。

大祓の神事は實に「位」を以てして始めて達せられることを知らねばならないのであります。かくの如く「時」と「處」と「位」の三位一體になる祭事の前には、参列の諸員は更なり、國中の諸人禽獸蟲魚山川草木も姿を正し、身を清めて、この日

の神事を遙に慎み拜すべきであります、俗人の樂の音が殷々として、天地に鳴り響くの心持が致します、参列の人々は一齊に「唯」と應へるのであります。

次に大祓の詞には、大祓の行事を單に、大中臣の専ら掌る所の神事の如く、書振りをしてあるから、一名「中臣祓」と稱するものがありますけれども、決して中臣氏のみのも専掌ではありません。随つて「中臣祓」といふ語は意味をなさぬのであります、中臣氏は祭事の總領を爲すのであつて、祭事には、夫々の部氏の任務が專屬されてゐるのであります。古事記本文によれば、

思金神に思はしめて——常世の長鳴鳥を集へて鳴かしめて——天の金山の鐵を取りて鍛人天津麻羅を求ぎて、伊斯許里度賣命に科せて鏡を作らしめ——玉祖命に科せて八尺勾璣之五百津の御須麻流之珠を作らしめて——天兒屋根和布月玉命を召て、天香山の眞男鹿の肩を内抜きに抜きて、天香山の天の波波迦を取りて（中略）天宇受賣命は亂舞して——等の作法があつたのである。

布刀玉命は忌部氏の祖

天兒屋根命は中臣氏の祖

ト部氏の祖は不詳でありまして、古來思金神、天兒屋根命等の諸説があります。要は占トを専務とする神祇官で布刀玉家、天兒屋根家より其の道に長けたる者を選抜したものと思はれます。神祇令に

凡六月十二月晦日大祓東西文部上三祓刀一讀祓詞一訖百官男女聚集祓所中臣宣

祓詞一ト部爲二解除

とあつて、大祓行事は中臣家の専屬ではないのである。神代の儘の大祓は、

○齊部の首が、天津金木を本打ち切り末打ち断ちて千座置座の行事をなし

○ト部の首が、天津菅曾を本刈断ち末刈り切りて、八針に取り辟くの行事をなし

○而して後中臣の臣が天津祝詞の太祝詞を宣る

といふ事になるのであります。假令、大祓詞に、大中臣が天津金木の神事も、天津菅曾の神事も獨占して行ふが如く、見えまするが、實際は夫々の神祇官に、夫々

の實務があつて、執行するのであります。古語拾遺に曰く、

天照大神、本與帝同殿、故供奉之儀君臣一体、始自天上、中臣齊部二氏相副、奉禱日脚、猿女之祖亦解神怒然、則三氏之職不可相離而、今伊勢宮司獨任中臣氏不預三氏所遺三也云々

とあるのを見ても明らかである。

次に大祓の祝詞は、いつ頃から出来たものであらうか。古來の學者は、中古の作とか天種子命の作であるとか申してゐる。一体祝詞といふものは、祈念祭、大殿祭、火鎮祭一等に限らず、太古から一定した作文があつたのではなくて、神事を行ふ時に臨みて、其祭を奉行する趣を各人各様に奏上したのであるが、年毎の同じ祭には奏上する祝詞も一定して來て、自然にいつとなく善言美辭をもつて聯ねられた祝詞文が出来たのであります。大祓の祝詞も、作者の名は明瞭でないが、天孫尊降臨當時から、その主意はあつたのであります。神武天皇の肇國樹徳の建國當時には、大和民族始祖の闡明として、既に一定の型に嵌つた祝詞文はあつたであら

うと思はれます。而して仲哀天皇の條に、

坐アラキノミヤニマシテ宮ニ更ニ取國之大奴ニ佐而シテ種々ニ求生シ剝シ、逆剝シ、阿離シ、溝埋シ、屎戸シ、上通下シ

通婚シ、馬婚シ、鶏婚シ、犬婚シ之罪類ニ、爲國之大祓而云々

とある此の時の「大祓」の文句と現在奏上されつゝある「大祓」の文句とは、全然同一ではない。素より長い歲月の間に改竄されたり、脱漏されたり、補訂された箇所もあつた事は否むことは出来ません。況んや大和民族始祖の闡明たる太古の大祓の祝詞その儘を遙察するに於ておやであります。甚だ至難ではありませんが、我等は現在に傳へられた大祓の祝詞に基いて行事しても誤りなきものとして毫も、差支へないのである。

尙一言述べて置きたいのは、世間には「大祓」の神事は「大祓」の詞を奏上したら出来るやうに誤解してゐるものが多い事である。いふ迄もなく「大祓」の祝詞は、「大祓」の神事を奉行する祝詞であつて、「大祓」の祝詞を奏上するだけが、「大祓」の祭事ではありません。寧ろ「大祓」の祝詞を奏上するだけでは「大祓」の祭事をせ

ずに置いて「しました」由を神に申上げることになつて、神を欺くことになるのである。

六月十二月の大祓には、形式なりとも祭事を執行致しますから、まだ申譯の言葉があらうが、朝夕之を神前に奏上して、その讀む數の多少を以て、神に通ずるものと誤信するなどは、誤つてゐるといふも、これほど大なる不敬はないのであります。神に仕ふるもの、神を信するもの、吾人が日々奏上する大祓の詞には如何なる意を傳へてゐるのであらうか。何を措ても之を知らねばならぬのであります。

### 第二章 大祓講義

#### 第一節 自六月晦大祓至諸聞食止宣

ウゴナハレル。親王、諸王、諸臣、百官、人等、諸聞食止宣

【解釋】集侍。大祓の儀式に参列せらるる儀、諸親王、諸王、諸臣、百官、人等の全體を指す、聞食止宣。中臣が天皇の勅旨を以て大祓を取り行はせらるる儀を参列者一同に、いひ聞かす事。

【大要】大祓は重大儀式であるから、是非とも親王、諸王、諸臣、百官、人等の参列がある。現今にては一般臣民の代表者（貴族院議員、衆議院議員）を参列させて至大至嚴に取行はせらるる大儀であります。殊に聞食止宣があるのは、参列の方々に對して、天皇陛下の勅旨を宣傳する義があつて、大祓の神事は我が日本國の天職であるので、中臣、忌部、卜部の諸臣は單に神事作法の執行者で其の神事は直接陛下の御執行遊ばさるる尊嚴の神事であるのです。

但親王、諸王、諸臣、百官、人等諸の御参列が單に御坐賑かしてない事は、後節科戸の風以下の本文に於て明瞭に伺はれます。

天皇朝廷爾仕奉留 比禮挂伴男 手襪挂伴男 鞞負伴男 劍挂伴男 伴男 乃 八十伴男 始氏 官 官爾 仕奉留 人等 乃 過

犯家牟 雜雜罪乎 今年六月晦之大祓爾 祓給 比清 給事乎

#### 諸聞食止宣

【解釋】天皇朝廷爾仕奉留。朝廷に奉仕する事。比禮挂伴男。白布を掛けて、敬虔的な潔齋的な容装した伴男。手襪挂伴男。手襪を掛けて武裝的な活動的な容装した伴男。鞞負伴男。矢を盛る器なる鞞を負んで武裝した伴男。劍佩伴男。劍を佩いて武裝した伴男。伴男。役人（中臣、忌部、卜部の如し）八十伴男。役人の多數、官官爾仕奉留人等乃。種々の役人、過犯家牟雜雜罪乎。國中の人民の犯した

種々な罪惡、今年六月晦つみこりは月隱の略にて月末、大祓おほはらひ國中の祓なれば大祓  
といふ。祓給比清給事乎諸聞食止宣おほはらひの御儀式は御親祭であるから、天皇を始め、多數の祭事執行官一同

【大要】大祓の御儀式は御親祭であるから、天皇を始め、多數の祭事執行官一同  
共に六月三十日（十二月三十一日）に、國中の罪惡を潔齋するのを、天神地祇八百  
萬の神に請ひ奉ることである。

### 第二節 高天原

#### 高天原留坐

【解釋】高天原爾たかまがはらの宇宙全體うちうぜんたい 神留坐かみりま 天神地祇八百萬神が宇宙全體に充滿する

【大要】高天原の訓み方については古來「タカマノハラ」、又は「タカマガハラ」等と  
讀んでゐるが、いづれも誤りである。正しくは「タカアマハラ」と讀むべきである。  
その事は古事記本文に「訓高下天云阿麻、下效此」で明かである。

元來、高天原の解説については左の七種が有力である。

一、天上説。北畠親房の元々集一條兼良の日本書紀纂疏上たけふしゆんなかみはらひいよきせう 一多田義俊中ちかたのよしとむら 臣稷おみひら 氣吹抄きぶきせう  
俗に神道家の唱ふる説であつて、「高天原」とか、「高天原」と訓んで天上に極座が  
あつて、そこに神々が御集りになつて御座らつしやるといふ場所をいふてゐるの  
であります。新様な解釋に従ふと、高天原は天上の一部分なる狭小な箇所を指し  
随つて集合なざる神々も人體に髣髴した體系を備へ、山川草木悉皆成佛といふが  
如き一切現象を靈的に見た所はチツともない。

二、虚空説。うらべかねかた 釋しやく 日本紀にほんき 五忌部正通いんべまさみち の神代口訣かみよけけつ 一、うらべかねかた 俱か の日本紀神代抄にほんきかみよせう 二、及び  
にほんしよきかみよせう 今解いまかい 一、山崎やまざき 齋い の風水草ふうすいそう 七、身會貴祓みまひきひら 日向草ひなたがさ、平田篤胤ひらたあつたね は  
北極きたきよく 極きよく 紫微宮しひきう を指せるもの  
この説では一切を虚空と見て仕舞ふので、支那に於ける老子、佛教に於ける無見  
の外道に墜ち、西哲シヨールペンハウエルの虛無思想に類似してゐる。概して老子  
の説を遵奉する學者の唱へる處であるが、これでは大祓に於ける「八百萬神等  
を神集へに集へるといひ、神議りに議る」といふも、虚空に何の要あらんやであ

ります。

三、胸中説。忌部正通の創めて唱導する所で、神代口訣、一に在レ人無二念一胸中也。としてある本居平田翁等の解する如く皇典をそのまゝ字解に安んじたに反して、古典を抽象的に生かさうとした國學者の唱ふる説であつて、高天原を己が胸中なりといふのであるが、斯様な説では一步己が胸中を離れては最早高天原でなく、高天原は極小部分を指す事になる。今日の認識論からいへば、自己の胸中を離れて現象はなく、自己といふ主観を通じてなければ、現象界は認められぬといつてゐるが、高天原を斯様に解した胸中説なら意義を持つてくるであらうが、これ等は高天原本来の意義を知つた上の解釋で、斯様に廣義に見た解釋かドウかは疑はしい。

四、天理説。林羅山の神道問答に高天原は天也、理也、大虚也、無形の所に自ら神あり理のある所は神明の止まる所也とあります。

こは神は眞理也といふ解釋から生じた事でありませんが、且な、理一のみ偏したものでなく、後にも明瞭となる事であるが、高天原の本義は事理不二の境でありま

すから、これも取るに足らぬ解釋であります。

五、梵天説。

印度の梵天と皇典の高天原を同一に見た所謂本地垂迹で、佛教を日本に廣令宣布した弘法大師等の説ふる説である。譬へば大日如來は本地であつて、天照大御神は垂迹であるといふ神佛融和の楔子たらしめた所から起きたのであるが、佛教の説く梵天は四大天の上部の天といふのであつて、宇宙に比したら、尙小なる部分であります。本来の高天原の意義は斯様な淺薄なものではありません。

六、帝都説。

高天原は神々の集り玉ふ神聖な場所であるとして、それが地上にては頭、上の集りて政治をこる帝都といふのであります。

これも高天原に神集り玉ふといふ天上の一部分にますといふ説にのみ満足せずして、それを單なる譬喩と見た進歩した解釋には違ひないが、高天原の本義には尙遠い。

七、國土の中に求むる説。

こは木村鷹太郎博士を初め、地質學、人類學、言語學等より研究して地上に求めんとする説である。

チグリス河沿岸説、朝鮮説、印度説、蒙古説、日蓮聖人等は安房説を主張す。以上七種の高天原説がありますが、要するに一つも採るべきものはなくて、皆な誤つた解説として退けねばなりません。古來の解説は斯様な淺薄極まる解釋のみでありませんが、しかし皇典古事記を眞に解して、高天原の本來の意義に解釋すれば國土説も、帝都説も之れを許容する事の出来るものであつて、胸中説も天理説も皆包容されるのであります。然らば高天原の本來の解釋は如何かといふに、本講義に關係ない事でありませんが、多少でも、皇典古事記の上巻冒章の解義をして置かねば、著者の主張する如き學説を徹底せしめることはできませんから、脱線の氣味はあるけれども、聊か述べることとする。古事記の本文には、

天地初發之時 於高天原 成神名 天之御中主神

とある原文の意を、古來、高天原といふ場所、成りませる神の名は天之御中主神の意に解釋し來つた事が、以上述べた七説を生んだのである。而し茲の意は、天之御中主神がタカアマハラ（高天原）に化成られたと解すべきことである。天之御中主神は宇宙の本體即ち實在にましますので、絶對神であらせらるゝ。故に天之御中主神が其の神相、神業等を表現せんごせば、必ず現象に出づる形式を執らねばならないのである、其の現象に出づる根本方式がタカアマハラ（高天原）であるのである。現象即實在なるが故に、タカアマハラ即ち天之御中主神であります。無始無終無邊周遍の天之御中主神が永遠より永遠に渉る創造進化の過程に出で立ち給ふた、其の根本の方式がタカアマハラであるといふのであります。夫れ故に、宇宙全体はタカアマハラ（高天原）なる根本様式で充實してゐるのであります。その事を大祓には高天原神留坐と申してゐる。然らばこのタカアマハラ（高天原）なる根本様式とは如何、これを論じようごせば精神、物質の二方面より述べなければならぬ。先づ精神的方面から論ずれば、高



天原は左の四大力の發顯と見ねばならぬ、

一、タカア 二、タアマ 三、カアマ、四、ハラ

この四語はタカアマハラなる語を分解して、一二三をタカアとし、一三四をタアマとし、二三四をカアマとし、五六をハラとしたのである。而して

一、タカア||とは光の發散するが如き有様であつて、佛語の光明、遍照なる語、又物理学に於ける發散力、遠心的發射力をいふのである。

二、タアマ||とは玉と同じ意味であつて、佛語の攝取不捨なる語、又物理学に於ける求心的凝集力をいふのである。

三、カアマ||とは日本語のカマ(鎌)と同じ意味であつて、劍の意が籠つてゐる。

劍の眞の精神たるや人を殺す爲でなく、人を治める爲めである。「武」といふ漢字は「戈を止む」と書いてある。佛語では圓融無礙といつてゐる。物理学に於ける圓融的自在方に當る。

四、ハラ||とは「波螺」の意で、物理学に於ける螺轉的廻轉力に當る。

以上、四大力は宇宙現象を發射する根本力である。譬へば水が蒸發したり、凝固し

たり、融解して、常に繰返へさるものは、この四大力が内在してゐるからである。

次に物質的方面に於ても左の四語から成つてゐる。

一、マアカ、二、アカタ、三、マアタ、四、ラハ

この四語は前述した精神的四語を反對に訓んだものである。而して

一、マアカ||とは佛語にいふ摩訶であつて、全、大、多、勝の意義を持つてゐる。即ち物體の完備した事をいひ現はしてゐる。

二、アカタ||とは片、方であつて、部分的な物の形狀をいひ現はしてゐる。

三、マアタ||とは股であつて、分離した物の形狀をいひ現はしてゐる。

四、ラハ||とは波狀を呈した物の形狀である。

一切の物質現象は此の四種の形によつて構成されてゐます。これが前に述べた四大力によつて活現してゐるのである。高天原とは以上説く精神と物質との融和してゐる現象世界である。そこで高天原、神留坐といふ事は、タカアマハラといふ根本神力によつて、宇宙を自己體はツマツてゐる。カミツマリといふ方式(形式、様式)

に大宇宙は成立してゐるといふ事です。否、カミがタカアマハラにツマリマス以外には天地もなく、宇宙もなく、萬有もなく、森羅萬象 悉くないのである。

第三節

自皇親神漏岐神漏美乃命 至知所食止事依志奉伎

皇親神漏岐神漏美乃命以氏八百万神等乎神集集賜比  
神議賜氏我皇孫之命波豊葦原乃水穗之國乎安國止  
平久知所食止事依志奉伎

【解釋】皇親古來スメラムツとかスメラガムツと訓むでゐるが皆誤りで、是非ともスメラミオヤと訓まねばならぬ。在來の解釋では單に天皇の御親神のみに解してゐる。勿論天皇の御親神には相違ないが、また我々臣民の御親神であることを忘れてはならぬ。それ故に今此處で皇親と訓ませた譯である。而して皇親と訓む時は、この一語から直に天皇權（主權）と親權とを同時に伺ふことが出来る。

神漏岐神漏美乃命以氏カムロギカムロミと鼻に掛けて讀む人がありますが、これは正しくはカミロギカミロミと讀まねばなりません。神漏岐神は靈系神で神漏美乃神は体系神を指す。譬へば靈体二系の神々を表示すると左の如くである。

靈系……高御產巢日神 天之常立神 角母陀琉神  
宇麻志阿斯訶比 意富斗能地神  
比古遲神 宇上比地遲神

體系……神產巢日神 豊雲野神 妹阿夜訶志古泥神  
國之常立神 妹意富斗能辨神  
妹須去比智遲神

命以氏の意義は「御言葉で」と解してよい。委しくは後節天津祝詞乃太祝詞事に述ぶ。八百萬神等乎神道にいふ、八百萬神とは數字上の八百萬でなく、一神であつても、二神でも三神でも、あるべき數の全計ならば、それは八百萬神であります。一神即萬神、萬神即一神の意であります。神集集賜比これカミツドヘニツドヘタマヒと鼻に掛けて讀むは悪し。以下「神」の字は悉く「カミ」と讀

むべきである。夫々の方式により八百萬神が御集合遊ばさる事。前述した宇宙全体に神留り坐すといふ説き方と、此場合は一見矛盾するやうであるが、この場合の集合は一堂に集會する意でなくて、御注意を集中せらる義である神議賜氏。今日會議法があるやうなもので、神々が御議りになるのであります我皇孫之命波。天照大御神の御孫瓊瓊岐尊の事である。豊葦原乃水穂國乎。古來の解説では「十分なる葦原の麗しい稻穂の國」といふ義となしたり、國名考には豊は美稱で葦原とはいとく上代には四方の海べたには悉く葦原にて其中に國處は在て上方より見下せば、葦原の廻れる中に見えける故に、高天原よりかくは名づけたるなりと見ゆ、水穂とは祝詞考にみづくしき穂をいふとあり。古事記傳に美豆は物の美しきをほむる言にて是は穂をほめたるなり。穂は稻をいふ葦のみにあらずとあり。

豊葦原の水穂國の本義を述べると、原は「ハラ」の語で、高天原の「ハラ」と同様旋廻する意義である。葦は全く當字であつて、「アシ」は脚である。旋廻の速度をい

つたものである。豊はゆたかなる義で種々の類別が豊富なる義である。故に豊葦原とは「トヨアシハラ」で、種々の旋轉の速度を以つて旋廻してゐる状態をいふのであつて、これは太陽の周圍を八つの遊星が種々の速度を以つて旋廻してゐる。太陽系の遊星の歩道をいふのであります。水穂の國は穂は表面に表はるゝの義で類の語もそれである。ほに出るといふ語は表面にあらはに出るの義であります。水穂は水が表面にあらはに出るといふ事で、水穂の國は水が表面にあらはに出てる地球の事をいつたものである。豊葦原の水穂國を只今の日本國と解し、瑞々しい稻穂が豊かに生づる國とした方が日本國の歴史にも、接近してゐるし、水穂國を極めて麗はしく説き得たやうで、尊い感がすると申す人もありますが、皇典の眞意義は決してさうではありません。随つて大祓を執行する舞台も、ソクナ狭小な地を申すのではありません。水穂國は大きい世界全体です。水穂國が地球全体であるといふ事が解せられないでは、皇典は全く解けません。乃至大祓の祭事も行はれないのであります。安國

止平久知所食止事依志奉伎 平安無事に統治して呉れど御委任になつた事

【大要】三節の大要は斯土に統治の大君を降し玉ふ意である。聊か委しく述べんに豊葦原の瑞穂國を全世界と解する上は、斯土の統治の大君たる大日本天皇は全世界民衆の景仰する對照に坐しませねばならぬのである。この意味に於て、過去世、天安河に於て八百萬神の御議決あつて、瓊々岐尊の降臨を見たのである。

深く上古を探つたら、そこに統治の大君と被統治者との至嚴なる律則を見出すのであるが、皇典の真相を討尋研覈するものなきが爲に、本節の如きも、至大至嚴なるこの神契神約を物語つてゐるのであるが、神職も教導職も盲目的に神前に奏上する今日の有様は慨嘆の至りである。本節中より特筆大書して、力説せねばならんのは、皇親の一語と、豊葦原の瑞穂國を統治する大君の有し玉ふ宇宙大法とである。

皇親には、主權と親權との二つを含んだ語である。而して我等の信奉する主權者が同時に親權者であつて、而も宇宙の初めより、萬世一系なりとする信仰は大日本國民の國體觀念である。之を皇典に求めて、天照大御神は天皇の御親神にまします

ことは又、臣下神たる八百萬神の御親神にまします。天照大御神は主權と親權とを同時に具備し玉ふ神でありますが故に、御直系たる天皇には主權親權の一體があることは何等疑ふなきことであります。我々祖先も子孫も天皇に忠節を盡し奉る所以は眞乎の主たり親たるが故である。皇親(スメラミオヤ)に坐しますからである

諸宗教を見るに、基督教のゴッド(神)は「天なる父」といつてゐるが、其の神統が明瞭でないから、吾人は主權親權者として、基督教の神を認めることが出来ない又阿彌陀如來は十萬億土の西方に安樂國を建設して、極樂往生を遂げしむるといふ大悲願を起てゝゐるといふので、日本人は信仰してゐるが、此等は事の善惡をも理非をも考へず、負はうといへば負はれるといふ虫の善い願で、眞の主であるか、親であるかを辨へず、従ふもので、忠孝の本義に悖ること、之より甚しいものはないのである。主權とか親權とかいふのは、眞の主に従はせ眞の親を知らさうとする所に價値があるので、皇親は實に諸宗教によつて紛亂されてゐる眞乎の主、親を明瞭にするに千鈞の價値ある大文字です。「皇親」の一語が世界に徹底した時に地上

には眞の平和が来るのであります。

次に述べんとするは、豊葦原の瑞穂國を統治する大君の有し玉ふ宇宙大法である大君は前に述べた皇親の御直系にまします。この御直系を降臨せしめ玉ふた神慮の程は宇宙大法の常体を立證し、尙且つ全世界の民衆をして、眞乎の主たり、親たるものを知らしめんが爲めである。若しも之をキリストの如く感應的の降誕としたら萬衆統治の君主であることを立證することが出来ぬのである。衆生の親、萬衆の師としてのみならば、毫も差支へないであらうけれども、苟くも全地球の君主なりといふ以上は、若し感應が二つも三つもあつた場合に非常に、大なる問題が起つて來るのである。これが即ち世界各国に易世改革といふ事が起つて、世が靜穩ならざる次第と同様に到る譯であつて、萬世一系天壤無窮の日本國體が萬國に超絶してゐる所以で、實に天孫降臨の本義は我國體の金甌無缺を立證する、大眼目の所であります。諸學者の一般に解する處、天孫降臨の義に至りては、天皇の御先祖に座す瓊々岐尊は南洋より漂流し玉ひしとか、朝鮮より渡來したのであるとか、稱々と太古に

於ける遊牧の民の如き有様に説き來つてゐるが、斯の如きは、最も我國體の本義を傷つけるものであるが、かくの如き解釋をする學者の言を許し置くことそれ自體、神道家は寢つてゐるのである、一日も早く覺醒して、皇室國家を安泰に置き奉らねばならぬのであります。これといふも、實に天孫降臨の本義が不明であつた罪に歸するより外ありません。

天孫降臨の本義を述べるには宇宙大法の何物なりやを明瞭にする必要があるのである。この事を明瞭にすることは即ち天孫の降臨を説く所以である。

宇宙大法は第二節に述べたタカアマハラ(高天原)ニカミツマリマスである。このタカアマハラニカミツマリマス根本方式は始祖神(天之御中主神)より永遠の未來劫まで終始不變の天則になつてゐるのであります。天之御中主神の次に出現し玉ふた伊邪那岐伊邪那美の二神も、タカアマハラ神則神律を顯示して、永遠にその範を後葉に垂れ玉ふたのであります。その爲めに、主とし、親たる二大神業があつたのです。見よ、

一、大天皇としての統治。

二、大御親としての萬神萬生萬有の出生並に愛護撫育。

次に出生し玉ふた天照大御神は、伊邪那岐伊邪那美の二神に代つてタカアマハラを統治し玉ふたのであります。御神體は太陽に懸らせ玉ふて、同じく主たり、親たる二大神業があるのであります。

一、大天皇としての統治

二、大御親としての御徳は太陽より靈光を發散せしめて萬生、萬有の出生並に愛

護撫育に當り玉へること。

次に天照大御神の御延長として皇孫瓊々岐尊の降臨があるのであります。この降臨たるや、宇宙大法の當体を立證せしめ玉ふ爲めに「限身」たる瓊々岐尊を選び玉ふたので、この大法が器物に寓されたのが何より大なる活きたる保證であるのであります。

瓊々岐神が人體にお近い神様であらせられた事は、日本書紀には「皇祖高皇產靈尊

が特に皇孫を鍾愛し玉ひしこと、並に降臨し玉ふ時に際して、眞床迫衾を以て皇孫を覆ふてお降しになつた」といふ事が録されてゐるのを見ても、明瞭かである。かく、物質に勝つたる神にならせ玉ふたが故に、この神に宇宙大法を委任せしめ玉ふには、又三種の神器なる器物を以てして、眞乎の主たり、親たる本義を茲に立證せねばならんのが當然である。然るに世の學者は、この天照大御神より皇孫尊にならせ玉ふた事を人類發生學より疑ふものあらんも、そは茲に述べんこと餘りに長ければ拙著萬世一系論を近く上梓すべければ就いて見られよ。

かく論究し來つて、吾人は茲に、三種の神器を外にして研究する何物をも持たぬのである。これあるが故に、神界の組織はもとより、萬世一系も天壤無窮も宇宙大法も嚴然として千引石の如く存してゐる事を知るのであります。

タカアマハラを分解してタカアマ カアマ カアマ ハラの四大力なる義は前に述べた如くである。扱てハラなる力でありすが、これはタカアマ、タアマ、カアマなる三力が示現する處には、ハラ力なる一種の旋廻なり順律があるのである。故に便

宣上ハハラは他の三大方に附けて次の如く呼ぶのが當然であります。

一、タカアハラ 二、タアマハラ 三、カアマハラ

この三大力は現象界に内在してゐる根本力でありまして、大は大の大なるものより微は微の微なるものまで、之に漏るゝものは一物もないのであります。天體の運行も、或る星座を座標軸として運行してゐるのである。太陽より光線を發散してゐるのは、タカアハラなる現象である。大地が之を吸收するのはタアマハラ現象あるからである。而も日月が常に運行して終止せないのはカアマハラ現象であります。この現象は、風雨雷電の自然現象はもとより、海流潮流、萬生、萬有の發生、皆然りである。人體に新陳代謝の理あるも亦この三大力によるのである、之を表示せば

一、新物質の攝取

(タアマハラ)

飲食物より營養物質を攝取する者……………消化器  
空氣中より酸素を攝取する者……………皮膚、呼吸器

二、老廢物質の排泄

(タカアハラ)

炭酸及び水分を排泄する者……………呼吸器、皮膚  
尿素、尿酸、其他の老廢物を排泄する者……………泌尿器、皮膚

三、養液の運搬……………循環器

(カアマハラ)

新陳代謝は人の生存中は絶へず行はれるものであつて、身體は常に同様に見えるけれども、之を構成する陳き物質は漸次謝し去り、新らしき物質の之に代つてゐるからである。恰も燭火が絶えず其物質の酸化し去るに關らず、新物質の補給によつて同じ形を保つがやうである。萬有はタカアハラニカミツマリマズ根本様式を離れては一物もないのであります。

この三大力の表示として茲に三種の神器が存するのである。即ち

一、タカアハラの表示として鏡、イヤ、アタ、カガミ

二、タアマハラの表示として玉、イヤ、サカア、ニノ、マカ、タアマ

三、カアマハラの表示として劔、クサ、ナギノ、ツルギ

この三大力は宇宙大天皇の有し玉ふ心理的性質でありまして、更に大天皇を人格的に見る上に論せねばならんのは、道德的性質である。三種の神器は又之を明確に表

示してゐるのであります。皇孫を豊葦原の瑞穂國にお降し遊ばす際に、親しく高天原統治の神寶としてお授け遊ばされたのであります。即ち

- 一、八咫鏡は天皇權の神聖なる授與となり (知) 眞。
  - 二、八咫瓊曲玉は親權の神聖なる表示となり(仁) 善。
  - 三、草薙劍は師權の神聖なる授與として (勇) 美。
- の神聖神約のタカアマハラの三大神寶であるのであります。

一、國土を平安に「統治」の神勅は皇位に對する當然の御繼承であつたのである。二、「萬世一系」は皇統の至嚴が天に出で、父子孫々の永遠の神律であり、「天壤無窮は萬有に對する皇道のイヤサカア(彌榮)神則であるのであります。

三、三種の神器の御授受はタカアマハラ(宇宙大法)の實義を神ながらに地上に傳へて、天國移寫のウマシクニを斯に築き萬民至樂の境を開く御意義であつたのであります。

故に皇孫は其の御天職としては如上の三大神則に基き玉ひてタカアマハラの本義を

地上に

天皇(スメラミコト)……………絶對御言 主

天法(スメラミコト)……………潔齋詔命 師

天治(スメラミコト)……………統治至尊 親

の實義を顯揚し玉ふに在るのであります。(此處は萬世一系論に委しく述べし)

「天皇」論は宗教上に於ける「本尊論」である。「天法」論は宗教上に於ける「教法論」

である。又は「題目論」である。「天治」論は宗教上に於ける「祭祀論」又は「戒壇論」

である。

佛教にては之を「佛」「法」「僧」なる三寶と申してゐる。惟神の道に於ては實に超越

した權威としての活きた大教法大教義が現實に三大神律として傳へられてゐるので

あります。

それ故に神武天皇の御東征も亦皇孫御降臨の本義に則り賜ふたのであります。そ

の御聖慮は古事記には



神倭伊波禮毘古命、與其伊呂兄五瀬命二柱坐高千穗宮而議云坐何地者平聞看天下之政。

とありますし、日本書紀には

昔我天神高皇產巢日尊大日靈尊、舉此葦原瑞穗國而、授我天祖彥火瓊々杵尊云々。余謂 彼地必當足下以恢弘天業光宅 天下蓋六合之中心乎云々

とあり。戦の終るや

自我東征於茲六年矣。頼以皇天之威凶徒彰戮云々。且當披拂山林、經營宮室而、恭臨寶位、以鎮三元々。上則答神靈授國之德下則弘皇孫養正之心。然後兼六合以開都掩八紘而爲宇

不亦可乎云々

とあります。大日本國の天職使命は茲に全く明確であります。

### 第四節

自如此依志奉志國中爾至天降依志奉支。

如此依志奉志國中爾荒振神等乎波神問爾問志賜神掃比爾掃賜比氏語問志磐根樹立草乃垣葉乎母語止氏天之磐座放天

之八重雲乎伊頭乃千別爾千別天降依志奉支

【解釋】如此依志奉志國中爾。地球全體の國中の事。荒振神等乎波。前述べたカアマハラの神律に則らない神をいふ。神問志爾問志賜。其の國中に荒振る邪神があるを「神問法」によつて尋問すること。神掃比爾掃賜比氏。邪神を「神拂法」によつて掃ひ除くこと。語問志。言語を以て反問したり、抗議したり、頑張つてゐたといふ事。磐根樹立。磐根は根底のある頑丈なもので容易に動かないものである。これは頑張る丈の論據が多少ある身分のもので、例せば大國主神の如きで其の神統は素盞鳴男神に出で、天下統治の資格がある点からはあるとも謂はれる其上善政を施し、比較的衆望もあつた神である。これ恰も磐根の如き大なる豪族であるのである。樹立はそれよりは少々弱い所がある。けれども相當に論據もあ

り、根強い所もある家柄であつて、群雄中の矢張一種の豪族である。草之垣葉平毛語止氏草之垣葉に至つては、實に木葉武士で吹けば飛ぶやうな、何の根柢もなく、たゞ譯もなく威張つてゐる奴で、斯様なものでさへ、一人前に彼是れと理窟を並べて偉い顔をしてゐるのが亂世の常である。日本書紀には

然 彼地 多有螢火光神及 蠅聲 邪神 復有草木威能言語云々

とあります。螢火なすあやしき神は日光の前には、何等の價値もない程の尻に火をともして威張つてゐる人々である。今の世には宗教家にも學者にもこんなのが非常に多いのであります。蠅聲なすはギャ／＼騒ぐ連中である。草木といふのが例のどるにも足らぬ者等までが、一分の理窟を並べて彼是いつてゐるものであります。大豪族始め以下の豪族も其の下に位するギャ／＼の者等も皆悉くグウの音も出せぬまでに平伏させたといふ意である。天之磐座放磐座は常恒に變せぬ尊い御座位の義。天のは、天上にある御座所。放は離別させての意。天之八重雲平皇孫の御降臨に際して御伴する所の多數の神々の義であつて、萬軍の將卒

を謂ふのである。八重雲は雲の重なり重なる如き雲霞の大軍の義であります。大軍といふのは語弊があるけれども、群臣の御行列である。伊豆乃千別爾千別氏伊豆乃千別爾千別氏の行進の列序を稜威を以て嚴密に秩序正しく、位座序列を正して、今日の軍隊の行軍の如く（行幸の御行列であります）至つて嚴正なる行軍の序列を正しての御降臨であつたのであります。天降依志奉支天降はカケリミ（後に述ぶ）の神界からして地上に降だし玉ふたごの義。

【大要】本節は天孫降臨に先ちて、宇宙大法なるタカアマハラ（高天原）の神律に服せざる荒振神等の靜穩に歸するを俟つて、降臨の實あるを示し玉ふたので、間接に天孫降臨の本義はタカアマハラなる意を述べてゐる。天之磐座放の意義は、最もよく天孫降臨の實を示してゐる。何故かといふに、磐座は解釋の處で述べたやうに「常恒に變せぬ尊い御座位」の義である。天の御座位を離別する以上は、何處かに御移轉を見ねばならぬ。そこは地上である。「地の磐座」には天孫尊は御降臨ある譯になります。即ちこの事を判り易く言ひ換へれば、天上と地上とをマツリして

天上の儀を地上に移し奉つたのである。マツル(祭)事は即ち天孫降臨の實義を傳へてゐるのである。

而して天孫降臨の御一事は、かゝる抽象的現象のみにあらず、空前絶後の唯一眞事であつたのです。その事を申し述べんに、先づ「神」の本質から述べて來ねばなりません。男爵穂積陳重博士は、その帝國學士院第一部論文集の邦文第二號「諱に關する疑」九〇に於て古人の研究十二種を列挙して居られる。これは最もよく、「かみ」てふ語に關する先人の説を網羅して居ると思ふから、茲には之を示さう。

- (一)「かみ」は「かむがむ」(要覽)の義なり 忌部正通、(神代口訣)
- (二)「かみ」は「かゞみ」(鏡)の義なり 山崎闇齋、度會延佳、僧契沖、國珠庵雜記)
- (三)「かみ」は「かゞみ」(赫見)の義なり 谷川士清(日本書紀通證)(和訓栞)
- (四)「かみ」は「かむ」(嚙、釀)と同意義なり 大國隆正、(古傳通解)
- (五)「かみ」は「あかみ」(明見)の義なり 谷川士清、(和訓栞)
- (六)「かみ」は「かみ」(上)の義なり 新井白石(「東雅」古史通)貝原益軒、加茂眞淵、伊勢貞丈(貞丈雜記)

(七)「かみ」は「くしび」なり(奇靈)

黒川眞頼(日本上古史評論)

(八)「かみ」は「かしこみ」(畏)の略なり

荒木田久老(楓の落葉)

(九)「かみ」は「かみ」(彼靈)にて牙の義なり

平田篤胤(古史傳)

(一〇)「かみ」は「かくりみ」(隱身)の略なり

齋藤彦磨(傍廂)

(一一)「かみ」は「かくりみ」(隱靈)の義なり

八田知紀

(一二)「かみ」は「かくれ」(隱寄)「みつる」(滿)の義なり 堀秀成(川徴二言考)

以上「かみに」關して種々な説があるが、皇典に於ける「かみ」は神統論の上から左の五種類に分類して説明せねば條理一貫した解説は出來ないのである。

又は

カ・カ・カ・カ・カ  
 ギリ ゲリ ガリ ゴリ グリ  
 ミ・ミ・ミ・ミ・ミ

カ・カ・カ・カ・カ  
 キリ ケリ カリ コリ クリ  
 ミ・ミ・ミ・ミ・ミ

右の如く「かみ」(神)は真中の二字が略されたので、天地に先ちて生でませる天之御中主神は「カクリミ」に坐し、次に伊邪那岐伊邪那美二神は「カゴリミ」神にあらせられ、次に天照大御神は太陽の如く御神容は「カガリミ」(輝身)神に坐し、次に御子正哉吾勝勝速日天忍穗耳命は「天駟り國駟り」玉ふ御神容を具へさせ玉ふ「カケリミ」の御身にあらせられ、尙皇孫尊は、降臨し玉ふ時は既に御自身に降臨出來得ずして、眞床追衾を以て覆はれて地上の天皇とならせ玉ふ「カガリミ」(限身)にならせ玉ふたので、これ即ち天皇の萬世一系なる所以を立證する神觀であります。天孫降臨は即ち「カケリミ」の神より「カガリミ」の神にならせ玉ふた物語りであります。故に、體系を異にして拜察せねば、到底解されない皇典の秘事であります。此處、尙詳細に述べれば千古の大疑問を科學的に證明することが出來得ますが、拙著萬世一系論に譲る。

### 第五節

自如此久依左志奉至  
至安國止平介久所知食武

如此久依 志奉志 四方之國中登大倭日高見之國乎安國止定  
奉氏下津磐根爾 宮柱太敷立高天原爾 千木高知氏 皇御孫  
之命乃 瑞御之舍仕奉氏 天之御蔭日之御蔭止隱氏 安國  
止平氣久 所知食武

【解釋】如此久依志奉志。斯様に御依屬になつたといふ事。四方之國中登。地球上の中心國。大倭日高見之國乎。地球の中央國が大倭日高見之國であります。大倭といふのは四方の國々をいかにも背おつたやうな有様に小さい中心國が大きい周圍の國々を丁度影と形との關係の如き有様に相關的の有様を保つてゐるといふ事で、日高見の日は輝き渡るの義。高はタカアで發射的威力で、見は實現の義で、他から仰ぎ見て尊仰する國の義である。これは我が極東の日本帝國の現位置其實は地球中心の日本國である。試みに地圖を見よ。本州と亞細亞歐羅巴大陸と

の相似。四國と濠洲との相似。九州と亞非利加。北海道と北亞米利加。台灣と南亞米利加。安國止奉氏。安住の國と定めて世界統治の本つ國と爲し玉ふの義。安國については第六節に述べ下津磐根。大磐石の動きなき礎にの意。宮柱太敷立。宮殿の御柱をしつかりと立派やかに敷き立ての意。高天原。千木高知氏。宮殿の棟木が高い天にまで聳え達するほども壯大にの意。皇御孫之命乃瑞御舍仕奉氏。皇御孫の命のみづくしく美はしい宮殿を作り營み奉りての意。これは皇位の尊立をいふので、前の宮柱と千木の義で。極めて端麗なる皇室の御確立を見たといふ義である。皇御孫の命の御舍は宇宙間に瑞々しい莊嚴なるものはありません。無比端麗の御國體はこれ直に皇孫の御舍そのものであらせらるるのである。天之御蔭日之御蔭止隱氏。大なる宮殿の中にましましての意。これには尙別な解義があるが大要の所に述ぶるであらう。安國止平氣久所知食。古來の解釋は且に麗はしい安國と平らげく治しめさむの意としてゐる。而し安國とは全体ごんな意義があるかについては明瞭に述べてない。第六節に特に安國だけを述べ

て置かう。

【大要】天孫尊降臨の意義は前から屢々述べて来た如く、タカアマハラの実現である。地上に天國移寫のウマシクニを築き萬民至樂の境を開くに在るのである。そこで本節は地上ユートピア(理想境)建設の第一歩として宮殿造營の御義を述べてゐるのであります。宮殿の天上に聳え地下金輪際に達する程の莊嚴なる宮造りは、殊に世界の中心國なる大倭日高見の國を選び定めての建設は、この目的を達するに最も理想的なものであつたのです。宮殿の大造營云々は、表面上に現はれた意義であつて好しや其の宮殿は人工的には壯大莊嚴なるものでないにしても、皇位の御礎は萬世不易の大磐石の上に、皇統一系の樹立が嚴乎として尊嚴無比搖ぎなく据えられて、而してその皇運の隆えます事は、高天原の無窮永遠なるが如く天壤と與に張りなき御有様に、世界に聳え輝き、萬民の望見して崇仰する所と爲つたの意である。

尙ほ更にこれは宗教的信仰の範疇をお示しになつたもので、我等は其の信念を腹

の底にウンと大磐石の如く敷き立て、氣分や意氣の潑漑たることは朝日の天に冲するが如く、勇猛精進たるべきを要すとの義である。信仰の大宮柱が確立すると同時に信念の旺盛なる發動が天に冲するが如くなるのである。信念の確立なくば意氣冲天の勇は具はらないのである。

萬世不易の大々的皇位の尊立に對應して、無比尊嚴の稜威が天地に漲り渡るのである。神武神武の天皇の現人神にます神振舞には、必ず其の根抵には磐石の信仰が宿り、大宮柱の確立があるのであります。教育勅語に在る樹國深厚の礎は、高天原の神律に基いて神誓神約の常磐堅磐の樹立があるからの事であります。特に神武神武の冲天の威光は千木の高天原に高知る如くタカアマハラをひしと確認して一体同化し、其内に聳ゆるからの發露である事を深く味ふべきであります。神武天皇を初め奉り歴代天皇に於かせられては、このタカアマハラ(高天原)の當体によしにして、敬神は天皇の御神業たるのである。祭は眞釣りにして、恰も天秤の兩端に法馬と試料とを眞に釣るが如きで、法馬は天上の儀。量るべきは地上のおきてである

この二つが互に平均したのがマツリ(祭)であつて、この外にはマツリはないのである。天照大御神が地上に皇孫尊をして降臨せしめ玉ひし神慮の程は、實にマツリより外ないのである。天皇は敬神によつて、政事を行はせ玉ふ。祭政一致の國體は實にかくの如きである。大祓の序頭に、皇親神漏岐神漏美命以氏とある御言葉そのまゝの奉仕である。この事を「大祓」には「天之御蔭日之御蔭止隱氏」とある。普通一般には、大なる宮殿の中にましましての意に解釋してゐますけれども、それは單なる字解のみであつて、更に内容があるのである。天之御蔭とは、天の神諸の命前にいつた皇親神漏岐神漏美命の御蔭に隠れまして、日の御蔭とは、日の大御神の御蔭に隠れましての義で、皇族は自己の慾するまゝにはなし玉はず、一意神漏岐神漏美命の御蔭に隠れて、高天原の天律神則をカミナガラにいやまひ從ひ玉ひて天津神の御思召のまにタカアマハラの中に即入して、隱身の神事を身に體しておはすのである。特に天照大御神の御神勅のまに日之御蔭に隠れて、毫も私意なく萬事を天に仰ぎ祖神に仰ぎ玉ふといふ義である。

### 第六節 安 國

【解釋】安國 古來の解釋は且に麗はしい安き國といつてゐる。

【大要】麗はしい安き國といへば何んでもないやうであるが、安國には種々の要件が具備されてゐねばならぬのである。單に事なきのみが安國ではない。單に豊穡の國のみが安國ではない。若しも事無く豊穡の土地ならば南洋邊の熱帶島が安國かも知れぬ。先づ安國の一般的の要件を掲げて見ませう。

#### 第一、永遠の國なる事。

盛衰榮枯は免れ難い世上の運命であるが、滅亡の國は安國でない。天壤無窮の國が安國でなければならぬ。世界の表面に國は數限りなく建設されたが、一つも永遠の國はなかつたのである。起り、榮へ、衰へ亡びて其國名さへ知られなくなつたものは何程あるか知れません。歴史上に名のみ残つてゐる國だけでも實に澤山である。獨り日本國のみが、この興亡常なき中に聳然として唯一の永遠なる國で

あるのである。しかし天壤無窮といふ語はその解釋が種々あるけれども、過去、現在、未來を通じて永遠不變であるのが本義であつて、生きてゐる間はこの國土であるが、死後は極樂とか天國とかへ往くといふのでは、國に境があつて、純然たる永遠の國にならぬ。日本國は生前は天皇の御統治界であるが、死後は天照大御神の御統治界となつて、統治の主を異にするけれども、要するに、これタカアマハラ界に外ならず、その御統治も萬世一系の皇親にましまして、生前死後に、我等には何等の相違を見ないのである。

而してこのタカアマハラ大帝國は、永遠より永遠を通じての、天之御中主神なる（實在）絶對の現象界であるから、常世である。常世とは變轉限りなき現象も、その本來の相は三世を通じて常恒であるといふ意義である。故に天岩戸前の神事に於て、常世の長鳴鳥を集へて鳴かしたといふ事は、タカアマハラ界の永遠なる本義を顯示した事となるのであつて、常世の意義が明瞭になれば、隨つて天壤無窮の本義が明確となり、天壤無窮の本義が明確になれば、隨つて國土の永遠を立

證し、信念の絶対安立を得ますからして三世を通じての忠孝の義が一貫して、眞平の安國が嚴乎として立證されて、日本國の永遠土なる事が慥に究められた事になるのである。

第二、至樂の國たる事。

永遠なる國であると共に至樂の國でなくては安國ではない。不安や苦悶や種々の忌むべき不快の蟠る國は、安國でない事は當然である。しかし現今の世界中の國を眺めて見ても、理想の至樂土は先づ絶対にないやうに見えます。然るに我が日本國が至樂の國であるといふ事を申すのは、其一は現在の日本國の狀態が至樂の國に適するといふ点である。尤も今日では稍々變態の狀態で、謂はゞ中毒でもした如き狀態にはなつてゐるが、これは改良すればなし能ふから悲觀するに當らぬ。今一つは至樂の本義が、實は物質的の至樂の意義のみに解せられて、眞の至樂の意味が徹底してゐない。而し物質以外の至樂の本義が、日本國に限つては求め得られるといふ点とである。

日本國を稱して或は足國といひ、乃至浦安國。ウラは心でウラヤスは心安である。|| といつたりするのは、根本的の意義の上から謂ふので、もとタカアマハラ界は獨神(天之御中主神)なる絶対即ち寂滅相の實在が現象として發現してゐるのに外ならぬので達觀すれば、現象界の諸法の相は純一實在の表現であるから、絶対靜觀に住して無量動觀を眺めて行くのである。換言すれば如寂解脱して、考へて見た時は、現象即實在で色即是空、空即是色といふ事になるのである。色即是空は佛敎の言葉であるが、眞乎の色即是空は高天原に於て創めて之を見るのである。一神即萬神の立證は、高天原に於て眞乎の大意義を認め得るのです。他は皆、言葉あつて實の添はないものである。この高天原と天之御中主神との御關係が日本國の御皇室と國民との上に如實に表現されてゐる次第であつて、色心の相を超越して、しかも現象界の永遠より永遠に渉る諸法を無限の興味を以つて味つて行く所に眞の至樂の妙諦が宿つてゐるのである。物質上の至樂豊滿は勿論至樂の本義を盡さない。精神上の至樂と雖も絶対根本の意義に達せねば至樂ではな



い。至樂即ウラヤスは寂滅の上より眺めた無量趣といふ深遠なる意義に於て創めて見るのみであつて、これは高天原のみ、有する獨占の境致である。現在生存してゐる國土を透して、この大境致に合致する事の出来るのは唯一の大日本帝國あるのみである。それは國土の本質が全く高天原に合致してゐるからである。故に至樂の國土を斯土に實現する事は、日本國を滿地に實現する以外に不可能なる理由である。隱身大寂滅の上に居て、文化發展の無限を希及して行くのが至樂國の本質である。

第三、萬世一系の國なる事。

安國は、萬世一系の國たるべきを要するのである、日本國以外に安國は求められな  
いと前段にも述べたのでも、この意義は明瞭であるが、萬世一系といふ事は、大  
我と小我との一致並に大我小我の一系の安立を立證する事によつて創めて、徹底  
する事で、一神即萬神といふ高天原の本義は大我と小我との一致を立證してゐる  
ものである。

萬神の種々性、種々相等は無量無數に差別されてゐるが、要するにこれ一神の種  
々性、種々相に外ならぬのである。故に萬神の系統は一貫して一神の統理に屬す  
否一神そのもの、神經の分布に外ならぬのである。萬神は皆なその血脉の上に差  
別的のものであるが、何れも皆な、萬世を通じての差別的一系で、その差別的萬  
世一系の諸統は、全總されて大我||皇親と申すのである||の萬世一系に外ならぬ  
事となるのである。只に人間ばかりでなく、草木も禽獸虫魚も、その本來の系統  
は萬世に通じて、進化の理法に常に、支配されてはゐるけれども、一系であるに  
相違ありません。けれども、それは理想の上でのみ申す事で、眞乎現實の生活の  
上から謂へば、萬世一系の意義が日本以外では徹底致しません。御皇室と國民と  
の關係が、高天原に於けると全く同様な有様になつて居ない國柄に於ては、安國  
の意義が天地人を通じて貫徹は致しません。多くの宗教に於ては天と人との間に  
於ては血脉の意義を説き、往生安樂國の意義を示しますけれども、肝心な中間の  
媒介者たる國の立證を爲し得ないから、血脉繼承の大義が失はれる。血脉繼承の

大義は萬世一系を立證し權威あらしむる重大なる事柄である。亡國とは高天原の本義を滅却す「皇位繼承」を語らぬ宗教は、亡國の宗教である。亡國とは高天原の本義を滅却するものであつて、亡は即ち盲であり、また安であるのである。

高天原大皇國を對照として、之に合致する所に安立の根本が存在してゐる。我といふものを根本的に理解し自覺する所に、萬世一系の安立があるのである。我の安立が高天原大我の上に立證され即現したる時にこれ即ち眞乎の安國であり、安國の民であり得るのである。

第四、清淨の國たる事。

安國は又清淨の國たる事を要する。清淨の國といふのは、國土の外相、即ち山川草木等の美しくいふ意義の外、人々の精神の清淨なるを指すのは勿論であります。しかしこの清淨といふ事も、茲に至樂の場合に述べた通り、現象の有相を滅して、絶對の實在に即入した場合のみ眞乎の清淨界はあるのであるから、根本の大本義に遡つての根本清淨を知悉せねばならぬのである。日本國を昔しか

ら清淨土と申してゐるのは、國土の相が清淨であるといふ意義の外に、この根本清淨の意義を示してゐる事を、充分に了解せねばなりません。伊勢大廟を始め神社の祠の白木造りで、全く裝飾を度外した清淨なる造り方に見ても、いかに我が根本の教義が純乎たる清淨であり、國の本體が眞乎たる清淨なる事を直觀する事が出来るのであります。清淨の最も至上なる界が高天原であります。清淨なるが故に至樂であります。至樂なるが故にまた清淨であります。清淨は我の自覺の極致である。萬世一系なるが故に清淨であります。永遠なるが故に清淨であります。不純、不潔、不清淨、汚穢といふ状態は、眞乎根本の高天原に即到せぬからの状態である。身穢祓ひの本義は爰に立脚するのであります。大祓の天津罪も國津罪もこの高天原の大本義が没却されて、不明なる場合に起る現象であつて、

○天にこの現象が起れば天體の變化となり、

○國にこの現象が起れば國は乱れて萬民災禍に惱み、

○人にこの現象が起れば即ち疾病艱苦災厄が現はれ

るのである。この天地人三才を一貫して、同時に清淨界を立證し實現せしめて、至樂安立の境を確立するのが大祓の本義となるのであります。

日本國は、高天原の本義が世界の各土にも萬民の上にも、暗黒であるの時に際して、高天原の清淨靈水を以て萬國萬民を潔齋し、暗黒の世界に光明を遍照せしめて、寂光の聖境を實現するの先天の使命を荷つてゐるのである。日本國にのみ、この可能性が存在し、その天職が存在してゐる次第である。日本國にのみ、以上が安國に對する四大要素である。

一切衆生を網羅して威な悉く、同時に救済の實を示し、安國に入らしめ、至樂を享けしむる事の出来るものは、我が大祓を外にしては決して他にこれある事なきを知らねばならぬ。

人は皆な永遠なる安國に入れば、永遠の生命に入ります。これ日本國を生國と申し、人を生神といふのであります。

至樂の國は無限の平和、無邊の調和界であります。これ大日本國を大和（ヤマト）はヤハシヤハスより出で漢字の大和の意義もよく適してゐる）と申す所以である。萬世一系の國は、我と神との一致を立證する。神の萬能が我に宿る所以を示す。これ上御一人を現人神と申し上げ、下萬民を大御實と申す所以であります。清淨の國は光明の國であります、それ故に日本國をアキツシマ（明らかなる意）の稱ある所以であります。日本の國の名は最もふさはしきものである。

### 第七節 天津罪

國中爾成出武天之益人等我過犯家牟雜雜罪事波天津罪  
止入。畔放。溝埋。樋放。頻蒔。串刺。生剝。逆剝。尿戶。許許太  
久乃罪乎。天津罪止法別氣氏。

【解釋】國中爾成出武「クヌチ」古來讀んでゐましたが「クニウチ」と訓む方正し

前述した全地球に人々が生れくる事。天之益人等我々次第々々に後々に生れくる人が増加してゆく事。過犯家牟々タカアマハラの本義、天孫御降臨の大義が忘れられ、誤られ、尙ほ不明になつて、自然に後に後に生れ出て来る人々の爲めに根本神律が没却するから、罪惡の發生した事。雑々罪事波々種々の罪。天津罪。精神上の罪。畔放以下七種は委しく後に述べ、許許太久乃罪乎天津罪止法別氣氏。幾何の罪を精神上の罪惡である、宣り別けての意。

【大要】安國は神々の念慮とし玉ふ處であつて、根本神律を示し玉ふてゐるのであります。後に段々生れくる人々が、その本義を没却した爲めに、種々な罪惡が生じたのであります。元來罪とはツミで積みである。圓融大和するカアマハラの流通が阻害されて、むすばれが出来て沈滞の部分が出づるからの事である、國の上にも人の身体上にも、この沈滞の状態流通の旺盛が缺けた時に種々なる紛亂や不幸や災禍が襲ふのであります。千木高知るの本義が失はれるのが即ち雑々の罪や穢の起る基であります。扱て畔放以下七種の罪を述べませう。

畔放 これは古來の解釋では單に水田のあぜを取放ちて稻等に害を與ふ事であると解してゐるが、この畔放には種々なる意義があるのである。天地人の三面より之を説明せねば不徹底になるのである、以下三方面より解説することにする。

第一義 天上の畔放 これは古事記には素戔嗚命が天照大御神のみ營田の畔を離つとあるので天体の運行するのが、天照大御神の御營田であつて、一切の天体の運行は、恰も水田に於ける水の用不用に應じて適當に畔の開閉によつて調節される如き有様であるので、その調節の機關を破壊して天体の運行上に支障を來たし天變を起す原を作るのが畔放罪となるのである。

第二義 地上の畔放 これは事業の經營や國家の經綸や思想上の發展に關しての畔放であつて、事業の經營といふ事が、これ亦恰も水田の水の運用と同一の状態に在るもので、夫々の事業の成功と不成功とは最も其の流通の調節の工夫に基くものであるのです。

然るにその事業調節の機關を妨害して、事業に妨害を與へる事は非常な罪惡であ

る。國家の經綸に至つては更に大なるものであつて、政治上軍事に於ける畔放  
が國家の生命を危うするは當然の事である。畔といふものは、稻田の成熱に對し  
ては意外に必要なものである事は農家の痛切に感じてゐる所である、思想上にも  
畔放があります。他人の眞信仰を破壊するが如き、忠貞の人を誘惑して其の道念  
を荒らすが如きも皆畔放の部類に入ります。

現代の社會に不倫事件の多いのは、畔放罪惡者が充滿してゐる證據である。國家  
の上にも事業の上にも思想の上にも調節の大機關が缺けて圓滿融和を見る事の出  
來ないのは其因は實に畔放に在るのを深く覺るべきである。

**第三義** 人体の上にも於ける畔放。これは個人として生理的並に心理的の畔放である  
が特に心理上に於けるを本位とします。疾病は氣をやむから起るのである。心に  
調節の畔放が完全に働いて居れば、心は常に堅固で完全で、動搖は致しません。然  
るに我慾や私利の爲めに氣をいらたち或は氣をくさらし平和調節の機關を守りま  
せんから、種々の災禍疾病がくるのである。畔放は斯様に人の一身上にも國家社

會の上にも大天地の天体の上にも存在してゐるのである。而してその状態が大小  
の差こそあれ、皆な同一になつてゐるのが妙である。

**溝埋** これは古來の解釋では、單に田畑の便に供する溝を埋めて、害を蒙らす事  
あると解してゐますが、この溝埋にも三種の溝埋があるのです。

**第一義** 天上の溝埋。これは古事記に須佐之男命が天照入御神の御營田に對して溝  
を埋め給ふとあるものであります。天體の上にも於ける溝埋である。天體の運行上  
にも溝に溝と稱すべき部分がある。溝を埋めて流通を遮断する事が、天体に變動  
を來すのは當然であります。

**第二義** 地上の溝埋。これは國家の經綸の上にも、事業の經營の上にも、思想上に  
もある事柄で、流通すべき機關を閉塞すれば、當然害惡の起るのはいふまでもな  
い所で交通機關（郵便、電信、電話、汽車、汽船）の閉塞されるだけでも、いか  
に害惡を蒙り、國家社會が死滅に瀕する事とせう。  
國家經綸のどんな細い溝でも埋没されたら、其の不便は大したもの、事業の經營

といふ事は別言を以てせば、幾多の溝に依つて構成されてゐるようなものである。事業の活機はこの溝の水の流通に基くものである。商業上に於ける信用、取引等は最も活潑なる溝の流通に因つて行はる。無形の溝は縦横無盡に國と國、社會の全面人と人との間に引けてゐる。無形の溝は有形の溝（交通機關を始め）に幾層倍してゐるかも知れませぬ。而しその無形の溝が溝埋罪悪者の爲めに何程、害悪を蒙りつゝあるかは想像の外に在ります。世の混亂の基は斯様な無形の所に根ざして紛擾に紛擾を重ね、腐敗に腐敗を重ねて行く次第である。事業の沈滞、人心の荒怠は全く溝埋から起る現象であるのです。

**第三義** 人体上の溝埋。これは人の一身上に於ける溝埋であつて、人には理性、感情、意志がある。この三つのものが圓滿に流通してゐる時に人生に幸福と健全と快樂があります。然るに私利私慾の爲めに心の平静を失つて此處に溝埋が成立するのである。自分自身には知らないでゐる間に溝埋は立派に行はれてゐるのである。譬へば食ふものも食はず、金銭を貯蓄する一念に捕はれて、營養不良に墜ち

たり、過ぎ去つた失敗を苦にしてそれが爲めに仕事を放棄して悲しんだり、他人に恵むのを惜しがつて、折角の天産を腐敗したり、皆溝埋の罪である。心は大磐石の如く押し鎮め氣分は朝日の如く勇ましくあるべき、タカアマハラの神則が閉塞されて、暗黒の陰影が人生の上に覆つて來るのである。その時人に種々の不幸災厄が發現するのである。

**樋放** これも古來の解釋は單に田畑に對する樋放の解であつて、農事の一部にのみ屬してゐますが、これにも、例の三種の樋放があるのである。

**第一義** 天上の樋放。これは天照大御神御統治の天体の上に於ける樋放であつて樋の解釋には

- 一、溝より更に細分して各要所へ水を引き入れる條管の義。
- 二、池又は堤等に常は厚き板にて塞ぎ止め置きて、一朝あるときに開き用ふるものといふ義。
- 三、高き所の水を竹木等の方圓の長き管にて遠き塙所へ運ぶの義としてゐるが

此等の意義が天体にも慥かに存在してゐるのである。以上の諸義が天体の運行にも屢々行はれるのであります。

**第二義** 地上の槌放。これは國家の經綸事業の經營思想上の事柄にある槌放であつて、若し國家の上で謂つて見れば第一の槌放の事件も種々あるが、中央政府より地方長官への傳達、地方長官よりまた夫々郡市町村へ及ぶ事柄等の上に、槌がある譯である。第二の意義では外交上の秘密をすつば抜くが如き國防上の破壊等が種々ある譯である。第三の意義では、御詔勅の廣布普及を始め信仰上道徳上等にも槌のある事は明瞭である。槌は生命の糧を得る導管であるといふ上から見て、眞に大切なるものである。槌は閉塞最もその宜しきに應ずべきであるが、その槌を破壊するに至つては、罪惡は偉大なるものである。事業の經營上から謂つても、この点は同一である。信用を破壊して産業上の支障を蒙らしめる等は、現代には到る處充溢してゐる有様ではないか。實に歎すべき限りである。人は生命の糧に飢えて餓鬼乞食の如き卑しい魂性になり下つてゐる現狀である。無形の槌管が

いかに紛亂して格闘しつゝ破壊をなし合つてゐるかは、少しく靜かに考へれば戰慄する程の有様たるを知るに難くはない。

**第三義** 人身上の槌放。これは一個人の上の於ける心理的生理的の槌放であつて、特に心理上の槌放が本位である。自分自身の心の上のいかに條理を粉碎して、自分自身を不幸にしてゐるかを靜慮した時にタカアマハラの大罪人たる事が直に自覺されてくるであらう。譬へば氣隨氣儘とか、僻であるとかいつて、精神修養なごを輕視したり、信仰を怠つて、神に非禮を願つたり、左側通行を嚴守せずして大怪我をしたりするのはよくあることである。

**頻時** 古來の解釋は單に一度蒔いた種子の上へ重ね蒔く事であるとしてゐるがこれにもまた三種の頻時があるのである。

**第一義** 天上の頻時。これは天体の上の於ける頻時であつて、天照大御神の御統治界にもこの事があるのである。

**第二義** 地上の頻時。これは國家の經綸事業の經營思想上等に行はれる頻時であつ

て、今日の外交と稱せられてゐる事柄の上には強國が弱國の企劃してゐる事柄の上へ、更に同一の事業を頻時して、最初の種子の發芽をさへ、防害し、よしや發芽をしても其幼芽は發育が不可能であつたり、他の惡草が混じ生えて、殆んど最初の收穫を皆無にするような事が屢ばある。政黨政派といふ連中にも、その策を講じて以て他黨他派の事業を防害する事は夥しい事である。政治上にも實業界にも、常にこんな事は幾らも行はれてゐる事柄で、今日では宗教上にも教育上にも頻時が行はれてゐるのである。

勿論戰國時代の英雄なぞが、斯様な手段をとつた事は當然とも見るべきだが、文明先進國と呼ばれてゐる國々の大宰相にはこの手腕が最も巧みに行はれてゐる事が奇怪の極みである。支那の歴史にも西洋の歴史にもこの頻時の史實が、頗る多い世は修羅の巷である。他國、他黨、他家、他人の發展を阻害して自利を念とする現代には猫も杓子も皆小策を弄して頻時の工夫に餘念なきは歎すべきである。他を害するものは、己も咀はるで、此處に地上の全面に本當に人らしい人の群が

消え失せて、怖るべき惡草の繁茂に委する許りである。どうしてもカアマ神劍が降らねばならぬ現狀であるのである。タカアマハラの本義には頻時はない。

第三義 人身上の頻時 一人一人の上に行はるゝ頻時であつて、人は自分の種子上に更に重ねて種子を蒔いてゐる。實におかしな事である。利慾に目が暗んでの仕業である。善良なる種子は時々芽を出さんとするけれども、毒草が更に頻時かれて善草は忽ち枯れてしまふ。平氣で虚言を吐いたり、澤山な仕事に手出しをして氣をいらだたせたり、信仰の對照を常に二つも三つも持つたりして苦しむのである。煩悶、苦惱の原因には、その他種々あらうけれども、靜に考慮すれば頻時にある事を直に見出すであらう。心の二重三重四重の生活は日常の二重三重生活よりも幾層倍ぞ深く顧みなければならぬ。

串刺 古來の解釋は田の中に串を刺入れて百姓の足裏をなやますためにせし罪惡としてゐる。成るほどこれも罪惡であらうけれども、これしきの罪惡を國家の最も重大なる神事たる「大祓」に於て潔齋する程の事柄であらうか。串刺といふ事は、利害



關係等の爲めに、多くの者を連累せしめて、其の自由を束縛して串で刺いたような事にする事でありませぬ。これにも三種の串刺がある。

**第一義** 天上の串刺 此れは天照大御神の天上の御統治界の串刺であつて、タカアマハラの圓融活動の常相には串刺を許さない。串刺は罪惡である。

**第二義** 地上の串刺 此れには國家經綸上にも事業の經營上にも、思想上にも、串刺があるのです。政黨政派といふものは、立憲政治に於いては必要なる機關たるは勿論であるが、その爲めに串刺されて自由を失ふ事がないでもない。今日は種々の團體が勃興しますが、その中には串刺が行はれる事も多くあるであらうと思ひます。少し氣概のある者などは、種々の道具で串刺されてしまふのです。勿論事業界に於ても、協力して團結的に爲して行く事が利益の多い事は當然だが、意志に反して之を串刺するのは罪惡となりませぬ。自由といふ事は、尊重すべき事であつて、その自由が拘束される事は生命の縮壓となるのである。けれども自由は勝手氣儘ではありません。高天原は統一體である、相互活動の圓滿融和が基であ

る。その團體的大活動の中にはしかし串刺はありません。串刺は矢張りその根柢が何かの利慾から發して奸策が基となつてゐます。思想上にも串刺は多いのである。宗教上にも串刺がある。特に現今の經濟問題、思想問題には留意すべきものが多いのである。

**第三義** 人身上の串刺 此れは心理的生理的に串刺が個人々々の内にも行はれてゐるのである。つまりぬ迷信に囚へられてゐる輩も澤山ある。舊來の傳統や、陋習や風習に囚はれて知らず識らず串刺にされてゐる事は案外多い事柄である。一度覺醒して見ると、その多數の串刺がよくも我が生命を奪はなかつたかを怪しむ位です。無形の串は慘酷にも我等に簞の如く刺してゐるのである。我等は全く自由を失ふて囚人に等しいものである。

**生剝** 古來の解釋では、生きたる獸の皮を肉より剝ぎとることゝしてゐますけれども、それは全く表面のみの解です。「大政」は左様な小さいものを對照してはゐぬ。

**第一義** 天上の生剝（てんじょうのせいばく）古事記には須佐之男神が生馬の皮を剝（は）がれた事が見えてゐるが、これは天体の上（てんたいのうへ）に於ける事柄で天地の經綸上（けいりんじょう）に大妨害を興へられたのであります。莊子に「萬物一馬」の語がありますが、この宇宙に生剝（せいばく）的天變があるのである。

**第二義** 地上の生剝（ちじょうのせいばく）これには國家經綸上（こくかけいりんじょうじょう）事業經營上（じぎょうけいぎじょう）、思想問題上（しせうもんだいじょうじょう）等の生剝（せいばく）があるのである。今日の外交政策には生きたるもの、皮を剝（は）ぐが如き事を致してゐる政治家があります。弱國は爲めに其の生き皮を剝（は）がれて赤裸となり終にはその身まで粗上（そじょう）のものとなるものもあるのです。他の大切なる外皮としてゐる要件や國防や國家の體面が無慘にも剝（は）ぎ取られて、而して全く擁護機關を失ふ等の事が行はれるのです。實業界に於ては、更に一層甚だしくて、萬人が恰も態の良い盜人のような魂性になつてゐるのです。また學界に於ても他の名譽を重んぜずして、生剝（せいばく）をやる者も多いのです。勿論今日では不潔極まる不徳な外皮を蒙つてゐる奴が多いので新聞等で生剝（せいばく）を加へて懲

戒を加へてゐる事柄も多いが、さうでなくて人の生命財産に關する外皮を無酷たらしく剝（は）いでゐる行爲も多いのである。兎も角も現今では、人間を動物同様に扱つて、人格尊重の念が乏しいから、生剝（せいばく）が行はれるものである。

**第三義** 人身上の生剝（じんしんじょうのせいばく）これは一個人の身の上にも生剝（せいばく）が行はれる事に屬します。自分が自分の外皮を剝（は）いで、其の身を苦しめてゐる事は實に愚の至りであるがそれが不知不識の間に行はれて、種々の不幸の因を招いてゐるのである。信仰は自個の甲冑であるべきであるに、その信仰を放擲して顧みません。信用も自己が自ら破つてゐるものもある。人倫道德は人格的の美衣です。然るにそれを捨て、惜まないのである。我等が假面の外皮にのみ惑つてゐる内に眞の生き皮が剝（は）がれて行つてゐる事が氣がつかせません。豈に嘆すべきではないか。眞の生き皮を堅固に守る事が大切なこといふ事の自覺さへ無いものがあるのは、實になさけない。

**逆氣** 古來の解釋ではさかさまに剝（は）ぐといふ意で生きたる獸の皮を逆（さかさま）に下より

上にと剝ぎ行く事なりと解してゐるが、これだけでは意義の淺薄なるは當然である。逆剝は逆に剝ぐのには相違ないが、それは獸に對してはなくて、こゝにも三種の逆剝がある。

**第一義** 天上の逆剝。須佐之男命の生駒の皮の剝ぎ方は古事記には逆剝となつてゐる。天上の經綸を逆に剝ぐ事でタカアマハラ運行の逆使となる。勿論タカアマハラには順逆の二流があるから、逆流もあるのであるが、逆剝は順流なるが逆に逆流なるが順にといふ有様に、當然の脈流を逆に剝いで行くので、タカアマハラの運行上この上ない大事件であるのである。この素盞鳴男命の行爲のために天照大御神の岩戸隠れが、實現された程の最大罪惡であります。高天原に順逆二流あることについては本節の末葉に述べて置く。

**第二義** 地上の逆剝。これには國家經綸上事業經營上思想問題等の上に逆剝があるのである。外交上の逆剝は勿論の事であるが、他の事業に對して逆に剝ぐの仕方は常に多く行はれてゐるのである。正直は最上の商客と申しますが、世には不正直

者が多いので、商略として多く逆剝を考慮する事になるのです。而してそれを商略の當然のものゝ如く見做してゐる輩さへあるのだから、痛嘆すべきである。學界にも逆剝があります。勿論不當なる事柄に對して、痛撃を試み對者を覺醒せしむる事は悪い事ではないが善良なる者を苦しめ、他の生命人格、財産等を脅かしたり逆剝したりするのは大なる罪惡である。國政を逆に剝がんとする者の如き乃至國体を逆剝せんとする輩の罪惡は極重のものに屬します。

**第三義** 人身上の逆剝。我々はタカアマハラの中の自然の中に育つてゐるもので、自然の生活をさへしてゐれば安全幸福健康である。然るに我々は自分から生命を脅かしてゐるのである。逆行して自己の保護機關を剝いで行つてゐるのである。譬へば疾病は實在でないものを自分から創造して、眞の病体になつてゐるものが多い。神經的疾患、内科的疾患等は、誰も彼も自己の幸福を祈つてゐるらしくて而して其實は病勢を進ましてゐるのである。教育なんかも誤ると逆剝的の教育となつて却つて大なる害を及ぼすものである。故に常に自然の神則を嚴守して、決して

て逆剝の悲運に陥つてはならないのである。

尿戸 古來の解釋では尿戸は尿放の義で、尿まりも同義であるごあります。尿を出すとといふ事が不潔には相違ない。殊に清淨なるべき所に尿まるのは勿論不都合である。けれども斯様な汚穢が國家の行事として被ふ程の事でせうか、今日の刑法でも大した罪科ではないではありませんか。

第一義 天上の尿戸 〓これは天照大御神御統治界の尿戸で古事記にある須佐之男命の大嘗之殿に尿まりちらすの事件で、これは天体上の事柄であります。天体の運行上にこの尿戸といふ事が起る事があるのです。

第二義 地上の尿戸 〓これは國家經綸上にも事業經營上にも思想問題にも起る尿戸をいふのです。一般に不敬事件と稱されてゐるのは皆この尿戸に屬するのである。皇室に對し、神宮に對する不敬事件等これである。國政上にも官人がその官職を不潔にする事が多くあります。現代の政治は腐敗したとか何んとかいふ中にも尿戸に屬するものが含まれてゐます。疑獄事件の濚發は、政界の腐敗立證でありま

す。實業家が鼻持ちのならぬ程不潔な手段を弄する事のあるのも屢々新聞紙上等に暴露されてゐる、この不潔な汚穢事件は酔つて吐き散らす行爲であるご古事記にはしてあるが、實に黄金毒に酔つた結果である。物質主義文明の餘毒は到然爰に達すべきものである。今や世上は尿の埋積された巷である。悪臭紛々の巷である。酔つたものは悪行爲を悪行爲とは思はないものである。黄金毒に酔つて黄い尿をまりちらすとは面白い事件ではないか。いかに衛生をやかましく言つた所でこの始末は到底つけられるものではあるまい。

第三義 人身上の尿戸 〓これは個人の上の尿戸であつて已に社會全般の人々が、尿まりちらす酔人許りであるから、個人がどうして獨り酔はないでゐられようか、人は悉く酔つてゐる。我身を我身で汚してゐるのである。その一つの証據は、疾病に罹つてゐる事で明らかである、清淨の人の身が汚がれてゐる、神經衰弱で氣がくさつてゐる。我が、神にうけた神殿がいかに汚穢されてゐるかを深く省察すべきである。大宮柱は果して下つ岩根に太敷く立つてゐるか、ドウか高天原に

千木は聳わてゐるかドウか美しくしい心殿が何故にかくも不潔であるのであらう。高天原は順流と逆流との二流の交流になる世界であつて、譬へば、水が一度びは天上に向つて蒸發するけれども、登りつめては、逆に雨となり、霞となつて降るが如きものであります。高天原には順流系と逆流系との二系があるのであつて、この二系が萬神萬有の祖神であらせらるゝのであります。順流系は即ち神力の發作が根本で平等性のものであるのであります。前に述べたタカア、タアマ、カアマ、ハラ諸力である。即ち

タカア＝發射神力は光明遍照で平等一如の普遍的のものである。

タアマ＝凝聚神力は至仁至愛の平等一如の博愛的のものである。

カアマ＝圓融無碍の平等一如の神力である。

ハラ＝旋廻的平等一如の神力である。

然るに逆流系の神漏美系は、差別的の神力であつて、

マアカ＝全・大・多・勝

マアタ＝股・部・枝・支

アカタ＝片・半・半分

これ等は皆な、差別の原因である。

故に靈は平等を本位として融和を熱求するけれども、體(肉)は差別を本位として個々分離を主張するのである。この平等と差別とが巧く何等の障礙なくて、完全に行はれて行くのが、高天原の靈肉二系の自然の神業であるのである。然るに、體(肉)系の差別的發動が靈系の平等的發動を阻害するのである、これが罪惡の根本となるのである。

皇典にては靈が體を支配して行く時は「靈主體從」の姿となり、體が靈を支配して行く時は「體主靈從」の姿となります。之を皇典の上に例証せんに、伊邪那岐神(靈系)が伊邪那美神(體系)を支配して天地の修理固成に當り給ふた間は順なる天地の創造がありました。伊邪那岐神の黄泉行といふ神事に至つて、體主靈從の姿となつて參りました。故に此處に凶變が起つたのでした。

これ伊邪那岐神の水滌祓の神事がある所以です。天照大御神(靈系)が素盞鳴男命(體系)を支配して天界の統治を爲し玉ふ間は、順なる統治がありました。素盞鳴男命が天に参り昇つて天界で横暴せらるゝに當つては、体主靈從となつて、爰に天照大御神の天岩戸隠れが起つた所以である。大國主神(體系)が國土を領有して、皇神の威光が地上に及ばなかつた時は地上に体主靈從の姿が現はれて、國土草木まで威く亂れたのである。

これ皇孫(靈系)御降臨のある所以。これを一個人の上に見ても靈(精神)が肉體を支配して靈主體從の場合には健康、幸福、長壽、榮福が参りますが、肉慾が主となつて、精神が壓伏されますと、神經衰弱が起つて、種々の厄災が家且つ其身に起るのである。

皇典古事記に「女人先言不レ良」とあるのは、高天原の大神律である。女人とは物質的肉體的を指す、体系の差別的發動といふ事は、頗る結構な事であつて、この差別的の神事がなくば、神界は頗る單純無味で、何等の妙味もありません、色もあり香もあり、臭もあり、音もあり、寒暑もあり、精神状態も變化がある爲めに、神界には頗る妙諦が発現し、八百萬神の發動が起るのである。「かみ」(神)の解説の箇所でも最後身として「カギサミ」(限身)を述べて置いたのは、實に天之御中主神の至仁至愛を蒙けて、岐美二系の最も深き慈愛を受けてゐるものと謂つてよいのであります。眼あつて見、鼻あつて臭ぎ、耳ありて聴き、口あつて味ひ、身あつて感じ、意ありて識ります。この眼・耳・鼻・舌・身・意の六根は其の根本は体系の至仁至愛に出たと謂つてよい。

然るに限身たる我々は六根を具備するが故に見て不淨に陥り、臭いて味つて聴いて感じて識つて種々の不淨に陥るのです。故に六根が、即ち眼塵、耳塵、鼻塵、舌塵、身塵、意塵の六塵となつて我等の靈(精神)を穢します。我慾の根本は、差別的の體慾に發して平等の靈を害つて行く、即ち平等の靈的神力が損傷せられて、體慾の横領的な跳梁が起つたのが罪惡である。光明の遍照に陰影を生ずるのも、體慾の爲す所ろであります。至仁至愛の平等愛を放棄して、我慾の汚穢が現れるのも、

体慾の不自然から出る。カアマ神劔の勇武が鈍つてその圓融平和の經綸が害せられるのも全く我慾の体主靈從の現象であるのである。

六根不淨が原因で、國土を災し、國家社會を亂し、天地を變天に導くのである。正しきを語るべき舌が、邪惡を語り虚偽を語り他を誹り、自ら慢ります。世界平和の根元が六根の不淨に穢されて、種々の罪惡變災が發現します。皇神の御降臨は「靈主体從」の本義を確立して高天原を潔齋するのである。故に「大祓」は即ち皇孫御降臨の御行事を營むに外ないのである。大祓の中に在る畔放・溝埋等の罪惡は素盞鳴男命の体慾的横暴から起つた罪名が多くありますが、これ皆要するに、靈系を犯した体系の跋扈に基くものに外ありません。體系神が天に參ひ登つて、所謂横暴を爲す結果であります。畔放始めの罪惡は、前述した如く其の發現の本因は体(肉)系の横暴が原因であつて、六根不淨の跳梁である事を先づ以て充分に心得ねばならぬ。靈主体從の本義さへ立てば、天津罪も國津罪も一切消滅するのは、自然の數である。これ「皇孫御降臨」を強く主張して、國土を擧げて根本的に「靈主体從」の本義

を確立して神統を序列し、神性神作を顯示し、潔齋する所以であります。

日本國は靈系の國であつて、世界統治の本義が宿つてゐるのが、大祓の本國たる所以であるのであります。「大祓」は日本國を顯はすこと。皇親の御神徳を明にして、萬民に適從する所を示すの外ないのである。

### 第八節 國津罪

クニツツミトハ。イキハダダチ。シロヒト。コク。オノガハハオカセルツミ。オノガ  
 國津罪止八。牛膚斷。死膚斷。白人。胡久美。己母犯罪。己  
 コオカセルツミ。ハ、ト。コトオカセルツミ。コト。ハ、トオカセルツミ。ケモノオカセルツミ。ハ、ムシ  
 子犯罪。母與子犯罪。子與母犯罪。畜犯罪。昆蟲  
 ノワザワヒ。タカツ。カミノ。ワザハヒ。タカツ。トリノ。ソザハヒ。ケモノ。タホシ。マジモノ。セルツミ。コ  
 乃災。高津神乃災。高津鳥乃災。畜仆志。蠱物爲罪。許  
 コダグ。ノツミイデム。  
 許太久乃罪出武。

〔解釋〕國津罪 物質を本位とした罪惡 牛膚斷以下諸罪は後に委しく述べし許

許太久乃罪出武 || 斯様な種類の幾多の罪が出でるであらうの意。

【大要】これは肉體上物質上の罪惡である。罪の解釋は己に天津罪の條で述べて置いた通りであるが、罪惡は元來、物質系の跳梁が原因で、先づ根本には靈が損せられて神經衰弱を起して、次に疾病や雑々厄難が重なつて起る譯であるが、これは因果應報で、肉が靈を犯して靈を汚穢し、その平等自由の發動を阻害した結果は再びまた元の體に廻り來て、肉の若難を受けるのである。

日本國は靈の本國であつて、「大祓」の祭主國であるのであるが、諸多國は物質文明の本國で光華燦然たる文化が常に發現しましたが、その文明は常に最後は其國を害しました。支那の歴史も西洋の歴史も悉く然りです。日本國は三韓の文明を始め支那印度西洋諸國の文明を漸次取り入れましたが、その爲めに發達した事も多々であつた事は明瞭であるが、又一「体主靈從」の歴史を屢々嘗させられたのであります。日本の歴史が苦難に際したのは、却つて外國文明の輸入が元になつてゐますけれども本心は終に失ひませんでした、而して諸外國は幾多の興亡を重ねましたが

夫は體系の當然受くべき結果であつたのであります。「靈主体從」の本義が世界に確立するまでは世界に根本の平和は見ないのである。即ち日本の國の光が世界を支配して、眞平皇孫の統治が發現するまで、肉の横暴は止まないものである。今日は世界の思想が悉く行き詰りました。最早天運順還の秋であります。日本國は先づ率先して「大祓」を斷行すべきであります。而してその「大祓」の威力を世界に光被せねばなりません。

生膚斷 これにも三種の意義がある。國津罪は物質系の罪惡であるから、地球の上と國土國家の上と人身の上との三方面より述べるであらう。

第一義 地球の生膚斷 || これは地球上面に繁殖する生物を殺害せる事である。その一つは森林の樹木を濫伐せる事である。森林を濫伐せる時は、降雨に大關係を及ぼして旱天が襲來するのである。また降雨が多過ぎて水害を蒙らす事がある。これは屢々實驗された事である。次に動物を多く殺害する事である。所謂殺生といふ事である。殺生を罪惡の中に算へる事は何れの宗教も同様であるが牛類を慘殺



した爲めに作物に損害を及んだ事も屢々聞く所である。蛙を殺したり、雲雀を殺したりした爲めに、作物に害虫の生じた例もある。

**第二義** 國家社會に於ける牛膚斷ごうふだん。これは人を殺す罪惡で所謂殺人罪である。人を殺す事が罪惡である事は當然の事である。殺す許りでなく傷をつけたり、血を流す等の事は悉く罪惡である。その中で最も大なるは戦争である。戦争のために多數の人命が失はれる。戦争ほど悲惨なものはないのである。その原因は全く物慾の争鬪から起るのであります。

「大赦」は武裝的の神事で、一面から見れば牛膚斷の行事に當るのであるが、しかしこれは、醫師が疾病の治療を爲すに當つて振ふ所の刃であつて、寧ろ活人劍でありますから、障惡を切斷して正位に復するのは仁術に屬するのであります。混同してはなりません。

**第三義** 個人の上の牛膚斷。これは自己が自己の生膚を斷つので「身体髮膚之を父母に受く敢て毀傷せざる孝の始め也」とある通り、自己の身体を損傷し、乃至、

自殺する等は専ら罪惡の一つである。我々は過失によつて、よく身体を損傷する事がある。これは知らないでする業であるが矢張り、これ生膚斷に當る。但し疾病に際して之を治療する爲に生膚を斷つのは全く止むを得ぬことで、罪惡では無い。この中には入らないけれども、疾病に陥つたこと自體が、己に罪惡である事を知らねばなりません。

**死膚斷** 古來の解釋では、死體に疵をつくる事をいつてゐる。斷は切る意としてゐる。これにも次の三義がある。

**第一義** 地球上の死膚斷。これは地層を斷切して地球生命に危害を加へる事である。農作物を播種したり、耕耘したり、交通のために川や池や溝を堀つたりなどする事は、勿論必要な事である。しかし地層を深く堀つて地球の地層に變化を與へる事は必ず何等かの變動を起す因となる。礦物を堀り出したり、石炭を堀つたりする等の事も一面工業上必要な事ではあるが、地球の生命といふ事から考へると死膚斷に當る罪惡となつて、變災が來る事に心付かねばなりません。今日の科學

はまだ其處まで考へて居ないのは淺慮と謂はねばならぬ。

**第二義** 國家社會上の死膚斷シツポクダン。これは祖先の墓をあばく事に當ります。國と國とが戦争せる事は前にもいふ通り生膚斷シキハタチを行ひますが、また一面には占領した地下に眠れる人々の死膚を斷つ事に當ります。死者の冥福は誰も訪ふ人がなくなつて地下の靈を慰める事が出来ません。これは必然死者の死膚を斷つと同様の有様になるのです。全体地上を分割して占領するといふ事が本義に遠い仕方であるのである。土地分領といふ事が争鬭の因を爲すのです。分割といふ語は切斷に當ります。私領の土地といふものはウシ、ハケルものに屬するのである、群雄が割據して土地を分割してゐるといふ事は争鬭の因であるから、罪惡の中に入るのである。土地は住民の共有たるべき事、空氣や水の共有と全然たるべきものである。

**第三義** 人身の上に於ける死膚斷シツポクダン。これは髪を餘り短かく切つたり、齒を抜いたりする等の事に屬して人体の上に自然に生ずるものは、必要に應じて發生するものであるのに、見得や外分や虚飾の爲めに自然に發生するものを徒に斷切して、

廢去するのは、よくない事である。人の疾病や災厄は斯様な思ひも寄らぬ所に宿つてゐる事のあるのを察すべきである。この事は現今に於ては餘り元始的なつまらぬ理窟をいふやうに聽えます事柄であるけれども、いつしか深く心付く時があるらうと思つてゐる。現今の死体を葬る仕方には「火葬」「埋葬」「水葬」等があるがこれが果して人の死体を葬るの最善のものであらうか。理想的の葬り方といふものは、大いに研究の必要があらうと思ひます。

死骸の如きはごうでもよいではないかと言へば、それまであるが、それは矢張り「死膚斷」の部類に入るべきもので、理想世界では決してこれを看過する事が出来ない重大なるものである。この點に對しては、彼の埃及の古代に於ては、大いに研究されたものゝ如く思はれます。決して軽い問題ではない。

**白人** 古來の解釋にては白人は膚の白き斑ある人をいふ。和名抄に病源論に云ふ白癩ハタハ（之長波太）人面及身頸皮肉色變シメンマタミクビカハニシヨクシロニ白亦不痛痒シロモツウヤウセザルモノナリ一者也。とあり。いまはこれを鯨膚クジノハダ（癩風）といふ。これ人の頸也、胸前腋下などの膚に痛痒なくして黒き斑剝を生ずるも

の略してなまづといひ、其の斑の白きを古く白膚といふ。今しろなまづと稱ふるものなり。云々とあります。白膚は穢れの部には屬するかも知れないが、罪惡の部として如何でせう。本義は次の如し。

**第一義** 地球上の白人。これは土壤を荒廢せしめて沙漠となし、植物の發生を不能ならしむる事である。動物も勿論生育が出来ないゴビやサハラの大沙漠の如きは其成因は不明であるが、兎も角も地上に不毛の地皮を生ずるのは地神系の過犯に基くには相違ない。地球の各所に斯様な地が生じては大變である。

**第二義** 人類社會の白人。これは國家社會の上に現はるゝ白人であつて、例せば強賊が都市を焼き盡くして黒土に歸せしめ乃至は都市郡村等に襲來して掠奪を擅にする等の類である。群賊の爲すのは大なる白人であるが、或は其家を焼き若くは強奪を爲すが如き今日所謂強盜と名づくる者等も、この種類のものである。社會上に物質的に斑點を生じて、大なる損害を與へるものは皆この白人の中に入

るものである。經濟上にも交通上にも、この事は澤山行はれてゐるのである。現今の如く黄金萬能の社會に於ては、白人の多き事實は想像の外である。社會上黒白の斑點を生じて、金融の圓滑を缺ぐが如きは、當に見る所である。法律上の罪人以外に斯様な意義に於ける白人罪惡は公然の強盜とも謂はるゝのである。

**第三義** 個人の上に於ける白人。これは虚飾の爲めに厚着したり、薄着したりして皮膚を荒らし、猛らしい化粧品を使用して皮膚を害する等の事柄である、人の皮膚は健康上非常に大切なものであるのに、虚榮や見得の爲めに、その本来の活用を阻害し曳いて健康を害するはこれ罪惡である。天質の眉目秀麗が高天原の質であります。故に「大祓」が行はれて理想郷が實現すれば、人は悉く神の如く麗はしい體質となり、体格を具へ輝くほど秀麗な眉目の人格となるのであります。人為の裝飾を加へない、美しい膚となつて本質が充分に發揮するのであります。  
**胡久美** 古來の解釋は寄肉にてあまじゝなり、あまじゝは餘肉の義にて、疣瘤など

餘りて出來たる肉なり。和名抄に瘰癧説文云瘰癧一名胡久美。寄肉也とあり。この寄肉の説は穢れに屬して居て罪惡と見るはいかゞ、本義は次の如くである。

**第一義** 地球上の胡久美。これは地球の地層乃至土壤に寄肉の如く瘤の生ずる事である。地球の完備圓滿の活動上に寄肉はそれだけ活動の圓滑を阻害してゐる有様である。この寄肉のために地球内部の活動に支障を生じて、地變が起る因を爲すのである。地瘤の出來る原因並に其の地球活動に及ぼす災禍は地文學上の大なる研究を要す點である。人々の氣の着かない所に地中地表にこの寄肉のある事は多くある事と信するのである。これも地神弄の爲す所の罪惡である。

**第二義** 人類社會上の胡久美。人類社會の圓滿なる活動界にも幾種かの胡久美があるのである。特に金融界に於てはこの胡久美は當に現はれてゐる所のものである。經濟界の事業に通曉してゐる人々は明瞭にこの胡久美状態を知悉するに難からざる次第である。大會社等が固意に胡久美を生じて利益を臚斷する等の事を爲すは尤も大なる罪惡と見ねばならぬのである。小さい部分にも小さい胡久美は數多く

現出するので私有財産説といふものに對する議論さへ出てゐる有様である。兎も角も一方に滯積して一般の活動に阻害を興へる行爲は悉く、これ胡久美罪である。

物質的に見て、この胡久美罪を構成する事件は、随分數多いものである。精神上の胡久美は天津罪に屬する溝埋等に當ると見てよいのである。

**第三義** 個人の上に於ける胡久美。これはせむしや瘤の人や畸形の体格の人を謂ひ乃至支那人が纏足して足を小さくしたり、西洋人が腰を締めて細くしたり又、アイヌ土人が耳に金輪を垂れさすの類で、外見や虚榮の爲めに態と自己の身体の上に寄肉を生じたり、變態を生せしめたりするのがこれである。種々なる疾病の原因の中には、この胡久美から來るものが頗る多いのである。内科的にも外科的にも醫學上から見て、血行とか神経系とか其他の生理上に變態を生じて、疾病の因をなし、健康を害し壽命を短縮してゐるものは案外に多い。これ大なる罪惡である。**已母犯罪** 古事記を始め皇典の見方では母といふのに種々の見方がある。

- 一、全く自己の産みの母の意。
- 二、物体の産み出された本体即ち物体が産出されたその母体となるもの。例せば綿から糸を産出したとすれば、綿は糸の母である。糸から織物が産出すれば糸は織物の母であるといふの類。
- 三、事件の發生した原因のある所を稱して母といふ。
- 四、神漏美系の神を稱して母神系とも單に母とも見る。従つて靈は父、肉は母と見る。

斯様な解釋があるのであるからして母を犯すと言つてもそれが單純なる意義ではないのである。故に己母犯罪始め犯罪を單に姦姪罪と稱するのは當らない。

**第一義** 地球に於ける己母犯罪。これは地球そのものを母体と見て、地球より生じたる動物植物始めの生産物が却つてその母体を犯して母体産出の機能を阻害する事があるのである。古事記には火神迦久都智が其の母神たる伊邪那美神の陰部を害して終に死に至らしめてる事が録されてゐる。これも勿論この部に入すべきで

ある。犯すを姦姪の意義と婚といふ意義とに二通り見てゐる學者もあるが、この地球上に於ても種々の子が母を犯す意義が存在してゐるのである。今一々其の例を擧げるの違がないが、地球の産出物たる噴出物、火山地震など深く思ひ到つたら幾らも此の種の罪惡を認めらるゝであらう。

**第二義** 人類界に於ける己母犯罪。これにも單に己が生母と見る以外に、元金と利子といふが如き關係原料と生産との關係の如き、會の發起人と會員との關係の如き物質的に見て己母犯罪に算へらるべきものは案外に數の多いものである。また己母を己れより年齢の多い婦人と見る説も亦一説である、姦、婚共に犯罪とするは勿論である。

**第三義** 個人の上に於ける己母犯罪。これは生母との關係と單に見るべきである。己子犯罪。母與子犯罪。子與母犯罪。姦犯罪。古來の解釋では己子犯罪は己が子を姦する罪といふ義並に己れよりめしたにたはける罪といふ義とし、母與子犯罪は或る婦人と其婦人の生める女子とを姦する罪といふ義。又その婦人を一度他家に

嫁したるものとし其婦人が他家にて生める女子をも姦するの義となし、子與母犯罪は或る女子を犯しまた其女子の母親を姦する罪なりと謂ひ、畜犯罪は飼物を姦する罪といふ意としてゐる。されどこれ未だ徹底せざる解説なるは勿論である。母の意義子の意義は前講に述べた通りで、爰も亦その意義で解すべきである。

第一義 地球上に於ける此等の罪。|| 生産したる母体はその生産したる子を犯す事がある。乃至母体と其生産物たる子體との雙方が、意氣投合して犯す罪もありま

すし、第三者が母體と其の母體より産出したる子體の双方を犯す罪もある、また子體と母體とが聯合して犯す罪もありますし、乃至子體と其子體の生じたる母體との双方を犯す罪悪もあります。

第二義 人類社會上に於ける此等の罪。|| この項の意義に於ては母を年齢のたけたるもの、子を年齢の若きものとして姦淫の罪惡の一般を述べたものとして見る方面もある。しかし母の義、子の義が單に婦女子に限らないのである。以上社會上に母子相姦の事實は多數に存在してゐるのである。畜犯罪は稍々母子の關係とは

相違して居つて、畜は生産に附隨してゐる所の事物を指す事となつて、母體附隨子體附隨とありますが、要するに生産に對する副産物や間接に生産されたり生産したりするものをいふのであります。

人類社會上の意義では奴婢の事または娼婦、賣淫婦等を指す意義もあります。第三義 個人の上に於ける諸の此等の罪。|| 以上の諸義が宿つてゐます。畜犯罪は畜類を姦する事となりま

事實世上の罪惡には、婦女子に對する姦淫罪も頗る多數であるに相違ないが、金融界始め一般の物質文明の機關に於て、現今の有様では實にこの不倫婚や姦淫罪は非常に多い事であるのである。政治界にも其他の社會に於ても罪惡の影には、必ず女が潜んでゐるといふのは眞に意義深い言葉である。斯様に姦淫に關する條件をい

い程も重ねて列載してゐるのは一つには、彼の聖書にもいふ通り「古の人に告げて姦淫すること勿れと言へることあるは爾曹が聞き所也されど我なんぢらに告ん。凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したる也」云々。又曰く「姦淫の故な

らで其の妻を出す者は之に姦姪なさしむる也、又出されたる婦を姪る者も姦姪を行ふ也」云々と謂つて居る意義の嚴密なる方面もあるのであるが、尙一つには現今の婚姻なるものが、眞實の婚ではなくて、眞の愛を元としての成立ではなく、その夫の方にも妻の方にも毫も自由を傷けない。而してその生れる子供に對しても充分の方策が立てられて居らない、謂はゞ不完全な結婚を戒めたものであつて、人間としての神聖な自由な眞實の愛と最も安然たる組織に於ける結婚を奨めたものであつて、不自然な不完全な結婚が即ち犬婚、馬婚、牛婚、鶏婚といふのである。現今の結婚は、盡く皆なこの獸的結婚に屬するものとなるのである。理想郷即ち高天原の結婚法は頗る自然的な完全な神聖なものであるべきである。種々なる情實や規範や傳統や單に肉體的な結婚は「大祓」の行事の後には大變革を來たして、世界が一統する事となるのである。結婚問題は社會改善の大なる根本問題であつて重大視すべき事件であるのである。教育問題、衛生問題等も皆な此所から新らしく出發すべきものであり、人口問題等も、この根本から解して行くべきものである。人事界の

事は端を夫婦に發すと古人も謂つてゐるが「大祓」の上に斯様に、ごく罪惡を列擧してゐる事は頗る注目すべき事で看過すべからざる事柄であるのである。誰か現今の結婚法を目して理想だと申しませう、而して、誰か獸的本位の結婚ならずと明瞭に答へ得るでせう。これ大に研究すべき至重の問題と申さねばなりません。昆蟲乃災。古來の解では匍匐する虫の災害をいふとせり。上代には民のすみか野山にまじりて、かりそめなるかまへなりしかば虫の害多かりしなるべし。今の世とても蠅蠅蚊蜂などにさゝれてなやむ事なきにあらずと大祓詞後釋には述べてゐる。して見れば建築物が完備して毒蟲の災がなくなれば「大祓」は不必要となる譯である。昆蟲のさすのが罪惡であるとは整した昆蟲に對して謂ふのであらうか。古來は「大祓」を斯様な淺薄なものに見て居たものである。本義は次の通りである。

**第一義** 地球上の昆蟲乃災。これは地球上に毒蟲害蟲が多くて動植物始めに危害を加へる事はこれも神界に於ける罪惡より起るものであつて、また人がその害を助長する事も屢々あるのである。螟蟲が農作物を害して飢饉を到來せしめた事は屢

々起つた事柄である。

**第二義** 人類社會の昆蟲乃災。人類社會にも毒蟲や害蟲が實に多く發生してゐるのである。社會はかゝる毒蟲に等しき人等の爲めに危害を蒙つてゐる事は多大なものである。特にこの頃は高等遊民といふ害蟲も存在してゐる。あらゆる社會に毒蟲害蟲がウジ、ク、してゐる。これは社會のバチルスである。また微菌が蔓延して劇烈なる傳染病の害毒を蒙る事も、この昆蟲乃災の中に這入るのである。他人に疾病を傳染せしめ、病毒を蔓延せしむる事は、正しくこれ罪惡である。尙ほ目に見えない所で他人の所有を浸蝕したり、主家のものを掠めたり、蟲の匂ふが如く他人の所有地へ浸入し吞食する等も、この昆蟲の災に屬する罪惡となるのである。

**第三義** 個人の上に於ける昆蟲乃災。これは蠅蠅十二指腸條蟲等始めの疾病に罹る事乃至微菌に犯されて疾病に罹る等の事柄であつて、人が疾病に罹るのは、一つの罪惡である。疾病は自己の不衛生からはじまるのである。不衛生とは、タカア

マハラマハラの神則神則に違反違反して我慾我慾の奴隷奴隷となる事をいふのである。

**高津神乃災** 古來古來の解説解説は「まがつ神まがつ神の災災といふ意意。このまがつ神まがつ神は其其の神神を指指したるにはあらずさを天狗天狗なりと云云ひ雷雷なりと云云ひ、くさくさの説説あれども信信せられず。本義本義は次の如如し。

**第一義** 地球上地球上の高津神高津神乃災。高津神高津神は普通普通天象天象を謂謂つてゐる。日月星辰日月星辰等より起起る諸現象諸現象乃至寒暑風雨寒暑風雨等を指指して謂謂ふのであるが、この天象天象をなせ、高津神高津神かといふに、天象天象はカケリミカケリミ（駈身駈身）といふ神神の掌掌る所所であつて、この神神は天駈天駈り國駈國駈る自在自在變化變化身を有有してゐる神神様様である。

**第二義** 人類社會人類社會の高津神高津神乃災。人類社會人類社會にも高津神高津神が多くあるのである。位階位階の高高いものは低いものに比比して高津神高津神であるのである。官職官職の高高いものは、低いものに比比して高津神高津神である。治者治者は被治者被治者に對對して高津神高津神である。

自己自己の位階官職位階官職地位等地位等の高高きが爲爲めに下の者下の者に對對して威壓威壓を加加へ、横暴横暴を振舞振舞ひ、權威權威を猥猥りにふり廻廻すのは、下に對對して高津神高津神乃災乃災となるのである。現今現今は



何事も普遍化され、民衆化されまして、高津神乃災は非常に減じたのである。故に「大祓」の神事にはあらゆる階級の人々を代表せしめて弊害のある所を矯正する責任を負はす事になつてゐるのである。舊來の陋習を破りて、天地の公道に基づくべしとの御誓文が「大祓」の眞生命であるのである。

第三義 個人の上に於ける高津神乃災。これは高慢する事を罪とするのである。慢するものは他人に直接間接に苦痛を與へる。乃至物質的の横領等もこれから起るのである、或は身体を撃つたり傷けたりなぞもするに至る。昔の刑罰の慘酷であつた事を思ふと全く隔世の感がある。

高津鳥乃災 古來の説は怪鳥の災といふ意とし、祝詞講義に怪鳥の家の邊に群り來て、妖ひなす類をいふ也。鷲鳥などの小兒を掬み去る杯は云ふも更なり、凡て人家に不祥を導く悪鳥など世に多き物なり。其等の災即ち高津鳥の災なりとあり斯様な災を掃ふ事が、國家の大祭事であつたのであらうか。こんな意義に解してゐるから「大祓」は全く淺薄なものになつて畢る譯である。罪と災とは全体どう

いふ關係のものであらうか。高津鳥からその鳥等の罪惡を掃ふといふのでせうか。

第一義 地球上の高津鳥乃災。これは前の高津神の方は目に見えない作用の方を指して謂ふのであつて、高津鳥の方は全く目に見える風雨雷電等を始め物質的のものゝを指して謂つてゐるのであります。また高津神の方は威壓を受け意義の損傷をいふのに對し、高津鳥の方は寧ろ地球の活動力を奪ひ去られる意義を保つてゐる所に相違があるのである。

第二義 人類社會の高津鳥乃災。これは上のものが下の者を虐げて金穀始めを高く取り立てる罪惡である。例せば地主が小作に對して不當なる年貢を納めさせ、家主が借家人を苦しめ、會社即ち資本主が労働者から餘計な労働を強るが如きをいふのである。鳥は取に通ず、昔は過酷な年貢米を人民から收めさせた横暴な國主もあつたのである。現今では高利を負ふ所の多數な罪惡者が居るのである。怪鳥とは斯かる人々を謂ふのである。猛禽も怪鳥も今日の社會には多いのである。鷲や鷹は動物園の金網の中に監禁されてゐる今日では斯様なものは掃ふ必要はな

い。それよりも人類界の怪鳥を速に驅逐するの必要が多大である。

**第三義** 己人の上に於ける高津鳥乃災。これは貪慾罪をいふのである。貪慾といふ事は社會の圓滑平和を害する根本であるのである。高津鳥の災は己人としても社會としても深き罪惡の根を保ち而してそれが却つて世を害ひ、自己を害する因となることは恐ろしい事ではないか。

**畜仆志** 古來の解釋は飼物を斃すといふ説が、普通で、祝詞講義には牛馬を殺して邪神に淫祀することとなりとあり、又或説に鬼蛙魍魎の類、人家の畜を忽に病斃せしめる事あり。土俗これを牛馬の疫神といふとあり。

**第一義** 地球に於ける畜仆志。これは地球の内部又は外部に起れる種々の原因により棲息して居る生物を自然に斃れしむる事であつて、現今絶種したる動物、植物等の化石となりて現はるもの多し。生物學上では退化の法則乃至自然淘汰等稱せられてゐるが、何故自然淘汰といふ事が行はれてゐるかの根本原理に至つては不明である。この現象が畜仆志といふ一つの事件である。

**第二義** 人類に於ける畜仆志。これには種々の義があつて、第一は飼物としてゐる牛馬鶏、豚等の類を周圍の環境——例せば空気を腐敗せしむるとか、不潔にして置くとか直接に刃等を以て殺すのでなくて自然に斃れしむる仕方である。第二は

けものところのあるのを自己の所有してゐるものと見るので、それは牛馬に限らず、犬猫に限らず、或は衣服にしろ、器物にしろ、生活に窮する爲めに金錢にて賣拂ふことをいふのである。一口に謂へば、自己の所有物とは言ふ條犠牲に供した譯である。自己の爲めに他の物を犠牲にする事が一種の罪惡となるのである。第三は忿怒の餘り猛獸の如く哮り狂つて他と格闘したり、喧嘩口論して、理不盡に他に迫害を加へる事である、この時の意義は所謂人而獸心で獸の如くなつて他を斃すといふ意義となるのである。また奴婢の類を慘酷に使用して健康を損せしめ乃至死に到らしめるの類にも畜仆志の意義が通するのである。工場に於て工女等の虐待されて健康を損じ終に死に到らしむる等にも、この意義は通するのである。人を使役するのに殆ど獸類を使役するが如き心持ちでやつてゐるのが、この部類の

けものたほしである。

**第三義** 個人の上に於ける畜仆志ちやくふくし。これは自己の身体からだの各器官機能等に對して恰も飼獸を逆遇する如くして健康を害し、終に死に到らしむるの類をいふのである。忿怒の如き、身体に及ぼす害の如きは計數以上といふ學者もある位である。こんなことを平氣に行ふものが世間には随分多いのである。また餘りに自分を可愛がつて多食多飲して却つて健康を害するものもこの類である。自然の機能を害して省みないものをいふ。

**蟲物爲罪** 古來の解釋は呪咀をなした罪といふ意。蟲物とは妖しき術にて人を呪ひ詛ひて害を加ふる事なり。大赦詞後釋に蟲は萬自物ばんじぶつあり。まじなひ物の意にて人をのろひ詛ふとて構ふるわざなり中昔の書どもにも此まじわむの事をりく見えたり上代より有し事なるべし。からぶみにも蟲物爲罪の毒多く見えて、その造方なごをもしるせり。まじ物の罪といはずしてこれにのみ爲といふ事を加へていへる故はたゞまじ物の罪とのみにては人にまじ物せられたるも災にて罪なるにまがふが

故なり。さて畜仆志とこれを一類にして、此二つは上なる姦の類とは、罪のさま異なるが故に中間に災の類の罪をへだて、こゝには擧たるなり云々。

**第一義** 地球に於ける蟲物爲罪。これは地球の内部又は外部の作用によりて、人知によりて解せられざる災天起りて生物を害し、若くは病ましめ、若くは惱ましむ事のあるのをいふので、地神の惡戯若くは呪詛等より起るものである。日蓮の立正安國論中に擧げたる數々の地天はこの中に入るものが多い。

**第二義** 人間に於ける蟲物爲罪。これは矢張種々の意義があつて、第一、人を呪詛して害を(肉体上)與へ乃至終に死に到らしめるの罪惡である。禁厭怪しき祈禱の類も同様である。現今種々の△△術、△△法等稱して他人を害するものは、皆同類である。第二は廣義の蟲物であつて、詐偽的の行爲を爲すものが、全部この中に入るのである、人の眼を眩まして惡事を爲すものはこの部類に入るのである。迷信的の事柄を流布して、人の天與の本心を蟲物するもの、如きは、最も憎むべき罪惡である。社會を蠱毒する一切の行爲は矢張この部類に入るものである。政

治、宗教、實業等の上に正ならざる手段方法を講じ（精神的にも）、物質的に社會を害してゐる事柄は随分多い事であらうと思ふ。蠱物の競争といつた觀さへある現代は眞に禍なるかなである。

**第三義** 自己の身の上に於ける蠱物爲罪。自己が自己を呪ふといふ事がある。或は父母を呪ひ、祖先を呪ふ等は皆廣義に於ける自己呪詛である。迷信的の行爲をなしてゐるのは、己が己を蠱物してゐると謂つてよいのである、自らを欺くもの世間に眞に多い。

蠱物爲罪といふ事は廣義の意味では他を欺く所の罪が一切これに這入るのである。妄語、綺語、惡口、兩舌、乃至日常毫も我々の怪しと思つて居ない程、聽き慣れてゐる反語、隱蔽、不實、虚飾等これ皆な一種の蠱物爲罪である。

馴も舌に及ばず、衆口金を煉かすのである。口より入るものは體內を通つて剛に落ちますけれども、口より出づる者は人を穢し、世を害し、身を焼き殺す。心の内と口語とが一致しない言行不一致の人々等も皆な悉く、まじ物の類であります。

す。この罪惡は「口は禍の元」なる格言そのまゝの怖るべきものであります。

### 第九節 三大神事

如此出波。天津宮事以氏。大中臣天津金木乎本打切末打斷氏。千座置座爾置足波志氏。天津管曾乎。本刈斷末刈切氏八針爾取辟氏。天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮。

【解釋】如此出波。斯様に罪が出でたならばの意、天津宮事以氏。天津宮事とはタカアマハラの大宮の神事の儘の行事を以つての意。天照大御神の朝廷にて行はせ玉ふ儀式にならひて、その如く行ひ玉ふといふことである。天津宮事を地上の政事にうつすのが地上に於ける唯一の朝廷の御行事であらせらるゝのである。天上の儀に則りて罪惡の掃去に向へこの義である。大中臣。神と君との間に係はつて神の儀を君に、君の御事を神に奏請する中つ臣の義である。大とは其位の尊くし

て神事に關する聖職なるが故である。天津金木乎。後に述ぶ。本打切末打斷氏千座置座爾置足波志氏。これは天津金木の製作上の事と排列や運轉變化を謂ふ、後に述ぶ。天津管會乎。に述ぶ。本刈斷末刈切氏八針爾取辟氏。これは天津管會の製作法並に其の使用法である。天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮。これは「大祓」の根本宣言である。後に述ぶ。

【大要】前節に述べた如き罪惡が發生したから、茲に高天原界は混亂に墜つたのであります。これを如何にして潔齋したら、宜いかといふ事が本節の大要であります。これは申す迄もなく、天孫尊の降臨の本義に照らして、その實を明瞭にすることより外ないのであります。それ故に天津宮事以氏とある事に留意せねばならぬ。然らば天津宮事とは一体、如何なる行事であるかといふ事であります。これに就ては、古來、種々解釋がありますけれども、未だ明快なる解義を見ません。それ故に「大祓」の眞儀は闇から闇に葬られて、僅かに鸚鵡傳へに祝詞を傳承する有様ですから、まして其の威力を發揮するが如き事のないのは當然であるとい

ふは誠に、神國たる我が國の悲しむべき事でありませう。斯様な始末であるから、「大祓」の内容も全く解されないで、今日神職諸公の奏上する「大祓」の詞には天津罪國津罪の箇條を省畧してゐるが如きは、益々「大祓」の實義から遠かりつゝある次第です。然るに、天運循環、夫々専門學の研鑽によつて、古來不明であつた天津宮事の神事が明瞭するに至つたのであります。即ち天津金木、天津管會、天津祝詞の太祝詞の三大神事そのものが天上に於ける宮事であつた意が明確になつたのであります。この三大事による神事を行つたら、茲に初めて「大祓」の威力を發揮することが能き事となつたのです。今よりこの三大神事について大要のみ述べて詳細は夫々の專攻を俟つ次第である。

天津金木 關して古來の解説にては天つ握細木といふ意に解してゐる。金木の金は借字にて、つかかなぎ(倍)の略語なりとしてゐる。祝詞考に天津とは其本天つ神事なれば崇みていへり。金木は齋明紀に兵書前後以倍戰とあるは、若木を棒としたりにて、握之木といふ意なり。大きならで、手に取るばかりなる木のよしなり。

以てつかなぎのつを略きて、かなぎといふ。大祓詞新釋に又思ふに、つかは握にあらずして束ね木のねのなによりに轉りいふにて千坐置坐を作らむと細木を集めよせ本末切り調ふるを本云々末云々といひ綴ぐるにもあるべし。

以上はト代に於て、罪惡の解除には罪人より贖物を出さしめて、それを神前に積み重ねて祓を爲したので、その罪人の贖物を載せる臺を作るために若木を要したといふ意義にしたものである。故に千坐置坐の解なども其細木を机の形に組み合はして、其上に贖物を載すとしてゐる。大祓詞後釋に曰く、祝詞考に置座は、加奈伎なり。木工寮式の八座置四座置、條に以木爲之。長者二尺四寸、短者一尺二寸。各以三八枚爲束名、稱三八座置、長短各以四枚爲束名、稱四座置。とあるは其ころは割木を用ひたるが上代は若木を用ひしが故にかなぎといへり云々なぞ申してゐる。

斯様な若木で机様の臺を作つて其上へ罪人の贖物を満載して神事を行ふといふ事が果して、

一、神代に於ける天岩戸前の神事の木義であらうか。

二、斯様な事をすれば、何故天津神は大歡喜して、天岩戸を押し開き、國つ神も大歡喜して高山短山に登つて天下泰平を謳歌せらるゝか。

が頗る不審に堪へないのであります。天津金木は決して机や台の如きものでなくて畏れ多くも「伊勢の大神宮」の心御柱の御象を貳千五百分にした一つでありまして四分角二寸の檜で造つてあります。而してその柱に「色彩」が施し「目點」が施してございます、この天津金木が天岩戸前の神事に際して作られました八尺瓊勾、始め八咫鏡、白丹寸手青丹寸手等其他一切の神物を作り組み立て得べき本質を具備してゐまして、其の組み立てによりまして、神への幣物を作るのであります。

全体天岩戸前の幣物は其本質は何んであつたかご申せば、

- 一、高天原の全象を表現すべき高天原表現の代表物
- 二、高天原の内部の全神性を表現すべき高天原神性の縮圖
- 三、高天原の神律循環を表現して萬事の障礙を解除すべき至嚴代表物

等であつたのである。斯様な偉大なる縮圖代表物が何等の意義を現はすかと思せば

一、高天原表現の代表を直観すれば、高天原の真相が顯示されて一切の過誤や、  
障碍が忽ち雲散霧消するのである。

二、高天原神性の縮圖を直観すれば、天津神國津神の神致が顯示され、神性が明  
確となつて、天神地祇の眞性が自由に伸展されて、歡喜の踊躍を見るのであ  
る。

三、高天原の神律循環を直観すれば、障碍の本來の根因を明白にして至嚴の利劍  
が忽ち一切の罪障を解き拂ふのである。

斯様な意義で、神への幣物は至大の意義を有してゐますが、その幣物を作成し得  
る本質を具備してゐるものが「天津金木」であるのである。故に「天津金木を本打  
ち切り末打ち断ちて千坐置坐に置足はして」といふ神事は太刀玉命の非常に重大  
なる任務でありまして、其の効果は

天津神は天の磐門を押披きて天の八重雲を伊頭の千別に千別て所聞食む。

國津神は高山の末短山の末に上坐して、高山の伊穗理、短山の伊穗理を撥別て所  
聞食む。

の事實的の御發動となるのである。古事記の天岩戸前の神事に於て、

吾が隠り坐によりて天原自ら聞く亦葦原の中國も皆聞けむと思ふを、何ぞ天宇  
受賣の樂をなし亦八百萬神もろく笑ふぞとのり玉ひき。爾ち天宇受賣 汝が  
命に優りて 貴神坐すが故に、歡喜咲樂ぶと白し玉ひき。如此言す間に天兒屋  
命布刀玉命其の鏡を指出で、天照大神神に見せまつる時、天照大神神、愈、奇し  
と思はして稍戸より出で、臨坐すの時、

とあるが、其の鏡をさせ奉る事によつて、何故天照大神神はあやしと思召したであ  
らうか。その鏡に我が姿のうつりましたのを見ての事であつたと申されてゐる――  
がこの鏡こそは高天原の全象を表示する所の神物であつた。――からの事でありま  
す。况んや地上のものつれを正す「大祓」に於ておやの大儀に當りて、天津金木の行  
事そのものたるや、祓の神具たる机や台の材料のみでは意味をなさんのである。高

●天原の眞象を地上に移す神具でなくんば、何んとして神々の大歡喜があらう。斯様な事柄から深く考へを廻らされたならば、いかに天津金木を以て組み立つる所の代表物が偉大尊貴なものであるかを知る事が出来るのであります。○「天津金木」の行事は祝詞の文では大中臣の行事に見えてゐますが、これは全く太玉命の御子孫たる忌部氏の行事に属するのであります。○「天津金木」に關する事柄を述べますれば本冊子の數倍を以てしても尙、説き盡せないのである。○「天津金木」のみの講義に讓る事にして、たゞ「天津金木學」の體系のみ述べますと、

第一門 天津金木の本質。

第二門 天津金木の結合排列。

第三門 天津金木の運轉變化。

第四門 天津金木の活現體驗。

の四大門に分れてゐる事。その中天津金木の本質としては、

「伊勢大神宮の心御柱の御象を二千五百分した一つであつて四分角二寸の小さい

柱です」

これがタカアマハラの一切の形象を顯示する所の神具であること。天津金木によつて、初めて皇典古事記を解することが出来る偉大なる神具であること等且に申上げ

て、特志な諸氏の研究を促して置きます。次に、

天津菅會 古來の解説では、天の菅緒といふ意。○菅會のそはをの轉なりとしてゐる。古への祓には割たる菅を手に取りつて塵などを拂ふが如きわざとせしなり。

菅を須氣といふは穢を拂ひ放る故の名なり。○菅會は菅を割て緒の如く爲したり。故に菅會といふ。後には菅の緒の代りに麻の緒を用ひることとなりたるものと見ゆ。

龜相記に上古用菅今用麻とあるを以ても知るべし、菅の葉を細かく割きて穢を去るに用ゐたりといふ説は、彼の佛僧の用ふる拂子の如き意義に解すべきか。菅を用ひたる理由はいかゞ、

天岩戸前には、白丹寸手、青丹寸手が必要とされてゐる。○菅會はそれに當るか、

菅の拂子を打ち据れば、何故に穢の去るや。况んや罪惡の消滅があらうか。物質上



の塵埃は、力の及んだ範圍は清潔にならうが、國の「大祓」にはそれしきの形式は  
何の要も爲さぬ譯である。

天津菅曾の菅曾はすかを見れば悪しからず、されど菅といふは長くて眞直ぐなる  
者にいふ意であつて、この菅曾は高天原の眞相を傳へ來るといふいとも長い／＼電  
線である譯であります。故に本刈り斷ち未刈り切りて、手頃の扱ひとするのである  
菅曾は單に菅の葉に限りません。長い直伸の植物の莖を用ひればよいのです。神事  
には著(メドハギ)を用ひるのが例になつてゐる。菅曾の神事は

一、高天原の現状を神前に寫し傳へ來ること、恰も電線が電信を傳へるが如き作  
用をなし。

二、高天原の現状が天津金木によつて構成された高天原の眞相に對比せられて、  
その障害過誤を直觀し、之を神直しに直し正すの作用。

を爲すのが本義であります。これは

天岩戸前で天兒屋命 太刀玉命が天香山之眞男鹿之肩を抜き。

天香山之天波々迦を取りて占へ麻迦那波しめて、

とあるの行事であつて、卜部の神祇官の行事に屬するのである。

この神事は高天原の現状を其儘に傳へて、而してその過誤を正す所の神術であつて

精しい事は「天津菅曾學」の専門に譲らねばなりません。次に

天津祝詞乃太祝詞 此義については日本言靈學を述べる必要がありません。日本言靈

學は「天津金木學」「天津菅曾學」と共に皇典に於ける三大學であつて、コトバを本

位として專攻する學問であります。宇宙萬有の發動の至元をコトバと見るのである

神のコトバが宇宙萬有一切發現の至元とするのである。基督教新約全書約翰傳首章

に「太始にコトバあり。コトバは神と偕に在り。コトバ即ち神なり。このコトバは

太始に神と共に在り。萬物これに由つて造らる。造られたる者に一として之に由ら

で造られしは無し。之に生あり。此生は人の光なり。光は暗に照り、暗は之を曉ら

ざりき云々」と謂つてゐる。これはコトバが即ち神であるといふ主張である。印度

の「梵天説」では梵天が口を開いてコトバを發する事に由つて、萬有は發現すると

説いて居り、「眞言密教」では、其の大本尊の「大日如來」を「阿字大日」と呼び、コトバの解説が直に教義そのものを組織完成してゐるので、最も徹底したコトバ教と謂ふべきである。「眞言」といふ名稱もそれから出てゐるのである。佛敎では密敎は勿論顯敎に於ても、音韻の事は非常にやかましく謂つてゐる所で、涅槃經には十四音を説き、「文珠問敎」「智度論」「大莊嚴經」「華嚴經」等音韻を説いてゐるものは頗る多いのである。「觀世音菩薩」「妙音菩薩」「威音王佛」等の如き「音」字の着く佛菩薩等は、全く其佛業がコトバを本位とする所に幽玄の秘義があり、諸種の「呪文」「陀羅尼」等が深遠なる密義を保つ等も亦コトバが本基を爲すのである。天台大師は「經」の一字を釋して「一切衆生之語言音聲を經と云ふ」と謂つてゐる。埃俟の太古の神話の中にも、大神がコトバを發して萬有を出生する事が傳へられてゐる。斯様に世界各國に、神が萬有を出生する至元の形式をコトバであると解してゐるものは頗る多いのであるが、我が皇典の上に於てもコトバ即ちミコトを以て、神の發動形式の本源としてゐるのである。勿論コトバといふのは意志發表の方式であつ

て、廣義のコトバは單に音聲のみではなくて、一切の發現方式を總稱してコトバと謂ふのである。皇典のコトバ即ちミコト(御言)の意義は、神の發動御自體を其儘に傳へた所の極めて深刻なるものであつて、之を言語音聲と見て専門的に研鑽する皇學が「日本言靈學」であるのであります。之を動作容儀活動等と見て研鑽する皇學が、前に述べた「天津金木學」であります。又之を靈動精神作用等と見て、研鑽する皇學が「天津管會學」といふのであります。而してこの三皇學は其實一體のものであるから一皇學を研究するには、必ず相聯關して三皇學を兼修せねばならぬ事である。「大祓」の大儀「天津宮事」の神事を取行ふに當りても、三大神事を麗々しく掲げてある所以であります。

扱て「日本言靈學」から見たるタカアマハラは言葉の海であります。音樂界即高天原であるのである。音聲の旋律が高天原の神律神則であります。天津祝詞とは、タカアマハラ(即言葉の海)のミコト(即言葉)の旋律を申したのであります。この大オーケストラを精く研究して本體、旋律、音樂等を知悉する所に「日本言靈學」

があるのです。これ即ち三節に述べたる皇孫の御天職たる三大神則「天皇」「天法」「天治」の顯示となるのである。委くは拙著萬世一系論に述ぶ。

而して天津祝詞の中に特に「太祝詞」と申す事柄があるのである。これは高天原の天則神律中の最大なるものであつて、一切がこの太祝詞を根本として行動し行くのでありまして、高天原の大々的憲章であります。

従來の學者はこの太祝詞に關しては、苦心を極めて研究したのであります。さもあるべき事でありませう。而して其研究した結果は何れも不確實に終りました。その中で最も多數の承認を経てゐるらしいものは、禊祓の祝詞に世にいふ天津祝詞であるといふ事になつてゐます。

掛麻久母畏伎伊弉諾大神筑紫乃日向乃橘小戸阿波岐原爾御禊祓給比志時爾生坐世留祓戸大神等諸賀過犯世留罪穢有良牟乎婆祓給比清給閉登申須事手聞食世登恐美恐美母白須

と申すのである。この禊祓詞も大層大切な事柄であつて、橘小戸の標原の禊祓を

天津金木の上で拜知すれば、罪穢れの根本方式が明瞭致しまするが、それは方式であつて根本宣言ではありません。精しくは専門の研究に譲ることに致します。

しかしこの禊祓詞は高天原の大憲章としては如何でせう。申す迄もなく、皇典の行事として「天津金木」に於て根本方式は完成してゐるのであります。此上にはたゞ根本宣言を要するのみである。

此点から見ても、古來の學者は「大祓祝詞の本義」を解せなかつた證據が歴然してゐます。たゞ六人部是香が平田門から出て「天津祝詞の太祝詞事を宣れ」の次には必ず天壤無窮の神勅が嚴乎として存在してゐねばならぬのであつて、これ懸隔する習慣であると言つてゐるのは、確かに珍らしい卓見である。自分は敬服してゐる予が師も亦天壤無窮の神勅なりと論せられてゐる。本書が此所に天津祝詞乃太祝詞の眞實義を掲げただけでも、本書は不朽の名を爲すべき程のものと思ひます。今此に謹んで天津祝詞の太祝詞を掲載致します。

葦原千五百秋之瑞穗國是 吾子孫 王之地也 宜爾皇孫 就而治焉 行矣。

寶祚之隆 當與天壤無窮者矣

この太祝詞は天祖天照大御神の御神勅であつて、これによつて

一、天皇權の嚴立が保證され

二、天法天治の義が明確にされ

三、高天原の大法が地上に尊嚴なる樹立を見たのである。

天上の儀と地上の儀との密接不離一体の大本義が現はれたのであります。

これ以外の太祝詞はありませぬ。これ以上の太祝詞はありませぬ。萬神、萬生、萬有の歸住する所が、全く定つてゐるのが、この太祝詞であります。この太祝詞は一切萬事の障害紛亂を靜溢するの根本となり、光となるのであります。この「神樂」はコトサヤグ騒音を靜まらしめて統一された大旋律に入らしむべき權威であります。

天津金木乎本打切末打斷氏千座置座爾置足波志氏とか又天津管曾乎本刈斷末刈切氏八針爾取辟氏云々の行事は夫々專攻學に渡ることでありますから、こゝには略す。

第十節

自如此久乃良波 至遺罪波不在止祓給比清給事乎

如此久乃良波。天津神波天磐門乎押披氏天之八重雲乎伊豆乃千別爾千別氏所聞食武國津神波高山之末短山之末爾上坐。高山之伊穗理短山之伊穗理乎撥別氏所聞食武如此所聞食氏波。皇御孫之命乃朝廷乎始氏天下四方國爾波。罪止云布罪波不在止科戸之風乃天之八重雲乎吹放事之如久朝之御霧夕之御霧乎朝風夕風乃吹掃事之如久。大津邊爾居大船乎舳解放。艦解放乃大海原爾押放事之如久。彼方之繁木本乎燒鎌乃敏鎌以氏。打掃事之如久。遺罪波不在止祓給比清給事乎。

【解釋】如此久乃良波。斯様に宣つたならばの意。天津神波。靈系神を指す。天磐門。タカアマハラ本義の明瞭すること。國津神波。物質的体系神を指す。高山之末。短山之末。高山や、低い山をいふ。高山之伊穗理。短山之伊穗理。伊穗理は息登りの略で、雲や霧が高山、低山に登ること、皇御孫之命乃朝廷。こゝに朝廷とあるは、勿論今日いふ所の朝廷の意であるが、尙ほ、これには日本國即ち中心國(中央國)の全体を含ませて考へた方がよいのである。天下四方國。日本國內を始め天下四方即ち世界萬國。悉くの意。罪止云布罪波不在止。天津罪國津罪の双方を全部含蓄されてある意が明瞭になつてゐる。科戸之風。科戸のシナは息長の意であることは風神祭の祝詞で知られます通りで、シナは死なず(不死)の義である。長生に榮ゆる族が科戸である。勿論地上を吹く風も永遠性でありませうが、その吹く風を比喻にして長生の族即ち御皇族方を申したのである。科戸の風以下の四つの比喻詞には

一、科戸之風は(天)に屬し

二、朝風夕風は(火)に屬し

三、大海原云々は(水)に屬し

四、燒鎌繁木云々は(地)に屬し

てゐるので、これが高天原の四大神族の四大潔齋と申すのであります。天は皇族方に屬し、火は大臣輔佐の大家に屬し、水は小臣地方官の族に屬し、地は一般臣民に屬してゐる。朝之御霧、夕之御霧以下大要に述べ。

【大要】三大神事を尊嚴に奉行し、而も、萬神、萬生、萬有の嚮ふべき天津祝詞の太祝詞を奏上ある上からは、いかに強く耳を劈くことよ。耳に響くことよ。眞に邪神も邪人も威な。悉く畏懼すべき感があるのであります。朗々たる太祝詞のいかに莊嚴にして其神韻の劉曉たる事よ。天津神は天磐門を押披いて天の八重雲を伊豆の千別に千別きて聞食して下さいます。暗黒の世界は乍ちにして光明の世界と化して「大祓」執行の眞眼目たる「安國」の理想郷が出現するのであります。出現したならば、爰に即ち、

- 一、安國の四條件が全く充分に具備され、
  - 二、天津罪、國津罪が悉く潔齋され、
  - 三、タカアマハラ本義が完全に行はれ、
- るのであります。萬神の序列が明に整理されて、一切が統一されるのであります。
- 一、神社(一切の宗教を含む)の整理。
  - 二、國土(世界)の整理。
  - 三、姓氏の整理。
  - 四、萬物の整理。
- が残らず成就して、寂光の樂土が斯の地上に出現します。この時に
- 一、仰げば高天原の光明が天に満ちて輝くを見ます。
  - 二、俯しては地上に天上の宮事と一切の行事とのマツリが行はれて、天地照應の光華を認めます。
  - 三、神人合一の大本義が如實に出現してゐる事を見ます。

國津神は物質本位でありまして、物質(肉体)は精神に應じて整理され、潔齋されま  
するが、これは比較的徐々に行はれて行くのであります。故に「大祓祝詞」では、  
後に至つて瀬織津姫以下の行事で最も明確にこれを説明したので、今の所では國津  
神はわざ／＼、高山の末や短山の末に登つたり高山の雲霧や障害の不純物を撥き別  
け、短山の霧や雜木等の不純物を撥き別けて、なるほど、耳を傾けて聞き玉ひ、勇  
猛なる勢を以て、其の整理に御着手になるのである。天津神の方は朝廷の中より  
爲し玉ふ發動で、國津神の方は地方の忠臣志士によつて爲さるゝ革正の仕方を示さ  
れたものである。明治維新も亦此くの如き順序であつたのであります。

天津神の方は、己に「安國」の條等で意義がよく明瞭してゐますが、國つ神の高山短  
山云々の方はこれまでの所では明瞭になつてゐないので、「大祓祝詞」は更に「科戸  
之風」以下を以て詳しく其内容を現はす事になつてゐるのであります、實に用意周  
到な事でありませう。

科戸の風云々は最高族の御力の威を示したもので、天の八重雲は前にもいふ通り

萬姓の序列を正しくして、其の紛亂のなきよう整理する事であります。「朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹掃ふ事の如く」とあるは、萬世の序列を正しくした基本の上に大臣輔佐の力を以て整然と潔齋して、高天原の本義を顯揚する事でありませう。朝の御霧、夕の御霧は政治上の紛れであります。それを火に屬する族の威力として、この條の一句を次の如く表はしたいと思ひます。

朝之御霧夕之御霧乎朝日夕日乃照晴事之如久

かうすれば、最もよく意義が現はれる事と思ひます。大臣輔佐家が朝日夕日であります。朝の御霧、夕の御霧は人心を朦朧たらしめ、國の光華を淡くするものであります。大臣輔佐家の明々白々のマツリゴトはこれを根本的に消散せしめるのであります。次に「大津邊に居る大船……云々」は水に屬する族即ち地方官や地方の有力者、朝廷の小臣等をして拘束されたる事業や一切の思想や種々の事柄の陋習を矯めしめて、所謂

舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。

の御誓文の誓旨を徹底さす事に當ります。

官武一途庶民に至るまで、各其志を遂げ人心をして倦まざらしめん事を要す。

この御誓文に當るのであります。

要するにこの四大比喻神詞は五條の御誓文となつて、明治維新には御發現になつたものであります。

廣く會議を起し、萬機公論に決すべし。

は前の朝風夕風の御霧の掃ひに當ります。

上下心を一にして盛に經綸を行ふべし。

知識を世界に求め大に皇基を振起すべし。

等は「大海原や敏鎌」の一條乃至全体の上に係つてゐるものであつて、これ即ち

タカアハラの本義。

タアマハラの本義。

カアマハラの本義。

に外ならぬのである。タカアマハラのアメシラス(天治)の大法であるのであります。次に「彼方の繁木本を焼鎌の敏鎌を以て打掃ふ事の如く」の一項であるが、これを申述べる前に、天火水地の四義について申述べて置く必要があります。

皇典には八百萬神があります。これは、一神を八百萬の神業から見た神観でありまして、詰る所皇親の個々相、個々業であります。故に八百萬神には各其神統があつて、個々神業は悉くその神統の本源に根ざして營み行はるのであるから、其の本源に遡れば、神業の種別も案外に少ないものである。今之を皇典の上に見れば、天、火、水、地の四神統に分類してある。即ち

キミの神業 (君) 統治の神業………(天)

オミの神業 (大臣) 統治、輔佐の神業………(火)

ヲミの神業 (小臣) 統治、普及の神業………(水)

タミの神業 (民) 統治、翼賛の神業………(地)

この中オミ、ヲミ、タミの神業が八百萬神業である。統治輔佐、統治普及、統治

翼賛といふも、これ其の位置職分を異にするのみの名稱であつて、要するに、キミの輔佐翼賛が、八百萬神業の唯一のものである。皇孫御降臨に陪従し給ひし、五件緒、八十件緒はこのオミ、ヲミ、タミの典型を示させ給ふたのであります。扱て「彼方の繁木が本を焼鎌の敏鎌もちて打掃ふ事の如く」はタミの神業であります。一般の人々の間に行はれてゐる種々の問題、例せば社會問題、思想問題等、現代の如きは實に繁きものがある。この繁き雑木の如き紛々たる幾多の問題は、焼鎌の敏鎌を以て解決すべきものであるといふのであります。カアマこれ鎌である。クサグサの事件を解決する敏鎌である。これ「草薙神劍」である。「草薙の神劍」はカアマの威力であつて、このカアマの威力は最後の解決として、高天原の威力である。天孫降臨に先ちて神問はしに問はし玉ひ、神掃ひに掃ひ玉ひしも、建御雷神の神劍即ちカアマの威力であつたのである。神武天皇の強敵の退治も、このカアマの威力であつたのである。日本武尊の勇武もこの神劍の威力であつたのである。カアマの神劍は一切難事の大解決をなす最後の偉力であるのです、科戸之風から此處まで



は比喩を以て潔齋の奥義を示されたもので、その文辭は流麗その意義は深遠であります。

科戸の風以下の四項の祝詞文は一見した所では一種の形容文の如く見えてゐますが前述の解釋で皇族以下の大々的御活動を示されたものである事が、よく知られた事と存じまするが、更にこの科戸の風以下の四項には、もう一つ事實の發現が伴ふものであるといふ事を申して置きたいと思ひます。

それは「大祓」の神事の奏せらるゝと同時に世界中に大神風が起つて、地上の穢れたものを吹き拂ふといふ事實がある事です、これは龍田の風神の神誓であるので

科戸の風以下は國つ神の御行事でありますから、一切が具象的現實的であります風が吹くといふ事が人間文化に至大の關係のある事は、文化史上の重要な題目であります。故に「大祓」神事の果して感應の實ありや否やを検するものも、この事實上の事柄を以て立證するのである。私は想像説を述べたり、私説を吐いて人を驚か

したり世を惑はす事を決して致さないのであります。今古史にその立證を掲げませう。仲哀天皇の條に(古事記)大祓の神事のあつた事は前に申して置きました、その時に如何なる結果が出現したのでありませうか。

故 備 如 教 覺 整 軍 雙 船 度 幸 之 時 (中略) 爾 順 風 大 起 御 船 從 浪 故 其 船 之 波 瀾 ……云々。

何たる偉大なる事柄でありませうか。順風であつて、しかも新羅の國の半にまで波瀾を及ぼすとは驚くべき風ではありませんか。而してこの事件の中には

「大津邊に居る大船を舳解き放ち、艦解き放ちて大海原に押放つ事の如く」

の事實も伴ひ起つてゐるので、一層貴き事件であるのである。勿論神宮皇后の三韓征伐の際には古事記の傳ふる如く、底筒之男、中筒之男、上筒之男の墨江の三柱大神の神力に基いたのであるが、己に「大祓」の行事を御決行になつた以上は、「大祓」の本義は必然に實現して來るのは當然であるのであります。

整 軍 雙 船 度 幸 之 時 海 原 之 魚 不 問 大 小 悉 負 三 其 船 而 渡 (古事記)

の如きは水族の皇軍に對する忠誠の實現であつて、大祓の神事の結果が、海の方面に對して如何なる偉大の事實が實現するかを立證するものである。

空中に風が起つて人力の量り知れざる事柄が起り、海上にも亦海水の作用が、不可思議の現象を起し來るといふ事は、今日の學者の不同意を唱へる事柄には相違ないが、何事も空論では夜は明けません。後の日に識者と共にその實現の際に喜ぶより外はありません。

「彼方の繁木が本を燒鎌の敏鎌以て打掃ふ」

といふ事は大祓執行後の理想郷は漸次にこの地上が平坦になつて、恰も人間の身体や顔貌に醜陋な險惡の相が無くなる如く、險惡な山や谷や醜陋なる土地が無くなつて極めて秀麗な神苑の如き有様が出現するのであります。

法華經には

以三恒河沙等三千大千世界爲一佛土七寶爲地、地平、如掌。無有山陵谿澗溝壑。七寶台觀充滿其中。諸天宮殿近處虛空。人天交接、兩得相見。無諸無

道二云々(五百弟子受記品第八)

とあります、これは、皇典の意をよく誘證してゐます。

「語問ひし磐根樹立、草之垣葉をも語やめて、天の磐座放ち、天の八重雲を伊豆の千別に千別きて」

と「大祓祝詞」にあるのも、またこの土地の整理を意味する事を含んでゐて、法華經の文句がよくその意義を傳へてゐると言つてよろしい、またこの語問ひしには、口に發す言語が止んで、心と心とで談話する。つまり各國の國語が、全く根本的統一されて「心語」となるといふ事を申してあるのであります。此等は今日の都合餘りに空想に過ぎるものと見られるより外ありませんが、何事も皆な、事實の發現あるまでは、空想の語に葬らるゝのが人間界の常例であるのだから、今更鬼や角の議論は要さないのであります。

「大祓」の神事は事實立證の第一着の行事であります。何事も事實の立證を要します。次節は國つ神の地上整理の事實を述べてある。「大祓」の大儀を眞に奉行せねばなら

ぬ事を察して下さい。深く心を留めて研究して戴きたい。

第十一節

自高山之末短山之末與利至末句。

高山之末短山之末與利。佐久那太理爾落多支都速川能瀨坐  
 瀨織津比咩止云神。大海原爾持出奈武。如此持出波。荒鹽之  
 鹽乃八百道乃八鹽道乃鹽乃八百會爾座須。速開都比咩止云神  
 持可吞氏武如此久可吞氏波氣吹戶坐須氣吹戶主止云神。  
 根國底之國爾氣吹放氏武。如此久氣吹放氏波根國底之國爾坐  
 速佐須良比咩登云神。持佐須良比失氏牟。如此久失氏波。  
 天皇我朝廷爾仕奉留官官人等乎始氏。天下四方爾波自今日

始氏罪止云布罪波不在止。高天原爾耳振立聞物止。馬牽立氏今  
 年六月(十二月)晦日夕日之降乃大祓爾。祓給比。清給事乎  
 諸聞食止宣。四毛國卜部等大川道爾持退出氏。祓却止宣。

【解釋】佐久那太理。川水の山より落ちるさまをいふ。落多支都。落水が激して瀧  
 つ瀨を爲す谿谷の水の激流するさまである、この高山並に短山から水が激しい勢  
 で流れ落ちる際に、その中には、岩石の碎片や植物の葉や朽ちた木や枝や草や其  
 他動物の死体や一切のものを運んで來る事を忘れてはならぬ。速川能瀨坐。瀧の  
 落ちる所の激流即ち速川の瀨に神のます事。瀨織津比咩止云神。瀨織津比咩とい  
 ふ神力である。茲に比咩とあるは、神漏美系の神力であるからであつて、急流激  
 湍の力が即ち高所に在る物質を水の力を假りて、大海に持ち出すのである。これ  
 瀨織津比咩の神力である。織は機を織るの義で、水の有様が速瀨に織り爲してゐ

るのである。大海原爾持出奈武。大海原に水を持ち出すであらう。けれどもその水の中には、種々なる不純なものが混じてゐる事を忘れてはならぬ。如此持出往波。斯様に持ち出たならば、荒塩之塩乃八百道乃八道乃八道乃八道乃八百會爾座須。これは大海原の内部のさまである。海中には塩の八百道といふ複雑なる海水の道がある。そしてその複雑なる海水の道を、山から里から運搬された一切の不純物質が轉々として翻弄されつゝ、漂つて種々の複雑なる行程を辿つてゐるのが荒塩の塩の八百道の八道道の塩の八百道といふのである。速開都比咩止云神。速開都比咩は海の八百會を司り玉ふ神であつて、一切の不純なものを撰り好みもなく、何んでも大包容の力で呑み込む神力である。速開は迅速に開らき容れて包容するの義である。可々呑。カツカツと呑み込むことの容易に且つ偉大の義である。如此久。可呑氏波。斯様に速開都比咩の神が不純なものを海底に包容し盡くしたならばの意。氣吹戸坐須。氣吹戸といつて地球の内部の空虚なる所に通ずる海底の或る場所に大なる穴があつて、其處に坐すの意。氣吹戸主止云神。氣吹戸主といふ神

があつて、その神力でドロドロになつた海底の動植物始めの溶けた不純物が地球内部の空虚の所へ吹き込まれるのである。根國底之國。地球内部たる中心は空虚な風帯である。如此久氣吹放氏波。斯様に地球内部の空虚の風帯に吹き込めば根國底之國爾坐速佐須良比咩登云神持佐須良比失氏武。根の國底の國には速佐須良比咩といふ神ありて、之をさすらひ、ふるひ分けて、それをば、地球の夫々の適當な場所へ配分して處理するのである。そしてその各部へ配分されたものが漸次にまた上へ上へと持ち出されて或は噴火の爲め、或は地震或は自然の内部の作用で表面へ出て、地球の上面を飾り、再びまた山川の爲めに流されて海に入り、かくして永遠に新陳代謝して地球が生命を保持し、生物が榮え、而して物質界の一切が整へられて、平安に行くのである。速佐須良は速は敏速の神力佐須良は處理して配分の役をするの義である。この適所に適材を配分するは、最も複雑にして、微妙なる神力であるのである。山上より貝殻が出たり、或は石炭亞炭等の地中に在る理由、水成岩火成岩の由來噴火、地震等の由來が、これに伴ふ研究の

課題でありますが、今は略して説きません。地球の新陳代謝生命存続の由来は大体此の如しである。高天原爾耳振立開物止。何事も一切タカアマハラの本義に耳を振立て、聞くものである義。馬牽立氏。タカアマハラの本義に耳を振り立て聞き得るものならば、必ずこの秋に當つて、グヅ、ハはしてゐまい。出陣の用意に馬を牽き立て、勇み立つて大潔齋に赴くであらう。馬を牽き立て、勇猛に出發せよ。今年六月(十二月)晦日夕日之降乃大祓。今年六月の晦日の夕つ方の日の降の大祓にといふ意。夕日の降とは朝日の豊榮登に對へたる言である。祓給比清給事乎諸開食止宣。祓ひ給ひ清め玉ふ事を諸々の人々聞き給へと告ぐといふ意。此段を言ひ綴けたるときは、諸々の参列者は皆一同に、唯ど應ふのである。諸とははじめに集侍、親王、諸王……諸とある参列者全部の人々を指したのである。勿論である。宣は中臣が陛下の勅旨を宣り傳へるのである。四毛國と古本に在るが如く四「四國卜部」とあるに種々の議論があるが、これは四毛國と古本に在るが如く四方國四面國の義で、卜部は諸國より其道に堪能なる人を選抜して任命あるべき性

質のものである。大川道爾持退出氏。全國から召した卜部等が、大川道に持ち退り出てとあるも、諸國へ夫々退散して大祓の大義を夫々の地方に宣傳して、罪惡掃去の任務を盡くし、地方官等と協力して、惡思想の驅逐、根本教義の樹立宣揚に極力盡くし奉るのである。祓却止宣。大川道に持ち退り出で、祓ひ却る作法等はあれど、今はそれよりも先づ以て思想上の大祓が最大急務の時代であるのである。

〔大要〕本節の大意は宇宙萬有の新陳代謝を示してゐることである。右に説くが如く地球自體には、物質的に新陳代謝して、永久にその体容や其生命を存続してゐるのであります。天地人の中人も亦この地球と同一の有様で其體容の存続生命の持續を爲してゐるものであります。

「高山の末短山の末より佐久那太理に落多支都」の一段はこれ人が(動物も同様)食物を口で喰つてその嚙んだものを食道を通じて吞み下す業である。

「瀨織津比咩といふ神 海原に持ち出てなむ」

は大海原即ち胃の中へ持ち込むことである。胃の中に入れば、胃や腸を通じて、其所に非常なる消化力が働いて

「荒塩の塩の八百道の八塩道の塩の八百會」の有様である。

胃腸の中に働く速開都比咩は持ち可呑みて之を消化するのである。然る時はこの消化されたる乳糜は、血液に混じて心臓に入り、それより、

「氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神根の國底の國に氣吹放てむ」  
なる肺臓へ運んで肺臓から今度は再び心臓へ歸つて

「速須須長比咩神力」によつて身体全体に循環運行して行くのである。

而して身体各部の需要に應じて、適材を適所に配分して、身体の生長保全、生命の存続を新陳代謝させて行くのである。かくて人は健全を保持して行く事が出来るのである。この新陳代謝はタカアマハラに於ける「ハラ」旋轉である。この旋轉に運命が伴つて大天地にも小天地にも、大地球にも、大地球にも、國土の上にも、人類の上にも、個人

の上にも、發現する神律であります。この運命を精しく究めて行くのが、天津金木學の大なる研究の部分に屬するのであります。運命を解せねば宇宙は判らない。タカアマハラは運命界であるのであります。この運命を研究せねば、タカアマハラの本義に精通したと申されませんが、それは古事記なり天津金木、天津菅曾を特に研究したい熱烈な人には御教授を惜まないのであります。

尙ほ高山の末短山の末より佐久那太理に落たぎつ云々以下の本文は前に説く如く

第一「地球の内部外部に行はるゝ地文上の事件」

第二「人体の上に行はるゝ生理上の事件を解決してゐるの外國家經綸の上に於ける人事上の事件」

として解せねばならぬのは當然であります。けれどもこの事は詳細に説けば、政治經濟、宗教等の各種の方面を夫々説かねばなりません。今は大要を記すに止める事に致しませう。

國內に（廣くは世界中に）種々の議論が露々として起り、社會問題、何々問題と實

に紛亂を極める際に、その囂々たる議論を公開して大會議を開くのであります。これを佐久那太理に落たぎつ速川の瀬にます瀬織津比咩といふ神大海原に持ち出でなむと申すのです。大海原は大會議であります。而してこの會議で蹂みに蹂んで熾に議論を闘はすのであります。これが荒塩の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百會と申すのであります。この大會議の大討論の結果は終に一決して落ちつく所を見出し得るのであります。これ速開津比咩といふ神持ち可吞てむと申すのであります。然る時はその決議を奏上して天聽に達するのであります。これを氣吹戸に坐す氣吹戸主といふ神根の國底の國に氣吹放ちてむと申すのであります。斯様な有様となれば次に其の決議に基きて夫々の官々の人々に命じ玉ひて滿地にその宣傳を爲さしめ玉ふのである。これ「かく氣吹放ちては根の國底の國にます。速佐須良比咩といふ神持ち佐須良比失ひてむ」と申すのであります。かく失ひては天皇朝廷に仕へ奉る官々の人等を始めて、天下四方の國といふ國には今日より始めて罪といふ罪はあらじと申すのであります。

しかし、この大會議の根本裁決の信條といふもの、即ち律則がなくては議論は決してまとまるものではありません。爰に於てか、その種々の異説異論を統一して、大解決を直に下す程の準備と確信どがなくはならぬ。これが天津金木學、天津菅曾學の必要缺ぐべからざる所以であります。特に天津祝詞乃太祝詞の大權威がこの際に何事も決定する根抵となるのであります。故に「大祓」の後段即ち物質的大解決は前段に於ける天津神の大神事を待ち始めて始めて成就する事を決して忘れてはならないのである。天津神、國津神の神業神作が合致したる不離の行事たるのである。實に深遠なるは「大祓」の大儀であります。

### 第三章 大祓と現代

#### 第一節 現人神及び大日本國

皇孫尊 御直系の「歷代天皇」を現人神と申す事は、限身神身に在りました乍らも（第二章第四節「かみ」の説明参照）宇宙大本尊（皇典にては皇高天原命といふ之を略して又皇命とも云ふ）下この語を用ふの御變身として、皇命の一切の御徳を繼承し玉ふ現人の神なるが故である。天地の初めから、この御一系のみは聯綿として極東の靈地に、嚴として、天爾本來の儘に其皇統皇位の傳はりました事は、當然とは申す條、眞に偉大尊嚴なる御事であつたのである。盛時のまゝに傳はります事は比較的容易であるが、大變事に逢遭して、其の本義の毫も汚損なく傳はります事は、更に尊嚴の度を一層増す譯である。日本の歴史に於ても、戰國争鬪の闇黒時代があつた。此の闇黒時代に於ても、皇位の御尊嚴のみは縷々として保たれたのであつた。これ眞に天の試鍊が更に強く天位皇位の尊嚴を立證せしむるが如き感があつて、何

んども謂へぬ敬虔の情にうたるるのである。是に於てか皇命の御尊嚴なる御保証が極東日本の地に於て發現した以上、日本國には特殊の使命ある事が、更に更に証據立てらるのである。日本國は國土そのものが使命を負んでるのである。「大日本國の使命」とは何ぞや。夫は直に誰にも解せらるゝ左の二條件に外ならぬのである。

一、大日本國は皇命統治の大本義を先づ以て國民全般に確認し

二、皇命統治の大本義を更に世界全土に宣傳流布するの責務あること

これである。（皇命統治の大本義に就ては第二章第三節 皇親の條下及同第六節 安國の條下に於て既に述べて置いたから同所を今一度繰返へして讀んで下さい。一層大日本國の使命が明瞭に意識されるであらう。）

斯くて天爾本來の「皇命界」（タカアマハラ）が滿地に普及して、葦原瑞穂國が寂光莊嚴の天國と化するのである。神武天皇の御詔勅に曰く

上則答乾靈授國之徳 下則弘皇孫養正之心 然 後 兼三六合 以開都掩三  
八紘二而爲宇 不亦可一乎



と仰せ玉ふは如上の御意義と拜察さるのである。

### 第二節 かみながら道宣布は勅命

惟神の道は「大日本國の使命」を宣布する教法である。大日本教である。國教である。惟神の道は天地の初發から本來天爾に存在する教法であつて、一切の神々を始め人類は勿論一般生類山川草木に至るまで、一も漏るゝもの無く、この教法を遵守せなければならぬ定めである。即ち宇宙大本尊（天之御中主神）と八百萬神（萬神、萬生、萬有）との不離一体に基くその大本義を明瞭にした教法である。この教法は萬神、萬生、萬有が活現し作業すること、それ自体の根本神則を明示したのであつて、既に教法の本質に於て、若し之を遵守せなければ、それ自体の存立が根本に成立しない譯となるから、萬神、萬生、萬有とは如何にするも離れることの出来ない教法であるのです。しかし茲に惟神の道を遵守すべきものは、萬神、萬生、萬有と謂つたので、其の萬神とは日本に關係のある皇典上の諸神のみと解する人があ

るかも知れないが、惟神の範圍は、皇典の語で謂へば、所謂イヤヒロ（彌廣）であつて、時間の上に於ては三世を包容して其上に超越し、空間に於ては十方を包容して其上に超越するのでありまして、彼の佛法に謂ふ所の三世十方の諸佛諸菩薩も乃至十界の衆生一切も亦かみながらの中に包含されてゐるのです。若しも三世十方の諸佛が、眞の至道を説いたものならば、夫は必ず「惟神」の全部若くは一部であつたに相違ないので。何となれば天上天下三世十方を包容して、其上に超越たる「惟神」以外に道と名づくべきものなく、教法と稱すべきものは絶対に無い筈であるからです。若し「惟神」以外に教法あり「惟神」以外に道があるといふならば、夫は恐らく邪教邪道であるのであらう。その正邪曲直を甄別することも亦これ「惟神」の實は一神則に屬してゐるので「惟神」の明鏡に照らして之を明白に識別せねばならぬ次第であるのです。斯様な道理で佛教以外の諸宗教の神人と雖ども、何れも一として「惟神」遵守を外にするものなく、必ず眞の教法は「惟神」(大日本教)を述べ「惟神」(大日本教)を遵奉してゐるもののみであるといふ事になるのです。

是に於てか「惟神」の大義を説述するの、二面の手数を要する事となつてゐる。乃ち「惟神」は「惟神」を自己を解説すると同時に、更に現今世上に流布されてゐる佛教、基督教始めの諸教法に批判を加へて、一切の眞實の教法が、皆悉く「惟神」(大日本教)に歸一する、所以を明確にせなければならぬ次第であります。しかし、何れの宗教に於いても、長い歲月の間洗練に洗練を重ねて、現今に到つてゐるのであるから、其の整備されてゐる事は當然です。片々たる諸宗教は別として、大宗教として最も多数の信徒を有してゐる、大乘佛教、基督教等に於ては、其の本體論も業相、作用等の所説も一見頗る相似て居て、少し位の研究では、何れがどう、何れが斯うといふ判別も出来難い程であるのです。然るに今は更に耳新らしい大日本教即惟神が発現して、一切諸宗教を包容し且つ超越する所の統一を爲し、其の權威を立證すると謂つた所で、容易に耳に入り難いのは當然であらうと思ひますけれども、最も緻密に最も眞摯に本書を讀破さるゝ人々には、必ず大なる光明に導かれて、自然に比較眼も具はつて來て、惟神の獨特の華相に接觸し、充分に體得するに

到る事は信じて疑はざる次第である。

「惟神」の要旨は、天祖天照大御神の神勅に盡きてゐるのである。而して歴代天皇の勅命とし玉ふ所であります。孝徳天皇三年四月詔に曰く、

惟神我子 應治故寄 是以與天地之初 君臨之國也 自始治國皇祖之時 天下大固 都無彼此者也云々(日本書記)

とあります、やうに、天皇の御天職とし玉ふ所は「惟神之政」であつたのであります。これ惟神の内容であります。「惟神之政」とはよく判る語でいへば「政治宗教一體の政」といふ事である。明治三年正月の御詔勅にのたまはく、

朕恭 惟 天神天祖 立極垂統 列皇相承 繼之述之 祭政一致 億兆同心 治教明ニ于上 風俗美ニ于下 而 中古以降 時 有汚隆 道有顯晦 矣 今也 天運循環 百度維新、宣下明ニ治教ニ以 宣惟神之道也

とありますのも、これ祭政一致の御詔勅であつて、明に「惟神之政」と同一の主意であるのであります。祭政一致は億兆同心に其の基を置きたまふてゐるのであり

ます。億兆同心は又宗教統一にその基があるのではありません。宗教の信仰が一つにならざる限り、徹底的の「億兆同心は得られないのである。宗教の信仰と國民道德の信條とが一致せざる以上は「億兆同心」の根抵が確立せないのである。かるが故に明治天皇は 宜下 明治教一以宣惟神之道也とのたまはせ玉ふてある。治教とは政治宗教の事である。明治教とは祭政一致の本義を明確にすることでありませう。然り而して、惟神之道は億兆同心の實に達する唯一の教法であるが、果して、我が現今の心靈界に將た信仰界に、億兆同心の實がありませうか。御詔勅御下賜以降、此に幾十年になります、祭政一致の御聖旨は、萬民舉つて奉戴し奉つてゐるのでありませうか、實に恐懼の次第である。畏れ多い事ではありませんか。

各個の家々に奉安してある本尊を見るに、現今に於ては實に區々たるものであつて、更に佛教にしても、神道にしても、其の區々複雑なる事に驚かざるを得ない程である。この祭神祭佛の區々たるが如く我邦の信仰界は實に雑多な有様であつて、斯くて眞の億兆同心が望まらるべきものであらうか。感慨實に無量なるものがある。

億兆同心の根抵が斯く不安定なる事がやがて、思想紛乱の根本基礎をなしてゐる事を知らねばならぬのであります。現世の事は國王、未來の事は佛といふ思想では、到底根本的に徹底が得られるものではないのである。曰く何々教曰く何々主義、曰く何々道と喧囂を極め、群雄覇者の跋扈する間は、汚隆顯晦の巷に彷徨してゐるのであつて、「惟神の道」には遠いものと謂はねばならぬのである。

明治天皇の「祭政一致」「億兆同心」のたまはせ玉ふ政の意義たるや、大は國の政治より、小は家政個人に至るまでの廣義に解すべきであつて、上陛下が天祖皇神を祭し玉ふ如くに、各家々の本尊は亦國家の大本尊、宇宙の大本尊と相等しくして決して異つてはならないのである。即ち「皇高天原命」(宇宙大本尊)以外に本尊を崇める事は邪法であり、邪道であるのであります。

「皇高天原命」は「惟神」(大日本國教)の本尊であります。第二章第三節に天皇・天法・天治の三大神則を述べて置きましたが、この天皇は「皇高天原命」の御自體であります。而して、天法は「皇高天原命」の御内實と爲し玉ふタカアマハラ

法であつて、且つ天治の本因であります。この三大神則は三即一、一即三であつて「皇高天原命」の御名によく表現されてゐるのである。即ち「スメ」よりも「ミコト」よりも以上三大義を拜承することが出来るのであります。「スメ」には「見え」「統治」「潔齋」であり、「ミコト」にも「御言」「至尊」「詔命」の義がある（この言葉の解は本節末尾に載す）。「見え御言」と申上げる時は憲法第三條に「天皇ハ神聖ニシテ犯スベカラズ」とある天皇の御本質を顯示するのである。次に「統治至尊」と呼ぶ時は、聖職と爲し玉ふ御統治の至尊を顯示したる天皇を申上げることになります。更に「潔齋詔命」と申上げる時は、天皇の御陵威の程を仰ぐ御名であります。歴代の天皇は、宇宙大天皇たる「皇高天原命」の御變身にましまして、天皇・天治・天法の三大神則を繼承されてゐるのであります。かるが故に皇位は萬世一系たるのである。天壤無窮たるのであります。「惟神」に於ては、この天壤無窮の所以を廣宣流布して、地上に安國、足國、心安國を實現せしめるのであつて、佛敎の如くキリスト敎の如く且に教法のみの脈統を宣布するにあらずして、實に大教法にそのまゝ活

たる血脈の流るゝ活人の脈統を兼ね具へて宣揚するのであります、これ即ち「天孫御降臨」の大本義であつて、

皇位の御繼承なるが故に、直にこれ皇命御自體の統治の主にて在するのである。脈統の御繼承なるが故に、直にこれ皇命御自體の萬衆の親にて在するのである。教法の御繼承なるが故に、直にこれ皇命御自體の萬衆の師にて在するのである。この主師親の三大威徳を直に繼承して「惟神」流布の全責任を保證し給ふ上に、「三種の神器」の御授受が行はれてゐるのである。故に「惟神」の宣布は「皇命」の御直系なる「現人神」大日本國天皇の御天職であらせらるゝ事を拜承すべきである。「現人神」は勅命を以て「惟神」の宣布を令し給ふのであります。されば我國民は速に自覺し、聖旨のある所を深く拜戴し、天爾本來の大義に殉せねばならぬのであります。

【註】（一）スメは「見え」である。○とは宇宙の本体即ち實在を呼ぶ言葉である。其文字は言靈學上の水莖文字である。○は實在。メは見え即ち現象である。現象即

實在なるをスメと申すのである。皇典にては「天之御中主神」は○で、「見え」はタカアマハラである。○「天之御中主神」の全表現を直観してスメと申すのである。○「天之御中主神」以外に皇は無いのである。

(二)スメはまた「統治」の義である。○「見え」の統治なるが故に絶対統治である。絶対統治権を保有し給ふが故にスメは即ち「天皇」であらせられる。天皇をスメラミコトと申すのは絶対統治の御主体と申す義である。○「見え」なるが故に絶対統治が保證され、絶対統治を保有するが爲めには、必ず「見え」(皇)たる事を要するのである。

(三)スメはまた「澄め」の義である。「本來相の清純を發現せよ」との義である。本來相とは、本來あるべき清純なる有るが儘の相である。不純汚濁の外皮を悉く脱剝して「無垢清淨」に歸つた所が本來相である。本來相に復現せよと命じ給ふのがスメである。絶対統治の命令であるから、至高最尊の詔命である、このスメ詔命は「天皇」のみの保有し給ふ所のものである。

(一)ミコトは御言である。宇宙萬有の發動の至元は御言即ちコトバである。詳細は天津祝詞の太祝詞(第一二二頁参照)

(二)ミコトの第二の義は「至尊」である。「日本書紀」等にはミコトの音に「尊」字を當てゝゐる。この尊字を充てた所が、自らミコトの意義に合致してゐるのであつて、スメラミコトは統べる御方の義である。特殊の方といふ意義でミコトと申すのである。皇高天原命は最高至尊の御位に在しますが故に、この時のミコトを「至尊」の文字を充て、明瞭に爲し置くのである。ミコトの漢字に「至尊」と充てたる場合は必ず「皇」命たる事をよく知つて置くべきである。至尊は即ち天皇であらせらる。

(三)ミコトの第三の意義は「命」の漢字が矢張り之をよく現はしてゐるのである。このミコトはミコトノリと申す時の「詔命」或は「勅命」の意義を現はしてゐる。

第三節 かみながらの道と大祓

天祖の皇孫を斯の國に降し玉ふや宣はく、

豊葦原の瑞穂國は是吾子孫の君たるべき所なり。宜しく爾し、皇孫、就いて治せ寶祚の隆えまさまむこと、當に天壤と窮り無かるべし。

と。是れ天津日嗣の天壤無窮を保證し玉へる大神勅でありまして、皇位の尊嚴、統治の大君大磐石の如く定まつてゐるのであります。肇國樹德皆な此の大神勅に發せざるはなしで、其の御精神を充分に拜讀致しますれば、我國體の眞髓は至れり盡せりで、何等疑ふ餘地はありません。これほど明白な御言葉はないのであります。然るに近時、我國體に就て、兎角の忌はしき言動を發し、惡思想に惑溺するもの多きが如きは、實に慨嘆に堪へざるのであります。

概して現代教育を蒙けた知識階級の部類に多きを見るので、これ教育の一大缺陷といはざるを得ず。斯くの如きは、現代教育家が一齊に、我國體の萬世一系他國に冠絶したる國體美を説くと雖も、その何が故に然るかを説かず、肝腎の我が神代史

の如きは、僅に一二時間に之を説き去るが如き有様であつて、充分に徹底したる教育を施してないからである。されば識者といふも我國體の眞髓を解するもの稀であつて、法律によつて之を取締るが如きは、我國體に汚點をつけるものといはねばならぬ。もとより神代史は、充分に徹底したる學問智識を以て、之れが専攻に俟たねばなりません。今日の如く、未熟にして不徹底なる學問、智識、特に己が智識を鼻にかけ、高慢の心あるもの多き現代人には、到底神典の秘事など解せしむるといふ事は、容易に望まれないかも知れぬが、而し、建國の大神勅位は何を措いても充分に徹底せしめて置く要が存するのであります。

この大神勅を徹底せしめんとせば、是非とも天祖天照大御神の御神徳を申上げる要があるのであります。これを述べる丈でも優に百頁以上を費しますから、遺憾ながら別著萬世一系論に譲ります。委は同書によつて徹底を期して戴きたい。

天祖天照大御神は、カクリミ(隱身)神身なる天之御中主神が、カ、リミ(懸身)神身に變身したまひたる御當躰に在し、更に皇孫は、天照大御神なる懸身神身が

皇太子正哉吾勝勝速日天之忍穗耳尊のカケリミ(駈身)神身を措て、カギリミ(限身)神身に御變身遊ばしたのである。(「かみ第四四頁參照)夫れ故に皇孫瓊杵尊には、遡つては天之御中主神より下つては歴代天皇を御包含して在す、即ち三世に一貫したる脈統を保持遊ばしてゐるのでありますから、宇宙大天皇の權化にまします。随つて十方に輝く御當體にまします。されば皇孫の御降臨は地球全体を本位として宇宙大天皇の御統治を説き奉るので、之を別な言葉で解説すれば、皇孫瓊々杵尊は宇宙大天皇の縮圖にましますので、譬へば天之御中主神に於ては、宇宙なる大圓を説き、天照大御神、天之忍穗耳尊、皇孫瓊々杵尊と次第々々に縮少して、小圓を説き來るので、地球といふ小圓に宇宙大天皇を見たのが、瓊々杵尊並に御直系たる歴代天皇にましますのである。その故に地球に、本來天爾の立君を定め玉ふて天壤無窮の大保證をなし玉ふは、實にこれ當然すぎる程の當然であつて、日星の炳として照らす如きであります。この意味より解したる天皇には地球全体の天皇たらねば、意味を爲さぬのであります。日本なる國名には勢ひ、三義を含んでゐる。

現在の日本國に立君を見たるは、地理上、歴史上深き神契神約(第四七頁參照)があるのであるが、これ小日本國であつて、地球全體に天祖の肇國樹徳の大本義が徹底したる曉きは、これ中日本國を見たのである、而して宇宙全體の本來相にタカアマハラが徹底したる曉は大日本國を實現したのであります。天皇の御本職としては實に大日本國の建設に存するのであります。この曉は大日本教法が一切教法を統一したる時たるのであります。天皇の御本質たる、誠にかくの如く、至大至嚴にましますのである、何物も之を形容し奉るものはないのであります。然るに輸入した西洋の學問では、天皇は主權者なりとした。而して、其の權力は絶對無限なりと説いてゐる。もとよりそれが誤りとはいはぬ。されども日本人の天皇を見るは、かゝる末なる形式の一事ではない。日本人は自ら服従者なりと觀じたることはない。然るに天皇は絶對の權力者なり、臣民は絶對の服従者なりと説いて、夫れで天皇と臣民との關係を説き盡したりとする學者もあるが、天皇を情味なき機械的形式的に説き來たつたとして、それが法理論上よりの天皇觀であらうかも知らぬが、我等は法律に

暗きものであつて、法律的に之を分析解説することは、爲し能はぬ。而し天皇の本質としては外國の國王や主権者と同斷すべきものでなく、教育勅語にのたまはく、

我皇祖宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ。

とある御勅語は、主権者と人民との御關係は大日本國を仲介として存する意を教へ玉ふてゐるのであります。肇國樹德が建國の事實たりその精神であつて、天皇は絶對の権力者なり臣民は絶對の服従者なりといふが如き、解説では日本國の天皇には當らぬのである。天皇は主権者にましますけれども、大御心は民治である。君民一體の共治を垂れ玉ふたのが歴代の天皇に在りましたので、天皇即大日本國天皇即國民と申上げて可なる御關係であるのであります。天皇を且に主権者の如くに分析解説し、天皇機關説を主張する法律學者がおりますけれども、我國體を解せざる學者の學說に過ぎないのである。我等は學者の言なるが故に眞なりと盲信してはならぬ、誑らかされてはならない。

大日本國即天皇と解する事は説明には困難であるが、事實は事實である。我等は

此の事實を百も千も承知して居りながら、天皇機關説に壓倒されたる所以は、この建國の大神勅を充分に解釋することが出来なかつたからであります。天孫降臨の本義が不徹底たるからであつたのです。

天皇と申上げれば、普通一般に、御玉體にます人格者としてのみ解して、御内實と爲し玉ふ大本義を解してゐるものはなかつたのであります。本居平田翁を始め皇典の研究者も、かくの如く天皇を偉大に解し奉らなかつたのであります。豊草原の瑞穂國なる天祖の神勅も、僅に極東日本としてのみ解釋して居つたに過ぎなかつたのであるから、皇典の眞實義が充分法律學者に反映せなかつたので、強ち學者をのみ、責むる要はないのであります。

天皇を且に主権者なりと解し、豊草原の瑞穂國を極東日本とのみ解する時は、天祖の大神勅も、たゞ天皇御一族の御繁榮のみ保證し玉ふ如くに聞ゆるであらう。現代の教育者が解説する處、概して表面にのみ現はれた字解に過ぎないのであつて、天皇降臨の大本義の如きは、永遠に解す能はざる謎の如き有様となつてゐたのであ



ります。

天孫降臨の御趣旨は實に大日本國建設にあつたのであります。億兆同心、至樂な理想郷實現にあつたのであります。國家は最高の道徳たるのであります。山川草木森羅萬象相凌燦するなく、相互扶助、共存共榮その生を樂ましめん爲にあつたので

「大祓」の祝詞には

「かく寄さし奉りし國中に、荒振神等をば神問はしに問はし玉ひ、神掃ひに掃ひ賜ひて、語問ひし磐根、樹立、草の垣葉をも語止めて、天の磐座放し天の八重雲を伊豆の千別きに千別きて天降し寄し奉りき」

と草木禽獸にまで大御心を垂れさせ玉ふてゐるので、天孫の御降臨たるや、宇宙大天皇の御變身たる御身柄を明かし玉ふてゐるので、萬神、萬生、萬有は皇孫の御肉身たるのであります。大日本國は皇孫の御肉體たるのであります。理はかくの如く高遠なるも、その實が伴はなかつたなら、權威がありません。現象界の常として、天祖は身をカギリミ界に御變相なし玉ふからは、器物に寓して、その天職を皇孫に

告げ玉ふは、これ當然の事でありませう。爰に三種の神器の繼承ある所以にして、特に「此鏡を視ること猶我を視るが如くせよ」と詔ふも深き理が存してゐるのであります。鏡は普通の鏡にあらず、天祖と御同體にます鏡である。即ち宇宙大精神であります。故に天皇は鏡の透明なるが如き意志の主體にましますのである。故に國民一切億兆の心は其のまゝに照映するのである。大日本國は君治であるが、同時に民治である。歴代天皇の大御心には、私なく八咫鏡の照應するが如く、日月と變らせ玉はぬのであります。時勢の變は中間に之を阻害する者を生じたけれども、譬へば叢雲の時に日月を蔽ふが如き有様で、日本國家は不斷に、天皇の御業に表はれて墮落より救ひ出されてゐるのである。天皇は一意皇祖皇宗の大御心による天治（アメシラス）あるのみであつたのであります。茲を大祓には、

「下津磐根に宮柱太敷く立て。高天原に千木高知りて。皇御孫の命の美頭の御舍仕奉りて。天の御影日の御影と隠り坐て。安國と平げく所知しめさむ」  
とある次第であります。宇宙大天皇はたとへ今日の御龍體に御變身遊ばしたとはい

へ御同一に在すのであります。天皇の御肉身には萬世一系聯綿たる「皇高天原命」の御血脈が流れてゐるのであります。萬神、萬生、萬有は全總して天皇の御肉身に在り、この故に天皇を上御一人と申上げ、又現人神と申し上げる。而して八百萬臣民は、陛下の御肉身たるが故に天皇は大御寶と至仁至愛を垂れ玉ふ。

大宇宙は一ケの有機體としての活動があるのであつて、各神、各人、各様の天職が存するのであります。たとへば一枚の瓦も之を除けば雨が漏る。一本の釘も之を抜けば家は壊れる。天皇は一箇の人體に於ける腦髓の如きであります。八百萬臣民は各器官に當り、天皇の御神業を扶翼し奉り、全體としての健康を見るのであります。腦髓は自然に腦髓たり、手足は自然に手足たるのであつて、耳が跳梁して我の全体たらんとしても、夫は不可能なる如く、君は常に君にして、臣は常に臣たるのであります。茲に忠孝の本義は自然に定まつてゐるのであります。かくの如く一ケの有機體として、各人各様の天職を果すところに、世は靜穩たるのであります。これ君民一體の共治たる天皇の天治ある所以であります。世の靜謐は一にかゝつて

億兆同心に存すのであります。教育勅語に「爾臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニスルハ是レ我國體ノ精華ニシテ」云々と詔はせ玉ふ次第であります。宇宙は一大管絃樂であつて、個々樂器に堪能なればとて、直に大合奏が行はれないのと同様に、各人個々の樂器をして億兆同心の域に達せしめなければならぬ。全体現今人類界始めの生涯は、いかに悲痛の境界であるか、いかに紛乱してゐるか、いかに喧囂の巷なるか、いかに不自由なる状態なるか、いかに汚濁してゐるか、擧げて數ふるもの悉く億兆同心に遠いものゝみといはねばならぬのである。宗教の如きは、先づ第一着に之か統一を圖らねばならぬのである。現今の如く、種々の宗教があつて、互に門戸牆壁を構へて相融合しないが如き、尤も、億兆同心に遠いものであるから、宗教家同士は互に封建的宗教の弊を矯めなければならぬ。各宗教の本尊會議なるものが開かれたならば、人間同士が議論するが如き殺風景なものでなく、神々はアハハと歡喜の中に、その御序列を正してゐられるのであらう。大日本天皇御一系たる「皇高天原命」に、萬神が序列を正して、そこに完全なる宗教統一があるのである。

大日本國には宗教統一をなして行く使命があるのであります。「大祓」の祝詞に

「高天原に神留ります。皇親神漏岐神漏美の命もちて。八百萬の神等を神集へに集へ玉ひ、神議りに議り賜ひて……」

とあるのである。天皇は八咫鏡に照らして天治ある如くに、草薙の劔によつて、大日本教を廣宣流布し玉ふ教化即ち天法が存するのである。天皇は八咫鏡に照らして天治(アメシラス)を遊ばすべく、草薙の劔によつて至嚴なる天法(アメミノリ)があるのであつて、天皇の御天職としては實にこの天治と天法との二つより外ないのである。天治は政にして、天法は祭であつて、祭政一致は斯様にして意義をなすので陛下が常に敬神し玉ふは、民治たるが爲めである。天皇の御教化は實に萬衆の師として、草薙の劔の威力を本來相顯揚の爲に、必然發動遊ばすのである。教育勅語に曰く。

朕惟ふに我が皇祖皇宗、國を肇むること宏遠に、徳を樹つること深厚なり。我が臣民、克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは、これ我が國體

の精華にして教育の淵源亦實に此に存す

と仰せ給ふは、これ即ち本來相の淵源を示させ給へる御聖旨である。日本書紀崇神天皇卷、十年秋七月の御詔勅に曰はく、

「導民之本、在於教化也。今既禮神祇、災害皆耗。然遠荒人等猶不受正朔、是未習王化耳。其選群郷二遣于四方、令知朕憲。若有不受教者、乃擧兵伐之。」

と仰せられ給ふは、これ神劔の發動であつて、廣宣流布の作法に基かせ給ふ御聖旨である。廣宣の勅命は斯く至嚴である。至嚴の劔威が發動する所に、廣宣の成就が伴ふのである。天皇の權威を以て、始めて、億兆同心、和平共樂を見るのであつて、地球の各地に宗教は數多く起りましたけれども、儒教は勿論、佛教も其の目的を達し得ませんでした。「天國は近けり悔い改めよ」と絶叫した基督の教も亦遂に其の貫徹は到底覺束ないものとなつてゐます。基督は「爾往て萬國の民に洗禮し、之を父子と聖靈の名に入れて弟子とせよ」と謂つてゐる。これ所謂十二使徒に對する命

令であつて、弟子が萬衆を父と子と聖靈の名に入れて導く方式である。佛教に於ては「願以三此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國」でこれ亦信徒が其の功德の擴充を本位として、普く萬衆に同行を奨むる方式である。基督教も佛教も、その宣布の形式は、かくの如くである。爰に百人あれば百人を個人々々に救済し、千人居れば千人を一々救済してゐるやうでは、到底幾億の衆生を容易に救済することは出来ません、これ、キリストの教も佛教も美辭のみ羅ねてあつて、其の内容が伴はぬ可憐なる宗教である。公衆衛生に於て團體的清潔法を重んずるが如く、ドウしても潔齋には、團體的威力を以てせねば効果は擧がらないのである。爰に於て國の存在が必要になつてくる。然し、同じ國にしても、國の資質が非常に大切なのである。地球上、數多の國は存在してゐるけれども、いづれの國でも之が任に當るといふ事は出来ないであります。即ち「無限の包容性と絶對の超越性」を帶んだ國でなくてはならぬ。これ即ち天祖が皇孫を豐葦原の瑞穗の國に降し玉ひ、地神猿田彦命が、皇孫を笠紫の日向の高千穂の久士布流多氣に案内し玉ふたのである。

「大日本國」には世界を潔齋して、タカアマハラを地上に招來して眞乎の根本的(永遠的・至樂的・眞我的・清淨的)歡喜と愉悅の滿ちた安國を實現するの使命が存するのであります。この大使命遂行の唯一の方法として、我大日本國に「大祓」の大儀が存してゐるのであります。天皇は御親しく齋主とならせ玉ふて、タカアマハラ(高天原)の大本義を徹底せしめ玉ふ御天職を有し玉ふてゐるのであります。眞乎の玄國は天皇の御權威を以てして始めて實現するのであります。その故にスメタカアマハラミコトの御名はスメミコト(天皇)がタカアマハラ(高天原)を大腹中に藏め玉ふた御神名でありまして、宇宙大本尊はこの神を外にしてはないのであります。爰に一言辭つて置かねばならぬのは、かくいふからとて、大日本國には、侵略的に獨占的の大使命があるといふのではない。肇國樹德なる大使命、言ひ換へれば君民共治の本義を一意専念、徹底せしめる事のみであつて、決して侵略的に國土を領有したり、壓迫的に服従を強いて、世界統一を夢みる主義ではないのである。前から述べてきた如く、君民共治の思想は宇宙を一個の有機體として億兆同心、相互